KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

第3回（2011年度）

関西学院大学卒業生調査報告書

2012年3月

関西学院大学高等教育推進センター

発刊の辞

2011 年に実施した第 3 回の『関西学院大学卒業生調査報告書』を刊行する運びとなりました。1951 年から 2011 年にわたる約 6,800 人の卒業生を対象としたアンケートにご協力いただいた多数の卒業生をはじめ、調査の実施ならびに『報告書』作成に当たられた方々に、心から感謝申し上げます。

日本の大学を取り巻く環境は、急激な変化を遂げています。IT 革命、グローバリゼーション、工業化社会から知識基礎社会への移行が進展し、世界の大学は「教育の質」を厳しく問われています。そのような中で、関西学院大学はどうなるのか。どうあるべきか。卒業年次ごとの回答から読み取れる期待や要望にも時代の流れが感じられますが、国内はもちろん、海外で活躍される同窓生の母校に寄せる想いや的確な評価と関心は、今後の関西学院大学の進路を選択する上で貴重な指標となるでしょう。

大多数の卒業生がかつて過ごした大学時代に充実感をもち、本学が「めざす人間像」である「“Mastery for Service”を体現する世界市民」として示す 7 要素を 6 割以上の卒業生が何らかの形で身につけておられ、中でも「他者への思いやり」は約 9 割の卒業生が身につけたうえで社会で活躍されています。母校に対しては、学問研究分野での知名度の向上と、教育カリキュラム、生涯学習プログラムの充実、また国際性、“Mastery for Service”（奉仕のための練達）の精神、外国語能力などの強化を求めています。同時に同窓生への大学情報提供の強化も求められています。西宮上ケ原、神戸三田、大阪梅田、東京丸の内、西宮聖和の 5 つのキャンパスの体制を確立し、次世代の「世界市民」の育成にふさわしい新しい展開を目指している関西学院大学にとって、この調査結果が多くの示唆を与え、それを発展の糧とするよう努めることをお約束して発刊のご挨拶とします。

2012 年 3 月 20 日
関西学院大学
学長　井上琢智

第３回卒業生調査報告書　目次

発刊の辞
第３回卒業生調査にあたって …… 1
調査結果
Ⅰ　調査の概要 …… 3
Ⅱ　教育効果
1　大学生活の充実度 …… 9
2　大学教育の有用度 …… 14
3　身に付けた能力・身に付けたかった能力 …… 16
4　外国語教育 …… 18
5　めざす人間像 …… 24
6　教育効果（まとめ） …… 26
Ⅲ　帰属意識
1　スクールモットーへの意識 …… 27
2　キリスト教の影響 …… 30
3　在学中に学んだことの有用度 …… 32
4　卒業生ネットワークの有利さ …… 34
5　関西学院のシンボル …… 36
6　校歌を歌えるか …… 38
7　帰属意識（まとめ） …… 40
Ⅳ　大学の評価
1　子供、身内に進学を勧めるか …… 41
2　関西学院の教育に望むこと …… 44
3　関西学院に望むこと …… 46
4　関西学院のイメージ …… 48
5　大学の評価（まとめ） …… 50
Ⅴ　同窓向けサービス
1　大学の情報提供 …… 53
2　大学への訪問 …… 60
3　卒業後の同窓とのつながり …… 63
4　寄付 …… 65
5－a　関西学院会館利用の認知度と利用目的 …… 70
5－b　大学図書館利用の認知度 …… 75
5－c　大阪梅田・東京丸の内キャンパス利用の認知度 …… 77
6　大阪梅田・東京丸の内キャンパスにおける参加希望プログラム …… 79
7　同窓向けプログラムの認知度 …… 83
8　同窓向けサービス（まとめ） …… 85
Ⅵ　卒業生の職業・職種
1　職業・職種 …… 87
2　勤務先の業種 …… 89
3　勤務先での職種 …… 93
Ⅶ　関西学院大学への意見や要望（自由記述）…… 95
Ⅷ　全体のまとめ …… 99
付録（調査票）…… 103
あとがき …… 115

第３回卒業生調査にあたって

１．卒業生調査の発足とその後の経緯

今回３回目となる卒業生調査であるが、その最初の調査は 1999 年に当時、総合教育研究室の室長をされていた故安保則夫総合政策学部教授のリーダーシップの元で実施された。学院創立 111 周年、人間で言えば皇寿にあたる 2000 年に向けて、初めての卒業生調査を創立記念事業の一環として実施したいと願った安保教授の熱い思いは、その調査報告書の巻頭に「関学初の本格的卒業生調査―実施の経緯と趣旨―」として記されている。結局、提言した時にはすでに記念事業については決定済みであったため、総合教育研究室で卒業生調査委員会を立ち上げ、その委員長として、報告書をまとめられたのである。

このときに、卒業生の卒業年次を 5 年おきとしたことから、2 回目の調査は 6 年後の 2005 年に、第 1 回目の調査対象年の次の年の卒業生を対象に行われた。今回、同じ考えで、6 年後の 2011 年にさらにもう 1 年次の年の卒業生を対象として調査を行ったものである。

２．今回の調査の趣旨と今後の展望

しかし、このような調査は本来、大学として当然行うべき事であり、卒業生調査のたびに、有志が研究会として調査をすることの了承を得、その決定の元に調査委員会を立ち上げるという形で、いわば教職員のボランティア的な尽力に依存する事業になってしまってはいけないという思いから、今回は総合教育研究室の仕事を引き継いだ高等教育推進センターが、センターの業務として取り組むこととした。

もちろん、実際の調査に関する仕事を行うにあたって、調査実施委員会を立ち上げるという意味では、形の上ではこれまでと変わっていないが、委員会の構成にあたって、個人ベースでお願いするのではなく、大学各部局の協力を求める形で構成し、それぞれの部局の問題意識をくみ上げる事に特に留意した。

このような卒業生調査が、大学の当然取り組むべき業務として、今後も継続的に組織的に行われていく必要があるということは、この調査に参加したメンバー全員の総意であろうし、現行の 6 年おきというスケジュールも、もう少し短くする必要がある。

先に述べたように、この調査は 6 年ごとという仕組みで考えられてきた。それによって、卒業した直後の卒業生から 5 年ごとに調査対象を選んでゆけば、第 5 回調査までは調査対象が重複しないということである。しかし、もちろん、そのようにしなければならない必然性はなく、何年おきであろうと、これまでの調査年次と異なる年次を選んで調査することは当然可能であるし、また逆に同じ年次の卒業生、さらには、同じ卒業生に例えば 10 年後に意見が変わっているかどうか調査する事の意味なども考えて行かねばならない。

卒業生アンケート調査の重要性については、本報告書の自由記述に関する報告、あるいは高等教育推進センターの紀要への研究ノートとして前回の調査の自由記述の分析において述べたので、ここでは繰り返さないが、今後、この調査がなおいっそう充実して行くことを願っている。

最後に、この報告者作成に協力していただいた委員会メンバー、また何よりもアンケートの協力していただいた卒業生の方々に感謝したい。この調査報告者が、関学の今後の発

展の一助となることが、そのような方々への何よりのお礼となるであろう。ねがわくば、この報告書に示された卒業生の熱い思いが、翼に乗って、すべての関学関係者の胸に届かんことを。

高等教育推進センター長
久保田　哲夫

Ⅰ　調査の概要

１．調査方法

第 3 回卒業生調査の方法は以下の通りである。

調査期間　　：2011 年 8 月 1 日（月）～2011 年 11 月 1 日（木）
調査対象　　：関西学院大学の学部卒業生 6,815 名（抽出率 17.9%）
対象者の抽出：調査対象の卒業年を、調査年である 2011 年（平成 23 年）から 5 年毎にさかのぼり、新制大学第 2 期の 1951 年（昭和 26 年）までの 13 階層とした。対象年の卒業生の総数 38,113 人より、卒業年毎に 5 分の 1 を抽出した後、海外在住者、住所不明者、物故者を除いた 6,815 名を調査対象とした。
調査方法　　：2011 年 8 月 1 日（月）に 6,815 名の対象者に調査票と返信用封筒を送付し、提出期限は 2011 年 8 月 31 日（水）とした。回答は無記名とし、提出方法は返信用封筒での郵送とした。期限後にも届いた調査票を含め、2011 年 11 月 1 日（木）までに到着した有効回答票 1,978 について、集計・分析を行った。
回収数　　：1,978（回収率 29.0%）

２．調査票の構成

今回使用した「第 3 回卒業生調査」の調査票は、本報告書の巻末に添付している。
今回は、「教育効果」「帰属意識」「大学の評価」「同窓向けサービス」「卒業生の職業・職種」という観点から質問の見直しを行い、29 の質問項目を設けた。また、最後に「卒業生として、関西学院に期待することなど」をたずねる自由記述欄を設けた。

３．グラフと表

比率については、個々の数値を小数点第２位で四捨五入しているため、必ずしも合計が 100%とならない。また、グラフの作成については、無回答・無効回答をのぞいている。

４．回収率

今回の回収率は、29.0%であった。6 年前の調査の 37.1%と比べると 8.1 ポイントの減少となった。卒業年別、学部別の回収数・回収率は表 1-1 の通りである。卒業年毎に回収率をみると、1986 年以前の卒業生の回収率は平均の回収率を上回っており、特に、1971 年以前の卒業生は 38.6%～50.3%と高い回収率であった。反対に 1991 年以降の卒業生の回収率は平均より低く、特に 2001 年以降卒業の若い世代の回収率は 19.8%～22.8%と低い。卒業学部別に回収率をみると、社会学部が 30.9%と最も高く、次いで法学部 30.4%、商学部 30.0%と続く。文学部、神学部、経済学部の回収率も 28.2%、28.0%、27.5%とほぼ同じ回収率であったが、理工学部が 22.9%、1995 年創設の総合政策学部が 21.9%と低かった。

５．回答者の属性

卒業年、学部別の回答者の属性は表 1-2、1-3 の通りである。また、卒業年毎、学部毎に、母集団での実構成比と回答者の構成比は、図 1-1、図 1-2 の通りである。すべての学部、卒業年において、母集団の実構成比と回答者の構成比とに大きな差はない。

図 1-1　卒業年別卒業生分布

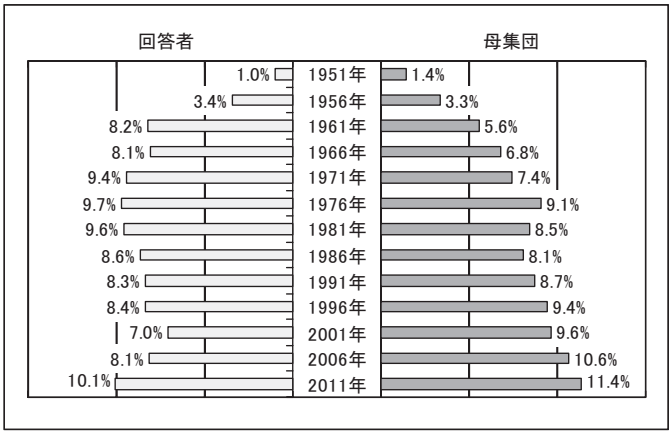
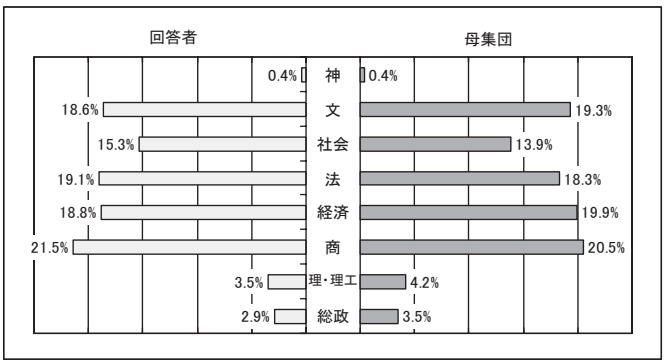


図 1-2　学部別卒業生分布



母集団：調査対象年の卒業生の総数 38,113人

次に、回答者の男女、中学部・高等部出身、クラブ・サークルなど団体への加入の有無については、図 1-3、図 1-4、図 1-5 の通りである。回答者の男女の内訳（図 1-3）をみると、男性 69.4%、女性 30.6%である。第 1 回、第 2 回の調査でも男性 7 割、女性 3 割という割合であった。母集団における男女の内訳も男性 70.1%、女性 29.9%であり、性別においても、母集団と回答者の構成比に差は見られない。

回答者の出身校（図 1-4）をみると、関西学院の中等部、高等部の出身者は 9.4%で、そうでない回答者は 90.6%である。大学時代の団体加入（クラブ・サークル等）については（図 1-5)、「入っていた」は 74.2%、「入っていない」は 25.8%である。また、回答者の現在の住居地域(図 1-6)は、日本全国にわたり、海外からも回答があった。内訳は近畿在住者が 68.4%と最も多く、続いて関東が 17.0%と、近畿及び関東在住者がほとんどを占めている。

図 1-3　男女の内訳

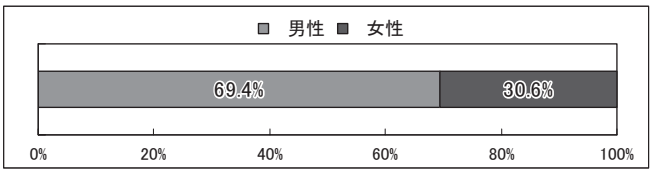


図 1-4　出身校の内訳

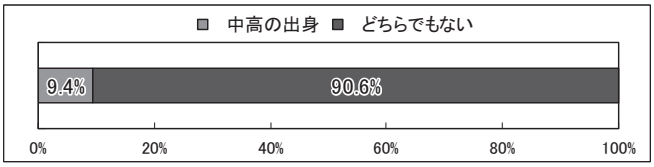


図 1-5　団代加入の有無

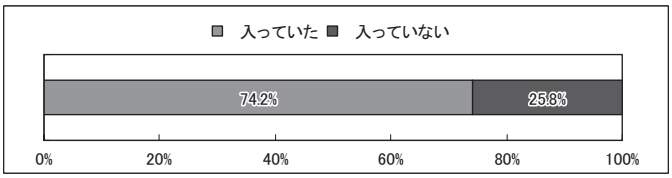


図 1-6　現在の住居地域の内訳

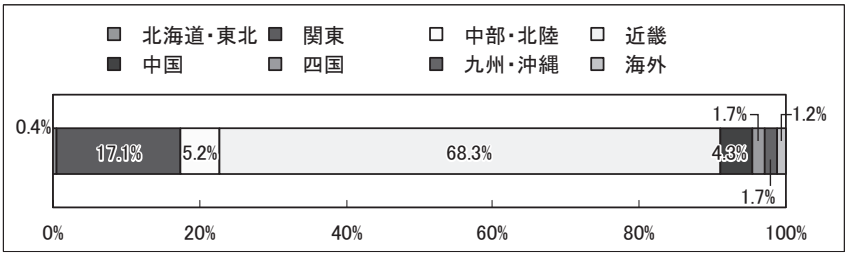


表１－１　サンプルの構成並びに回収数・回収率

卒業年		計	学部別								
			神	文	社会	法	経済	商	理・理工	総政	人福
1951年 昭和26年	卒業生数	543		103		95	345				
	ピックアップ数	109		21		19	69				
	海外在住・不明・物故者	67	－	14	－	12	41	－	－	－	－
	サンプル数	42		7		7	28				
	回収数	20		5		3	12				
	回収率	47.6%		71.4%		42.9%	42.9%				
1956年 昭和31年	卒業生数	1,271	18	259		342	319	333			
	ピックアップ数	254	3	52		69	63	67			
	海外在住・不明・物故者	86	2	13		22	23	26	－	－	－
	サンプル数	168	1	39		47	40	41			
	回収数	67	0	12	3	18	16	18			
	回収率	39.9%	0.0%	30.8%	－	38.3%	40.0%	43.9%			
1961年 昭和36年	卒業生数	2,129	7	402		546	481	693			
	ピックアップ数	426	1	81		109	96	139			
	海外在住・不明・物故者	106	0	22		22	24	38	－	－	－
	サンプル数	320	1	59		87	72	101			
	回収数	161	1	25	1	40	41	53			
	回収率	50.3%	100.0%	42.4%	－	46.0%	56.9%	52.5%			
1966年 昭和41年	卒業生数	2,586	9	514	343	574	568	500	78		
	ピックアップ数	517	2	102	69	115	113	100	16		
	海外在住・不明・物故者	94	0	23	13	29	13	13	3	－	－
	サンプル数	423	2	79	56	86	100	87	13		
	回収数	158	0	24	20	40	35	38	1		
	回収率	37.4%	0.0%	30.4%	35.7%	46.5%	35.0%	43.7%	7.7%		
1971年 昭和46年	卒業生数	2,837	5	509	364	643	582	620	114		
	ピックアップ数	567	1	102	73	128	117	124	22		
	海外在住・不明・物故者	88	1	16	13	17	21	17	3	－	－
	サンプル数	479	0	86	60	111	96	107	19		
	回収数	185	0	22	25	46	43	41	8		
	回収率	38.6%	0.0%	25.6%	41.7%	41.4%	44.8%	38.3%	42.1%		
1976年 昭和51年	卒業生数	3,469	6	717	579	609	735	717	106		
	ピックアップ数	694	2	143	116	122	147	143	21		
	海外在住・不明・物故者	84	1	22	11	23	10	15	2	－	－
	サンプル数	610	1	121	105	99	137	128	19		
	回収数	190	0	36	47	29	33	38	7		
	回収率	31.1%	0.0%	29.8%	44.8%	29.3%	24.1%	29.7%	36.8%		
1981年 昭和56年	卒業生数	3,221	6	616	525	625	659	681	109		
	ピックアップ数	644	1	124	105	125	131	137	21		
	海外在住・不明・物故者	52	0	16	9	9	6	10	2	－	－
	サンプル数	592	1	108	96	116	125	127	19		
	回収数	187	0	40	32	34	38	35	8		
	回収率	31.6%	0.0%	37.0%	33.3%	29.3%	30.4%	27.6%	42.1%		
1986年 昭和61年	卒業生数	3,081	15	600	516	572	617	650	111		
	ピックアップ数	617	3	120	104	114	123	130	23		
	海外在住・不明・物故者	53	0	14	13	15	6	5	0	－	－
	サンプル数	564	3	106	91	99	117	125	23		
	回収数	169	2	28	24	30	34	42	9		
	回収率	30.0%	66.7%	26.4%	26.4%	30.3%	29.1%	33.6%	39.1%		
1991年 平成3年	卒業生数	3,331	15	673	550	655	673	649	116		
	ピックアップ数	666	3	134	110	131	135	130	23		
	海外在住・不明・物故者	44	1	11	4	9	8	11	0	－	－
	サンプル数	622	2	123	106	122	127	119	23		
	回収数	163	1	35	21	34	28	37	7		
	回収率	26.2%	50.0%	28.5%	19.8%	27.9%	22.0%	31.1%	30.4%		
1996年 平成8年	卒業生数	3,594	19	775	575	551	722	820	132		
	ピックアップ数	719	4	155	115	110	144	164	27		
	海外在住・不明・物故者	66	1	18	12	3	15	14	3	－	－
	サンプル数	653	3	137	103	107	129	150	24		
	回収数	164		37	32	28	30	36	1		
	回収率	25.1%	0.0%	27.0%	31.1%	26.2%	23.3%	24.0%	4.2%		
2001年 平成13年	卒業生数	3,669	14	710	495	537	660	758	127	368	
	ピックアップ数	733	2	142	99	108	132	151	26	73	
	海外在住・不明・物故者	37	0	5	5	7	4	9	2	5	－
	サンプル数	696	2	137	94	101	128	142	24	68	
	回収数	138		32	26	12	17	34	5	12	
	回収率	19.8%	0.0%	23.4%	27.7%	11.9%	13.3%	23.9%	20.8%	17.6%	
2006年 平成18年	卒業生数	4,056	17	698	594	578	602	723	366	478	
	ピックアップ数	812	4	139	119	116	120	145	73	96	
	海外在住・不明・物故者	31	1	5	7	2	3	5	2	6	－
	サンプル数	781	3	134	112	114	117	140	71	90	
	回収数	159	2	33	26	32	13	22	16	15	
	回収率	20.4%	66.7%	24.6%	23.2%	28.1%	11.1%	15.7%	22.5%	16.7%	
2011年 平成23年	卒業生数	4,326	31	791	744	654	624	661	334	486	1
	ピックアップ数	865	6	158	149	131	124	133	66	98	
	海外在住・不明・物故者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	サンプル数	865	6	158	149	131	124	133	66	98	
	回収数	197	1	36	43	27	28	26	7	29	
	回収率	22.8%	16.7%	22.8%	28.9%	20.6%	22.6%	19.5%	10.6%	29.6%	－
合計	卒業生数	38,113	162	7,367	5,285	6,981	7,587	7,805	1,593	1,332	1
	ピックアップ数	7,623	32	1,473	1,059	1,397	1,514	1,563	318	267	
	海外在住・不明・物故者	808	7	179	87	170	174	163	17	11	
	サンプル数	6,815	25	1,294	972	1,227	1,340	1,400	301	256	
	回収数	1,978	7	365	300	373	368	420	69	56	
	回収率	29.0%	28.0%	28.2%	30.9%	30.4%	27.5%	30.0%	22.9%	21.9%	－

※　対象は3月卒業生のみ
※　学部・卒業年が記入されていない回答(20件)は、学部別・学年別の集計数に含んでいません。

表1-2　回答者の属性（卒業年別）

カテゴリー計(%)			卒業年												
			1951年 昭和26年	1956年 昭和31年	1961年 昭和36年	1966年 昭和41年	1971年 昭和46年	1976年 昭和51年	1981年 昭和56年	1986年 昭和61年	1991年 平成3年	1996年 平成8年	2001年 平成13年	2006年 平成18年	2011年 平成23年
卒業生の分布		38,113	543	1,271	2,129	2,586	2,837	3,469	3,221	3,081	3,331	3,594	3,669	4,056	4,326
実構成比		100.0%	1.4%	3.3%	5.6%	6.8%	7.4%	9.1%	8.5%	8.1%	8.7%	9.4%	9.6%	10.6%	11.4%
回答者数全体		1,958	20	67	161	158	18	5190	187	169	163	164	138	159	19
卒業年別構成比		100.0%	1.0%	3.4%	8.2%	8.1%	9.4%	9.7%	9.6%	8.6%	8.3%	8.4%	7.0%	8.1%	10.1%
性別:	実数	%													
男性	1,355	69.4%	19	63	154	139	160	124	138	132	110	93	73	70	80
女性	597	30.6%	1	4	7	18	25	65	50	37	53	71	63	88	115
出身:															
中高の出身	185	9.4%	3	112	4	17	17	10	14	24	12	17	13	13	10
どちらでもない	1,777	90.6%	17	56	138	141	168	18	1174	14	6151	147	125	146	187
住居区分:															
北海道・東北	7	0.4%					1			1			2	2	1
関東	324	17.1%	1	7	17	22	31	20	35	36	37	34	25	35	24
中部・北陸	99	5.2%		3	9	6	9	12	9	6	10	10	7	11	7
近畿	1,296	68.3%	17	55	119	116	126	135	116	106	96	89	86	96	139
中国	82	4.3%	1		6	7	7	11	7	7	5	9	7	4	11
四国	33	1.7%			2	2	5	4	4	3	2	2		3	6
九州・沖縄	33	1.7%		1	2	1	1	2	8	3	4	4	2	2	3
海外	23	1.2%						1	2	3	5	7	3	1	1
団体加入:															
入っていた	1,453	74.2%	12	36	95	108	145	139	143	142	137	137	101	104	154
入っていない	504	25.8%	7	31	67	49	39	52	45	27	26	27	36	55	43

※ 属性に関する質問に無記入や複数回答がある回答についてはカウントしていないため、回収総数と合計は一致しません。

表1-3　回答者の属性（学部別）

カテゴリー計(%)			学部								
			神	文	社会	法	経済	商	理・理工	総政	人福
卒業生の分布		38,113	162	7,367	5,285	6,981	7,587	7,805	1,593	1,332	1
実構成比		100.0%	0.4%	19.3%	13.9%	18.3%	19.9%	20.5%	4.2%	3.5%	0.0%
回答者数全体		1,958	7	365	300	373	368	420	69	56	—
学部別構成比		100.0%	0.4%	18.6%	15.3%	19.1%	18.8%	21.5%	3.5%	2.9%	
性別:	実数	%									
男性	1,359	69.4%	4	129	134	323	331	365	56	17	
女性	600	30.6%	3	238	163	53	36	55	3	39	
出身:			7		301	373	357	421	69	56	
中高の出身	185	9.4%		10	16	34	62	51	1	1 1	
どちらでもない	1,784	90.6%	7	360	285	342	307	370	58	55	
住居区分:											
北海道・東北	7	0.4%		1	1		1	2	2		
関東	323	17.0%	1	51	51	50	76	74	9	11	–
中部・北陸	99	5.2%	1	19	13	19	222	1	3	1	
近畿	1,300	68.4%	4	247	202	259	231	271	48	38	
中国	82	4.3%	1	17	14	14	14	15	4	3	
四国	33	1.7%		8	4	11	2	7		1	
九州・沖縄	33	1.7%		7	8	8	1	8	1		
海外	23	1.2%		5		3	6	6	2	1	
団体加入:											
入っていた	1,458	74.2%	4	274	242	257	27	5333	37	36	
入っていない	506	25.8%	3	95	5	917	94	86	32	20	

※ 属性に関する質問に無記入や複数回答がある回答についてはカウントしていないため、回収総数と合計は一致しません。
※ 人間福祉学部卒業生は1名のため、サンプル対象から除外しています。

Ⅱ－１　大学生活の充実度

Ｑ１．あなたの大学時代の生活は、どの程度充実していましたか。
　　１　非常に充実していた　　２　かなり充実していた
　　３　どちらとも言えない　　４　あまり充実していなかった
　　５　全然充実していなかった

Q1-1 では大学生活の充実度をたずねた。「あなたの大学時代の生活は、どの程度充実していましたか。」という問いに対して、「非常に充実していた」「かなり充実していた」と肯定的に回答した割合が 73.2%であった。これは前回の 70.2%をやや上回っている。

卒業年別に見ると、肯定的に回答した人の比率は、1966 年と 1971 年が低くなっている。この 2 つの回答内容を比較してみると、1966 年では「非常に充実していた」が 10.1%と他の年より少なく、一方 1971 年は「全然充実していなかった」が 9.2%と他の年より多い。1971 年以降は 1996 年に一度落ち込んでいるが上昇傾向にある。

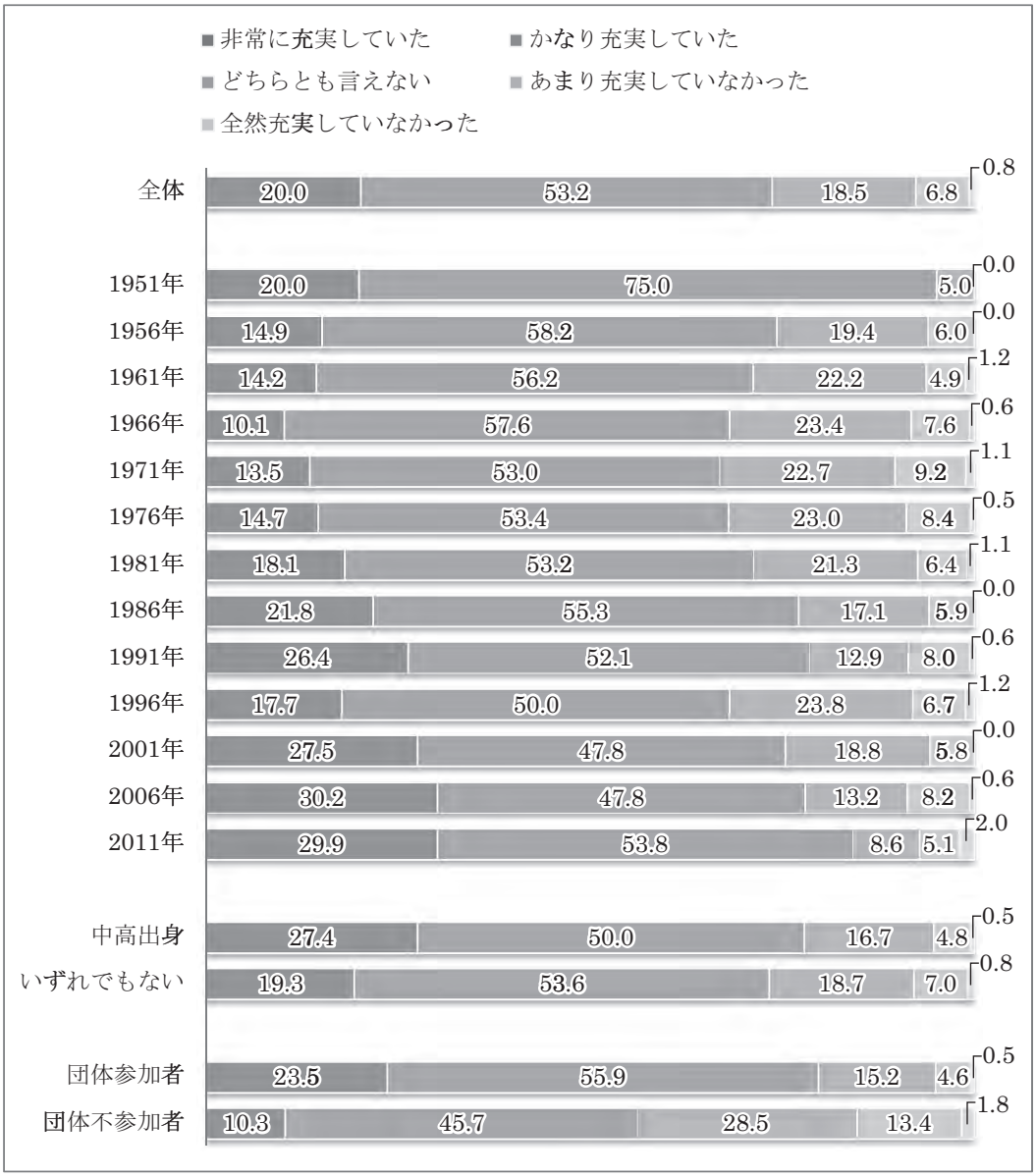
学部別では、前回の卒業生調査でみられた傾向と同様に神学部が一番高く、ついで総合政策学部となっている。以下、商学部、社会学部と続いている。

中等部・高等部のいずれかに在籍していた卒業生は、77.4%が肯定的に回答しているのに対し、そうでない卒業生は 72.8%と、より長く関西学院で過ごした卒業生の方が大学時代の生活を充実していたと評価している。中高から一貫して進学することは、環境が変わる入学時に引き起こしやすい不適応がない、あるいは、適応するまでの期間が短くてすむ、などと言った継続的な環境で教育を受けられることが理由として考えられる。

男女別では、肯定的に回答した割合が男子 71.7%、女性 77.1%と女性のほうが高い。これも前回同様の結果であるが、今回はより差が大きくなっている。

団体への参加の有無で比較すると、参加者の 79.4%が肯定的に回答しているのに対し、不参加者は 55.9%と差が非常に大きい。これは、過去 3 回の卒業生調査を通じて一貫した結果である。このことは、大学在学時にクラブ・サークル活動に参加していたことが生活の充実度に大きく影響すると考えられる。一方団体に所属していない学生で充実度を高く評価している卒業生の内容・理由を詳しく分析することは、本学にとってこれからの環境作りあるいはカリキュラムの提供への示唆となるだろう。

図 2-1 大学時代の生活の充実度



Ｑ１－２．大学時代の生活で、何が充実していましたか。
　　１　授業や研究　　２　クラブ・サークル活動
　　３　ボランティア・社会奉仕活動　　４　大学外での生活
　　５　その他　（　　）

Q1-2.では「大学時代の生活で、何が充実していましたか」をたずね、「授業や研究」「クラブ・サークル活動」「ボランティア・社会奉仕活動」「大学外での生活」「その他」から選んでもらった。

全体では、約半数の 50.1%が「クラブ・サークル活動」を選択している。次いで「大学外の生活」(27.4%)、「授業や研究」(23.1%)が選択されている。

Q1-1 の回答との関係をみていると、「クラブ・サークル活動」を充実内容にあげていた割合は、「非常に充実していた」と回答した人 70.6%、「かなり充実していた」と回答した人の 55.9%であった。これらの結果からも「クラブ・サークル活動」と『生活の充実度』との関連の強さがうかがわれる。学生の正課活動である「授業・研究」については、「非常に充実していた」人の 26.1%、「かなり充実していた」人の 26.3%と 2 番目に多い選択率であった。また、「あまり充実していなかった」「全然充実していなかった」と『生活の充実度』が低いほど「授業や研究」「クラブ・サークル活動」の割合が低く、「学外での生活」の割合が高くなっている。

卒業年別に見ると、1951 年～56 年卒業、1961 年～86 年卒業、1991 年～2011 年卒業という年代で傾向が異なる。1951～56 年卒業の年代は、35.0%(1951 年)、38.8%(1956 年)と「授業や研究」が充実していたとする割合が平均よりも高くなっている。1961 年~86 年卒業の年代は、「クラブ・サークル活動」の割合が上下しながらも、1961 年の 28.4%から 65.3%と上昇するのに対し、「授業や研究」が 38.8%(1956 年)から 17.1%(1986 年)、「その他」が 14.9%(1956 年)から 5.9%(1986 年)と減少している。「その他」には「友人との交流」が充実していたと回答した人が多い。1991 年から 2011 年卒業の年代では、「クラブ・サークル活動」が 1986 年の 65.3%をピークに、2006 年の 40.9%まで下がる一方、「授業・研究」は 17.1%(1986 年)から 28.9%(2006 年)、「大学外での生活」は 26.5%(1986 年)から 39.0%(2006 年)と大きく伸びている。全体の傾向では、『生活の充実度』の低い人に「大学外の生活」を選択している傾向があるが、卒業年別の充実度は 1996 年以降増加している事を考えると、若い層では学内活動だけではなく学外生活も含めてトータルに『生活の充実度』を評価しているようである。

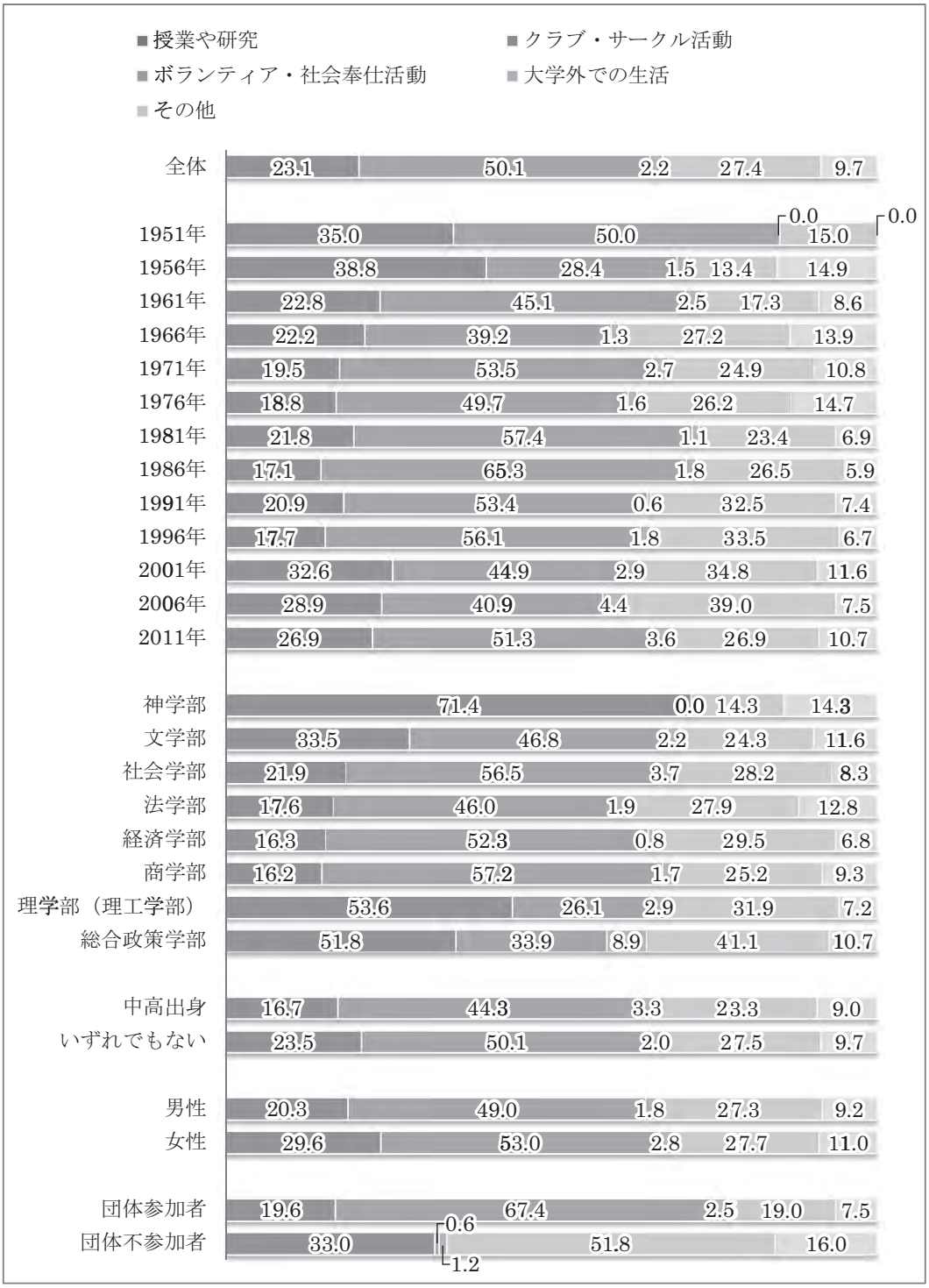
学部別では、「授業・研究」は理学部(理工学部)が 53.6%と高く、総合政策学部の 51.8%、文学部の 33.5%と続いている。「クラブ・サークル活動」は商学部の 57.2%で、社会学部の 56.5%、経済学部の 52.3%となっている。総合政策学部は、生活が充実していたと評価する割合が高いが、その内容では「大学外の生活」が 41.1%と他学部にくらべて高い。また、総合政策学部では、「ボランティア・社会奉仕活動」が 8.9%あり、これは全体での 2.2%と比較して目立って大きい。

男女別では、「授業・研究」、「クラブ・サークル活動」について、女性がそれぞれ、29.6%、

53.0%と男性の 20.3%、49.0%に比べて高く、全体傾向を反映している。

団体の参加・不参加で比較すると団体参加者の 67.4%が充実度の内容として「クラブ・サークル活動」を選択している。しかし、一方では「授業･研究」19.6%、「大学外の生活」19.0%を選択する者も少なくない。団体不参加者の充実内容は主に「大学外の生活」と「授業･研究」に二分されており「大学外の生活」51.8%、「授業･研究」33.0%と大学生としての正課活動以外に充実度を認めている。

図 2-2 大学時代の生活で充実していたこと（Q1-2）



Ⅱ－２　大学教育の有用度

Ｑ２．大学時代に学んだことや経験は、現在の生活にどの程度役立っていると思いますか。
それぞれについて１～６の数字でお答えください。

1　非常に役に立っている
2　かなり役に立っている
3　どちらとも言えない
4　あまり役に立っていない
5　全然役に立っていいない
6　該当しない

a）キリスト教関連科目、チャペル	1……2……3……4……5……6
b）外国語	1……2……3……4……5……6
c）上記ａ）ｂ）以外の一般教養的な科目	1……2……3……4……5……6
d）専門科目	1……2……3……4……5……6
e）ゼミ（卒論作成等を含む）	1……2……3……4……5……6
f）クラブ・サークル活動（宗教活動を含む）	1……2……3……4……5……6
g）上記以外のボランティア・社会奉仕活動	1……2……3……4……5……6
h）その他　（　　）	1……2……3……4……5……6

Q2 では、「キリスト教関連科目、チャペル」(以下、キリスト教科目)、「外国語」、「チャペル等、外国語以外の一般教養的な科目」(以下、一般教養科目)、「専門科目」、「ゼミ(卒論作成等を含む)」(以下、ゼミ)、「クラブ・サークル活動(宗教活動を含む)」(以下、クラブ・サークル)、「上記以外のボランティア・奉仕活動」(以下、ボランティア)「その他」について現在の生活にどの程度役立っていると思うかをたずねた。

全体では、「非常に役に立っている」「かなり役に立っている」と有用であったと回答した比率は、「クラブ・サークル」46.7%、「専門科目」43.2%、「ゼミ」39.7%、「一般教養科目」29.0%の順であり、この順番は前回と同様である。

卒業年別の傾向を見ると、「キリスト教科目」は年代毎に評価が低くなる傾向にあり、他の活動は 2001 年以降の卒業生では高くなる傾向を見せている。特に「ボランティア」が有用であったと評価する割合が高まっている。一方、1996 年の卒業生は、すべての項目で他の年度と比較して評価が低い。

学部別では、「外国語」「ボランティア」については総合政策学部で、「専門科目」については理学部(理工学部)で、有用と評価する割合が高いことが目立つ。

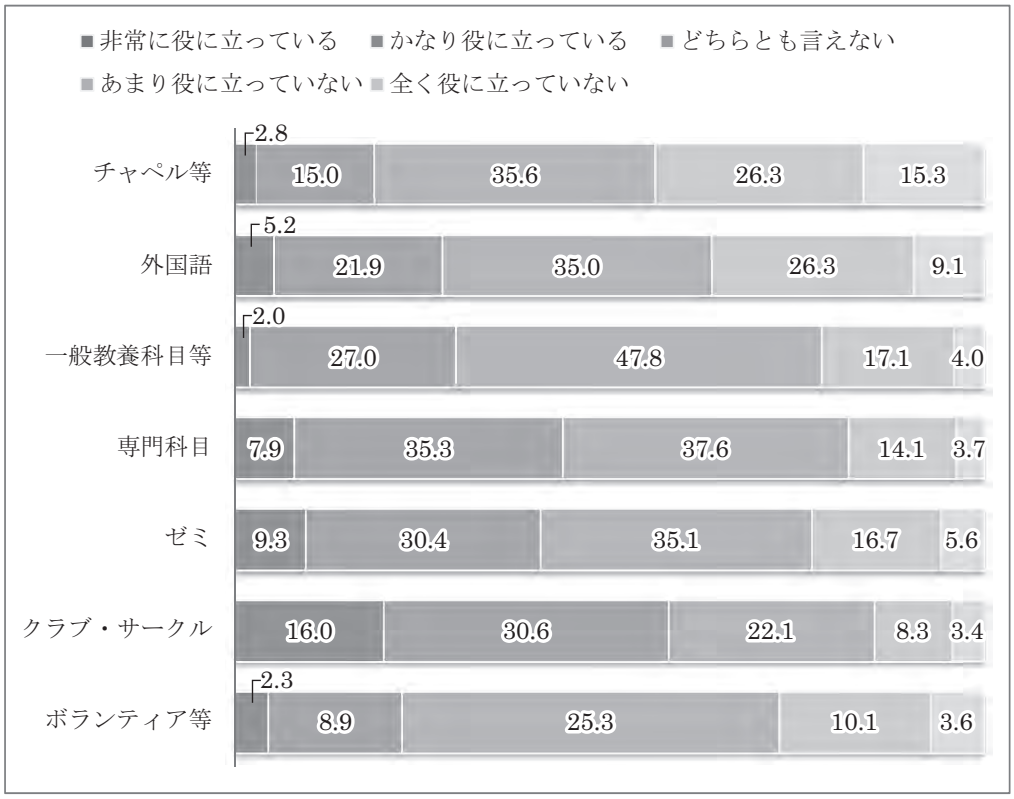
中高出身、団体への参加では、中高出身者がそうでない者と比較して「キリスト教科目」を、団体参加者が非参加者と比較して「クラブ・サークル」を有用であったと評価する割合が高い。

男女別では「ボランティア」について有用と回答した人は、男性 9.6%に対し、女性は 14.8%と高いことが目立つ。それ以外の項目では大きな男女差は見られない。

学部、中高出身者、団体参加者で見られる傾向は、それぞれの特性と関連する傾向である。

1996 年の卒業生がいずれの項目、たとえば、「外国語」では 17.7%(平均 27.0%)、「専門科目」では 33.5%(平均 43.2%)、「ゼミ」では 31.1%(平均 39.7%)と他の卒業年と比較して有用性を低く評価していることについて、何が問題であったかの検討が必要である。

図 2-3 大学教育の有用度（Q2）



Ⅱ－３　身に付けた能力、身に付けたかった能力

Ｑ３．在学中に身に付いた能力、よくやったことを、次の中から３つ以内で選んでください。

1	一般的な教養	2	専門的知識
3	外国語能力	4	ＯＡ・ＩＴ機器などの使用法
5	プレゼンテーション能力	6	ディベート能力
7	コミュニケーション能力	8	資格の取得
9	海外留学	10	クラブ・サークル活動
11	友人をつくる	12	人生について考える
13	その他　（　　）		

Ｑ４．在学中に身に付けたかった能力、もっとしておけば良かったと思うことを、次の中から３つ以内で選んでください。

1	一般的な教養	2	専門的知識
3	外国語能力	4	ＯＡ・ＩＴ機器などの使用法
5	プレゼンテーション能力	6	ディベート能力
7	コミュニケーション能力	8	資格の取得
9	海外留学	10	クラブ・サークル活動
11	友人をつくる	12	人生について考える
13	その他　（　　）		

Q3 で「身に付いた能力、よくやったこと(以下、身に付いた能力)」を、続く Q4 で「身に付けたかった能力、しておけば良かったと思うこと(以下、身に付けたかった能力)」を 13 の同じ選択肢から 3 つまでを選択してもらった。

「身に付いた能力」として、多く選ばれたのは「友人をつくる」(56.6%)、「クラブ・サークル活動」(43.3%)、「一般的な教養」(42.4%)の順となっており、低かったのは、「ディベート能力」(3.5%)、「海外留学」(3.7%)、「OA・IT 機器などの使用法(以下、ICT 能力)」(4.7%)の順である。

一方、「身に付けたかった能力」では、「外国語能力」が 62.1%と突出しており、以下「専門知識」(35.9%)、「資格の取得」(35.1%)の順となっており、低かったのは、「人生について考える」(6.5%)、「友人をつくる」(8.3%)、「クラブ・サークル活動」(10.3%)である。

このことから友人を作ったり、クラブ・サークル活動については十分行ったと思う一方、外国語能力の習得や、資格取得、海外留学などをもっと学生時代に行えばよかったと考えているように思われる。

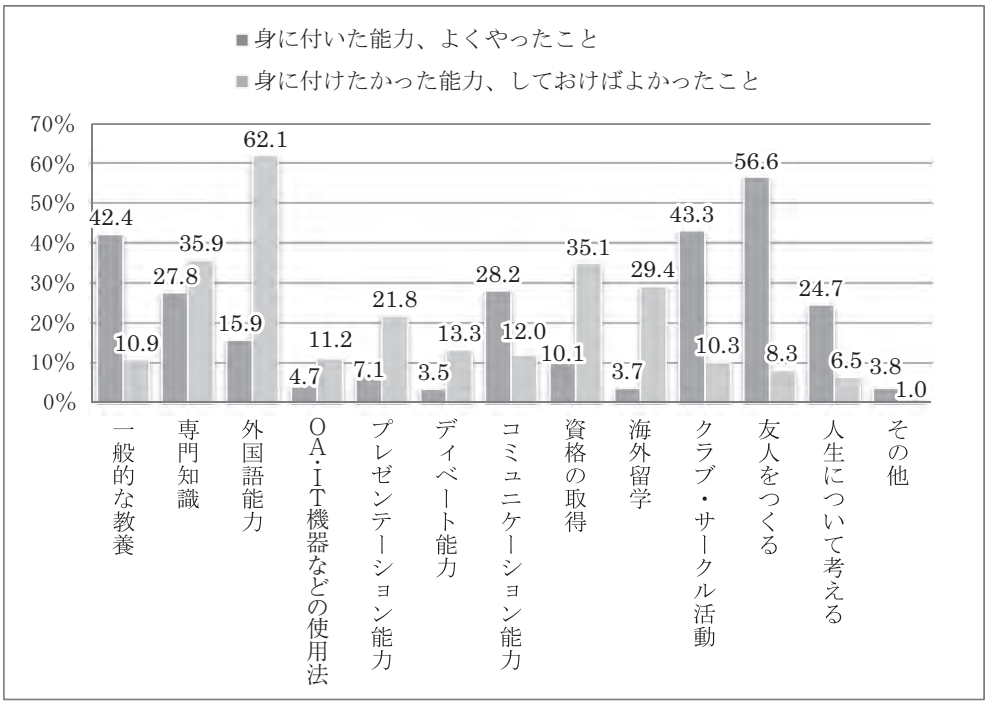
卒業年別では、「身に付いた能力」としては、最近 15 年ほどで「プレゼンテーション能力」(1996 年 6.1%、2011 年 16.8%)や「ディベート能力」(1996 年 3.7%、2011 年 7.1%)「ICT 能力」(1996 年 5.5%、2006 年 15.7%)が伸びている。ただし、「ICT 能力」は 2011 年の卒業生は 6.1%と低く、「身に付けたかった能力」でも同様の傾向が見られる。2011 年の卒業生では「ICT 能力」が 2006 年の 23.9%から 2011 年は 14.7%と下がる一方、「コミュニケーション能力」は 2006 年の 11.9%から 2011 年は 18.3%と高くなっている。コミュ

ニケーションツールとして、メールや SNS が普及していることで、コミュニケーション能力を身に付けた、身に付けたかった、と考えているのかもしれない。

卒業学部別では、「身に付いた能力」は総合政策学部、理学部(理工学部)、それ以外の学部で傾向が分かれる。総合政策学部は、「ディベート能力」(50.0%、全体 3.5%)、「ICT 能力」(30.4%、全体 4.7%)、「プレゼンテーション能力」(30.4%、全体 7.1%)が高く、理学部(理工学部)では、「専門知識」(69.6%、全体 27.8%)がとりわけ高い。他の学部は全体と同様の傾向である。「身に付けたかった能力」では、同様に総合政策学部、理学部(理工学部)、それ以外の学部で傾向が分かれる。総合政策学部では、「海外留学」(46.4%、全体 29.4%)、「資格の取得」(44.6%、全体 35.1%)、が高く、理学部(理工学部)では、「ディベート能力」(21.7%、全体 13.3%)、「コミュニケーション能力」(20.3%、全体 12.0%)が高い。総合政策学部の傾向には教育の特長が表れており、理学部(理工学部)の傾向には、実験・研究だけでなく、その成果を発表するための能力を伸ばす教育が必要があると卒業生は考えていることが調査結果から考えられる。

男女別では、「身に付けたかった能力」として男性が女性より多く選択していた項目は、「外国語能力」(男性 63.9%、女性 58.1%)や「専門知識」(男性 36.9%、女性 33.9%)であり、女性が男性より多く選択した項目は、「資格の取得」(男性 33.5%、女性 38.9%)、「ICT 能力」(男性 9.8%、女性 14.6%)となった。男性では、「外国語能力」や「専門知識」を身に付けたかったと回答した者が多く、女性は、「資格の取得」や「ICT 能力」を身に付けたかったと回答した者が多い。

図 2-4 身に付けた能力、身に付けたかった能力（Q3, Q4）



Ⅱ－４　外国語教育

Ｑ５．在学中に自分自身の「英語力」のどのスキルをもっと伸ばしたかったですか。
　１　聞く力　　２　話す力　　３　読む力　　４　書く力
　５　プレゼンテーション能力　　６　十分なスキルが身についた

Ｑ５－２．今後、関西学院の英語教育はどのスキルに重点を置くべきだと思いますか。
　１　聞く力　　２　話す力　　３　読む力　　４　書く力
　５　プレゼンテーション能力

Q5-1 では「在学中に自分自身の「英語力」のどのスキルをもっと伸ばしたかったですか。」という質問に対し 6 つの選択肢から回答を選んでもらった。結果は、最も多い順に、「話す力」(72.1%)、「聞く力」(26.2%)、「プレゼンテーション能力」(6.9%)、「読む力」(5.8%)、「書く力」(3.8%)となっており、「充分なスキルが身についた」とするものは僅か 1.2%であった。逆にいえば、卒業生のほぼ 99%は英語力が身につかなかったという回答であった。

卒業年別に分析すると、「話す力」を伸ばしたかったとする層は、多い順に 1981 年(77.7%)、2011 年(74.2%)、1976 年(74.9%)、2006 年(74.2%)、1976 年(74.9%)、1996 年(73.8%)とほぼ横ばいとなっている。一方「聞く力」を伸ばしたかった層は、多い順に 1951 年(40.0%)、1961 年(38.3%)、1966 年(34.8%)、1971 年(33.0%)、1981 年(28.2%)と低下傾向になっている。「プレゼンテーション能力」を伸ばしたかったとする層は、多い順に 2001 年(11.6%)、1991 年(9.2%)、1986 年(7.6%)、1981 年(7.4%)、1951 年(9.0%)となっている。「読む力」を伸ばしたかった層は、多い順に 1951 年(25.0%)、2011 年(9.1%)、1961 年(8.6%)、1956 年(7.5%)、2001 年(7.2%)となっている。「書く力」を伸ばしたかった層は、多い順に 1961 年(7.4%)、1981 年(6.9%)、2001 年(5.8%)、1951 年(5.0%)、2006 年(4.4%)となっている。「充分なスキルが身についた」という層は、多い順に 1986 年(3.5%)、2006 年(1.9%)、1996 年(1.8%)、1956 年(1.5%)、2001 年(1.4%)となっている。以上から 1951 年、56 年、61 年と 86 年、2001 年の回答には特徴があり、「話す力」を伸ばしたかった数値が他の世代よりも低く、それ以外で他の世代よりも高い数値となっている。たとえば、1951 年、61 年は「読む力」、1956 年、1986 年、2001 年は「プレゼンテーション能力」が高い数値となっている。また 1986 年、2001 年、1956 年では「充分なスキルが身についた」でも高い数値となっている。

学部別では、「話す力」は多い順に、社会学部(76.7%)、法学部(73.4%)、総合政策学部(73.2%)となっており、「聞く力」は多い順に、経済学部(35.2%)、理学部(理工学部) (30.4%)、商学部(26.6%)である。同様に「プレゼンテーション能力」は総合政策学部(10.7%)、理工学部(10.1%)、経済学部(8.7%)の順、「読む力」では、神学部(28.6%)、文学部(8.4%)、総合政策学(7.1%)の順、「書く力」では社会学部(5.3%)、経済学部(5.1%)、文学部(4.9%)の順であった。「充分なスキルが身についた」は、多い順に総合政策学部(3.6%)、文学部(1.4%)、経済学部(1.4%)、理学部(理工学部) (1.4%)となっている。

中高出身者との比較では、「話す力」と「聞く力」では、中高出身の者(63.4%、15.8%)で出身者でない者(72.9%、26.8%)より低いが、読む力、書く力、プレゼンテーション能力、

充分なスキルがついたでは、中高出身者の数値は出身者でないものより高い結果となっている。団体の参加、不参加による比較では、特に大きな違いは見られない。

Q5-2 では「今後、関西学院の英語教育はどのスキルに重点を置くべきだと思いますか。」という質問に対し 5 つの選択肢から回答を選んでもらった。結果は、最も多い順に、「話す力」(66.4%)、「プレゼンテーション能力」(24.3%)、「聞く力」(18.9%)、「読む力」(3.4%)、「書く力」(2.9%)となっている。Q5-1 で「在学中に自分自身の「英語力」のどのスキルをもっと伸ばしたかった」の回答と比較すると「話す力」はトップで一致するが、2 番目は、「プレゼンテーション能力」と「聞く力」が逆転し、4 番目以降は同じ結果であった。「プレゼンテーション能力」は卒業年別にみても 15%～28%の高い数値となっており、世代を問わず「話す力」と「プレゼンテーション能力」のスキルに重点を置くべきだという結果となっている。一方「聞く力」、「読む力」、「書く力」の数値は Q5-1 での回答数値よりも更に低くなっている。

学部別では、神学部、理学部(理工学部)、総合政策学部を除く文系学部ではほぼ同じ傾向にある。理工学部では、「話す力」(71.0%)、「聞く力」(23.2%)と全体平均に比べ高く、一方「プレゼンテーション能力」(18.8%)では全体平均より低い。総合政策学部では、「聞く力」(8.9%)が全体平均に比べかなり低く、「プレゼンテーション能力」(37.5%)は全体平均に比べかなり高いのが特徴となっている。

中高出身者と出身でない者、団体参加者と参加していなかった者では大きな違いは見られなかった。

図 2-5 伸ばしたかった英語力、教育で重点を置くべき英語力(全体)(Q5-1, Q5-2)

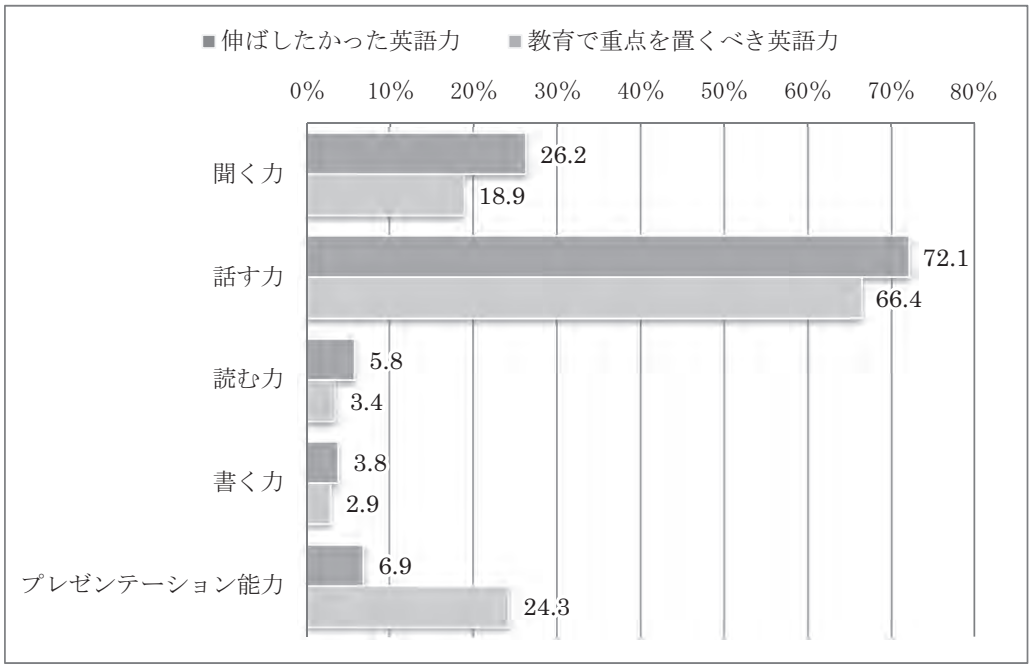
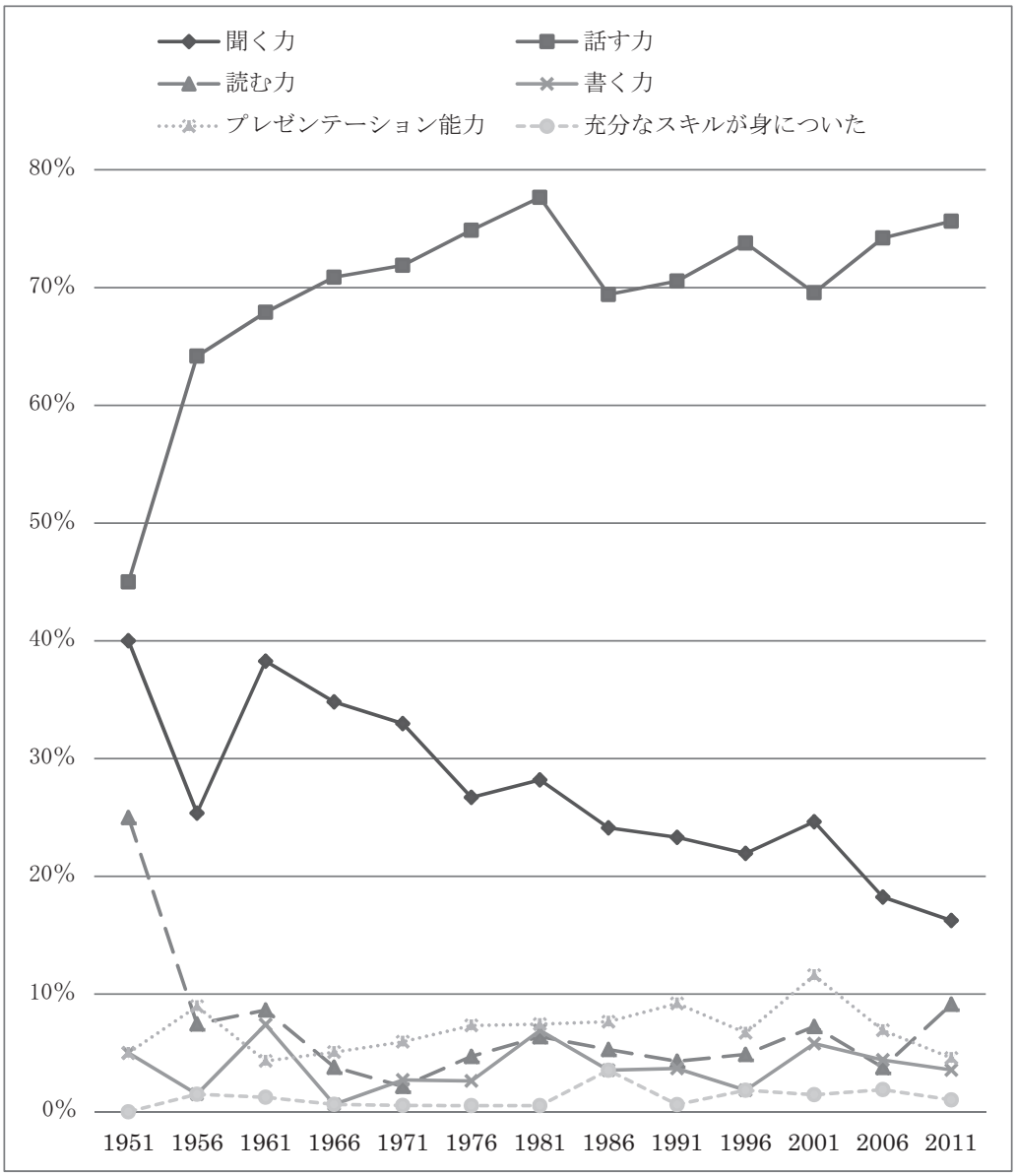


図 2-6 伸ばしたかった英語力(卒業年別)(Q5-1)



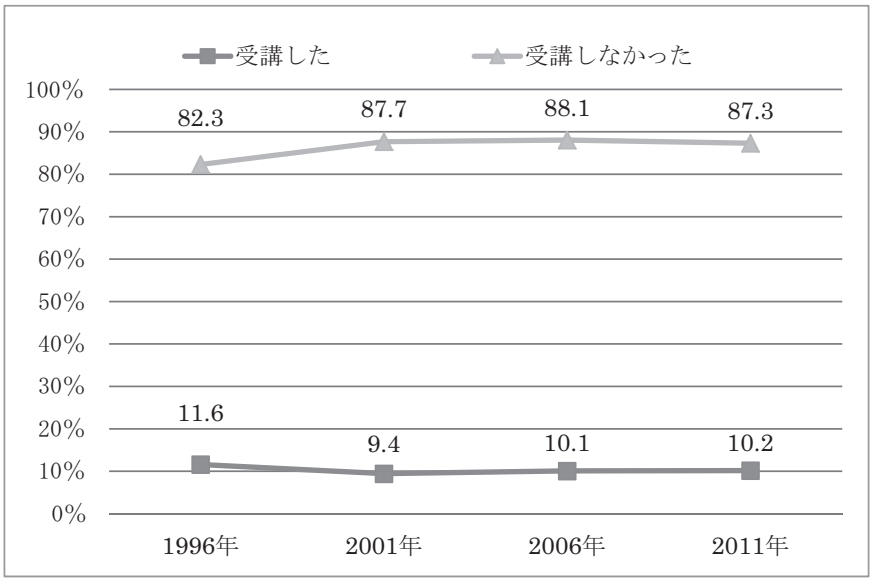
Q５−３．1992 年から始まった上級者対象の英語インテンシブプログラムを受講しましたか。
1　1992 年度以前に入学したため、受講していない
2　受講した
3　受講しなかった

Q5-3 では、「1992 年から始まった上級者対象の英語インテンシブプログラムを受講しましたか。」という質問に対し 3 つの選択肢から回答を選んでもらった。結果は、全体の半数以上が 1992 年以前の入学者で受講していない。アンケート上は約半数 49.9%であったが、1992 年以前の入学者が受講しなかったという回答が混じっているため 50%以上であると思われる。

受講者は、1996 年以降の卒業生では、10.3%となっており、1996 年 11.6%、2001 年 9.4%、2006 年 10.1%、2011 年 10.2%と同学年では約 1 割であった。学部別にはプログラムを必修科目の代替科目としている文学部、社会学部、法学部、経済学部、商学部に受講者が多くあり、神学部、理学部(理工学部)、総合政策学部ではゼロ、もしくは数人となっている。

理工学部や総合政策学部におけるネイティブによる独自の英語プログラムについても質問すべきであった。

図 2-7 英語インテンシブプログラムの受講（Q5-3）



Ｑ６．英語以外で在学中に身に付けたかったのはどの言語ですか。
1　ドイツ語　　2　フランス語　　3　スペイン語
4　中国語　　5　朝鮮語　　6　その他　（　　）

Q6 では、英語以外に身に付けたかった言語を 6 つの選択肢から回答してもらった。その結果は、多い順に「中国語」(29.7%)、「フランス語」(28.0%)、「ドイツ語」(20.6%)、「スペイン語」(8.4%)、「朝鮮語」(3.8%)の順となっている。

卒業年別では、1951 年~1981 年の世代は「フランス語」の比率が、1986 年～2011 年の世代は「中国語」の比率が最も高い。

学部別では、文学部、社会学部は「フランス語」、神学部、法学部、理工学部は「ドイツ語」、経済学部、商学部、総合政策学部は「中国語」の比率が最も高い。

中高出身者と出身でない者では、ほとんど差はなかった。

男女別では、男性は全体の順と同じであるが、女性は「フランス語」(36.0%)がトップ、続いて「中国語」(25.1%)、「ドイツ語」(15.4%)と、「スペイン語」(11.3%)、「朝鮮語」(5.0%)と続いている。

また団体への参加者とそうでないものでは、参加者が「中国語」(31.4%)、「フランス語」(28.9%)、「ドイツ語」(19.1%)の順であったが、参加者でない者は、「フランス語」(25.7%)、「中国語」(25.1%)、「ドイツ語」(24.7%)の順であった。

今回の結果は、現在の学生の履修状況とほぼ似通った割合であったが、「朝鮮語」に関しては履修者が多く、卒業生の調査結果とは異なった結果となっている。「朝鮮語」の習得は、大学で学ばなくとも社会人になってからでも独学が可能であるということかもしれない。

「中国語」に関して 1986 年以降の卒業者からニーズが高くなってきている。1986 年卒業生は、本学が 1982 年(日中国交回復 10 周年の年)に吉林大学との学術協定を結び学内でも中国に関する研究が盛んになった頃の在学生であった。この頃から中国語学習熱が高まったことが影響していると思われる。

図 2-8 在学中に身に付けたかった言語（Q6）

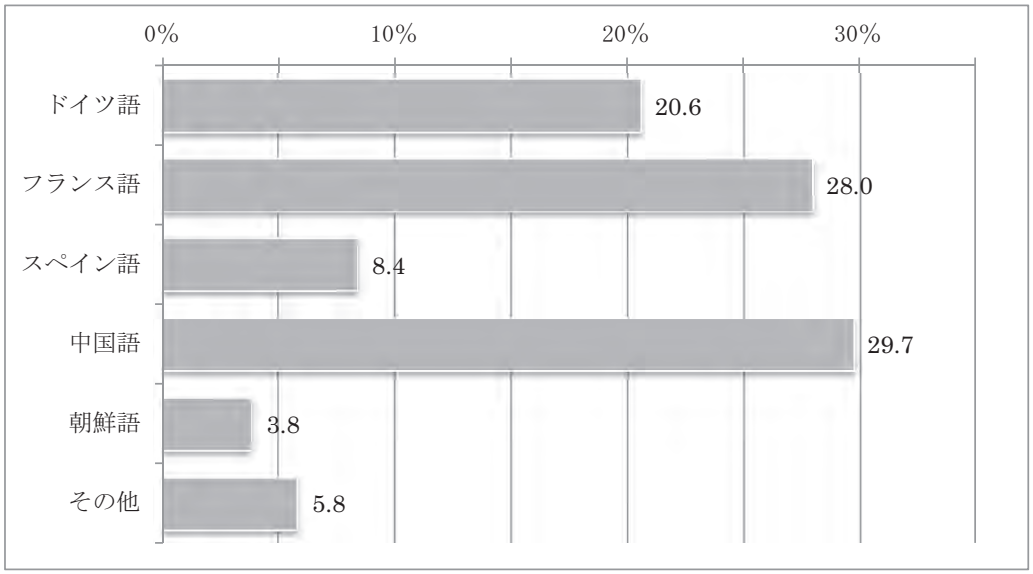
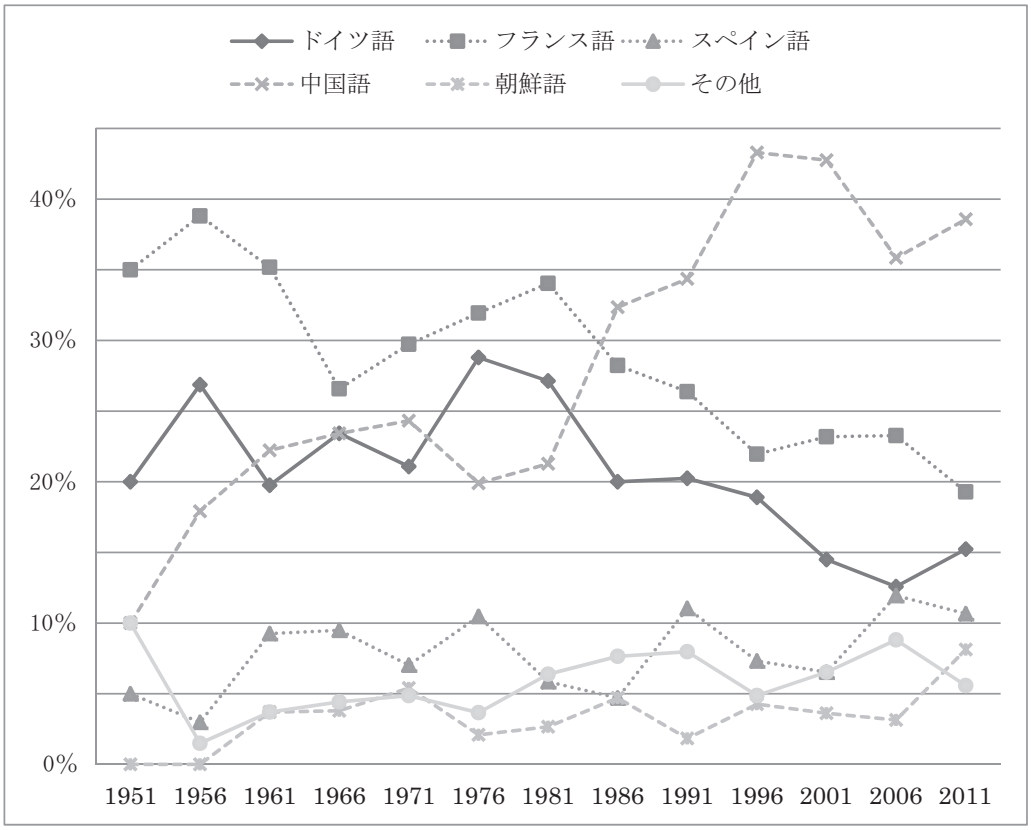


図 2-9 在学中に身に付けたかった言語(卒業年別)（Q6）



Ⅱ－５　めざす人間像

Ｑ１１．関西学院では、2008 年、本学に関わる人すべてがその人生を通じて実現すべき「めざす人間像」として、下記の７つの身につけるべき能力を定めました。現在、それぞれの要素をどの程度身についていると思いますか。
それぞれについて１～４の数字でお答えください。

１　身についている
２　ある程度、身についている
３　あまり身についていない
４　身についていない

a）	世界への視野	１……２……３……４
b）	高い識見と倫理観	１……２……３……４
c）	大きな志	１……２……３……４
d）	他者への思いやり	１……２……３……４
e）	確立した自己	１……２……３……４
f）	行動力と存在感	１……２……３……４
g）	社会変革の気概	１……２……３……４

2008 年度に新基本構想が策定された際に、本学に関わる人すべてがその人生を通じて実現すべき「めざす人間像」として「“Mastery for Service”を体現する世界市民」が提示され、その 7 つの要素が示された。Q11 では、これらの要素を本学の卒業生はどれぐらい身に付けているのか、要素ごとに自己アセスメントをしてもらった。

まず、「世界への視野」は「ある程度」を含めて「身についている」が 56%。男女、学部、団体参加で大きな差はないが、年代別で見ると上位の世代が比較して高い。1971 年卒業より上の世代の合計が 63%に対して、1976 年卒業より下の世代は 53%。また、中学部・高等部いずれかの出身者は、大学からの入学者に比べて 10%以上も高くなっている。

「高い識見と倫理観」は「ある程度」を含めて「身についている」が 69%。中高出身者が大学からの入学者に比べて 10%ほど高いのを除けば、どの属性でもほとんど変わらない。

「大きな志」は「ある程度」を含めて「身に付けている」が 54%だが、これは上の年代よりも若い年代の方が高くなっている。1981 年卒業より上の世代の合計が 46%であるのに対して、1986 年卒業より下の世代の合計は 61%となっている。

「他者への思いやり」は男女、年代、学部、中高出身、団体を問わず、すべての層で高く、全体で「身についている」(25%)、「ある程度、身についている」(65%)を合わせると 89%に上る。

「確立した自己」は「ある程度」を含めて「身に付けている」が 76%。「行動力と存在感」は 67%。どちらも属性に関わる傾向は見られない。

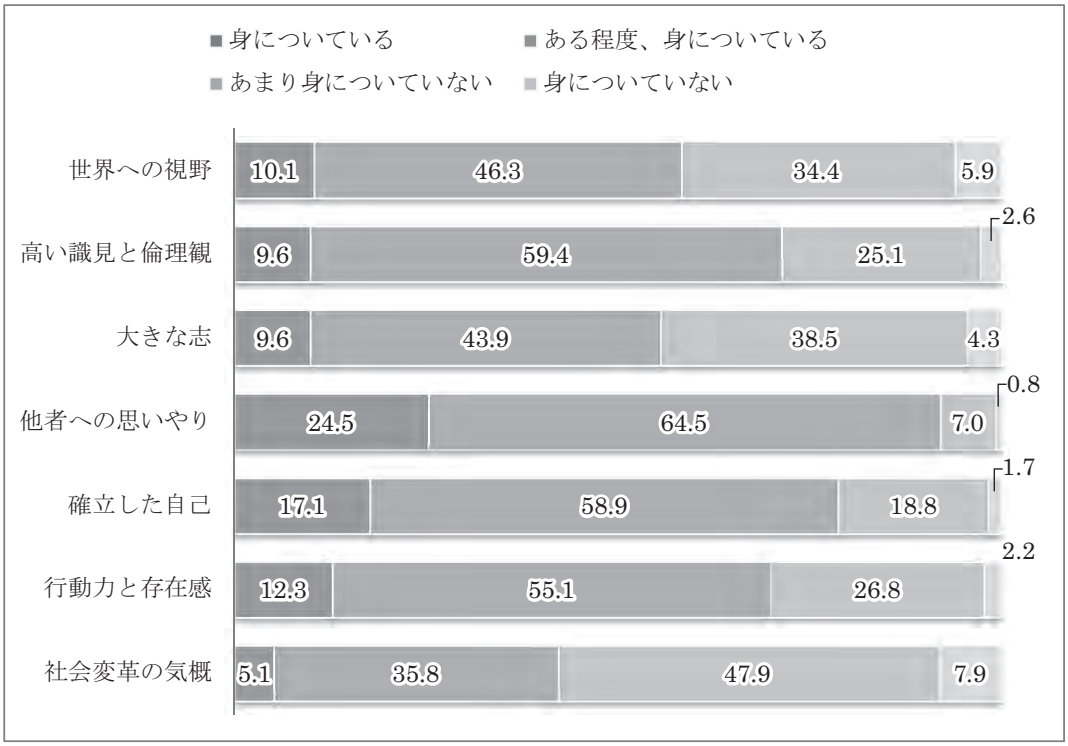
「社会変革の気概」は、「ある程度」を含めて「身に付けている」が 41%。男女で大きく差が出ており、男性は 41%、女性は 25%となっている。

これらはあくまでも卒業生自身の主観的な評価であり、1 回の調査では数値の意味を論じることは難しい。また、本学卒業生以外を対象とした調査データがないので比較ができ

ず、本学の卒業生の特徴がどこにあるのかは判断できないが、「他者への思いやり」を身につけていると考えている比率が非常に高いなど、本学卒業生の「めざす人間像」に関する大よその輪郭を把握できたことは重要な一歩である。

「めざす人間像」は長期的層な視野に立った本学の本質的な教育目標であり、今後は、今回の基礎的なデータをもとにして、その検証などを含めて課題を設定した調査の開発が望まれる。

図 2-10 めざす人間像（Q11）



Ⅱ－６　教育効果(まとめ)

「教育効果」の程度を認識するために設定した質問事項は、（１）「大学生活の充実度」、（２）「大学教育の有用度」、（３）「身に付けた能力・身に付けたかった能力」、（４）「外国語教育」および、（５）「目指す人間像」（今回はじめて設定された。）である。各項目についての全体的な傾向を要約するなら、以下のようである。

（１）「大学生活の充実度」における肯定的評価は、７割以上（73.2%）の卒業生にみられ、「クラブ・サークル活動」（50.１%）と「授業や研究」（27.4%）にその内実があり、（２）「大学生活の有用度」は、①「クラブ・サークル活動」（46.7%）、②「専門科目」（43.2%）、③「ゼミ」（39.7%）、④「一般教養科目」（29.0%）の順となっている。（３）「身に付けた・身に付けたかった能力」では、「身に付いた能力」としては、①「友人をつくる」（56.6%）、②「クラブ・サークル活動」（43.2%）、③「一般的な教養」（42.4%）が上位を占め、他方、「身に付けたかった能力」としては、①「外国語能力」（62.1%）が突出し、②「専門知識」（35.9%）、③「資格の取得」（35.1%）の順である。（４）「外国語教育」では、「英語教育」について、①「話す力」を伸ばしたかった、とする卒業生が突出しており（72.1%）、②重点を置くべき「今後のスキル」としては、「話す能力」（66.4%）と「プレゼンテーション能力」（24.3%）を合わせる（“アウト・プット力”）と、９割以上に達する。③英語以外に「身に付けたかった言語」としては、「中国語」（29.7%）、「フランス語」（28.0%）、少し下がって「ドイツ語」（20.6%）の順である。中国語への関心の高さも特徴である。最後の（５）「めざす人間像」では、「“Mastery for Service”を体現する世界市民」として示されている７要素につき、「社会変革の気概」（41%）を除く要素については、６割以上の卒業生が、「身についている」・「ある程度、身についている」と回答している。「他者への思いやり」は、とりわけ高い（９割）。

「教育効果」の項目を如何なる視座で分析するかは、これ自体一個の問題であるが、近時の傾向からすれば、AP（アドミッション・ポリシー）、DP（ディプロマ・ポリシー）、CP（カリキュラム・ポリシー）からの分析が有用であろう。この意味で、今回の調査において、「目指す人間像」を新たに設定したことは、AP ないし“建学の精神”を検証する観点からしても、時宜を得て適切なものであったと考えられる。内容の継続的分析は今後の課題である。

“大学生活の充実度・有用性”に、「クラブ・サークル活動」がトップにあり、これに“授業や研究”・“専門科目”が続くという傾向には、変化がない。もっとも、「教育効果」を認識する質問項目に、「クラブ・サークル活動」を入れていることが果たして妥当であるのか、については再考の余地があるように思われる（他にもそのような項目がある）。この点を考慮し、“身に付けたかった能力”として「専門知識」が上位を占めていることをも勘案すれば，大学の“レーゾン・デートル”は、当然ではあるが、なお意義を失っていないことを再確認できようか。しかし、他方、この点に関連し、「資格の取得」への期待、「英語教育」における“アウト・プット力”への変わらぬ希望を、いかに評価するかは、DP、CP の観点からしても、重要な課題であるだろう。

Ⅲ－１　スクールモットーへの意識

Ｑ７．スクールモットー(マスタリー・フォア・サービス)をどの程度意識していますか。 １　常に行動の規範としている　　２　頻繁に意識している ３　時々意識する　　４　全く意識したことがない

Q7 では、スクールモットーを日常意識しているかをたずねた。

本学の教育は、関西学院憲法に「キリスト教の主義(principles of Christianity)によって日本の青年に知徳兼備の教育を授ける」と謳われるように建学以来、キリスト教主義を理念としている。そのような理念を、具体的指針として表明したものが「スクールモットー」である。なかでも、C. J. L. ベーツが高等学部長であったときに提唱した“Mastery for Service”は、のちにベーツが第 4 代院長となって学院全体の教育(さらには研究)を方向づけるモットーと認められるにいたった。その趣意はベーツによる講演論文「Our College Motto, “Mastery for Service”」(『商光』創刊号,1915 年)に述べられている(その原文及び新訳がパンフレット「輝く自由　関西学院の精神と理想」や学院ウェブサイトに所載であるので参照することができる)。

今日、私立大学はたんに有為な人間を育成するのみならず、さらには私立学校でなければ望めない固有の教育をもって社会に貢献することが求められている。その点で本学の教育の特性をあらわすこの言葉がどれだけ浸透しているかを問うことは、大学間のたんなる量的競争に埋没してしまわないためにも、きわめて重要である。しかしながら、そのような視点をもって、スクールモットーの浸透度を本学の教育を測る指標として採用したのは、1999 年の卒業生調査がはじめてであり、今回は 2005 年につづいて 3 回目の調査となる。

今回の調査では「(スクールモットーを)常に行動の規範としている」「頻繁に意識している」と回答した「浸透度が高い層」が全体の 24.3%で、前回の 22.8%から若干の増加が見られる。前回の調査では、卒業から年月が経過すると、「浸透度が高い層」の割合が増加するとの傾向がみられたが、今回は、卒業後 36 年目以降の層にそのような傾向が見られるものの、卒業年と浸透度の強い相関は必ずしも見られなかった。むしろ卒業後 21 年目、26 年目、31 年目にそれぞれ 30.0%、40.4%、44.8%と高い浸透度が見られることが注目される。また、相対的に卒業年が近いところでばらつきが見られ、6 年目、16 年目は 15%前後なのに対して、1 年目、11 年目には 20%程度となっている。

前回の調査では、二つの仮説が検討された。つまり、キリスト教主義教育の精神は卒業後、その人生の歩みと共に深められてその人を導くものとなるとの見方と、在学中の浸透度は時間と共に大きく変わることはないとの見方である。今回の調査を、過去 2 回 1999 年、2005 年の調査との比較してみることでこの問題をあらためて検討してみることにしよう。前回の調査では、同じ卒業年での比較から前者を支持している。しかしながら、ほぼ同じ頃に卒業した対象者での浸透度を比較すると、つまり、1999 年の 6 年目の卒業生(1994 年卒で 39 歳)、2005 年の 11 年目の卒業生(1995 年卒で 38 歳)、2011 年の 16 年目の卒業生(1996 年卒で 37 歳)を比較すると、それぞれ 14.0%、16.3%、15.2%となり、同様の傾向が卒業後、36 年目～56 年目まで見ることができる。さらに 1999 年調査と 2005 年調査だけに限るならば、これらがさらに一致する傾向が見られる。この対応はむしろ、後者にそ

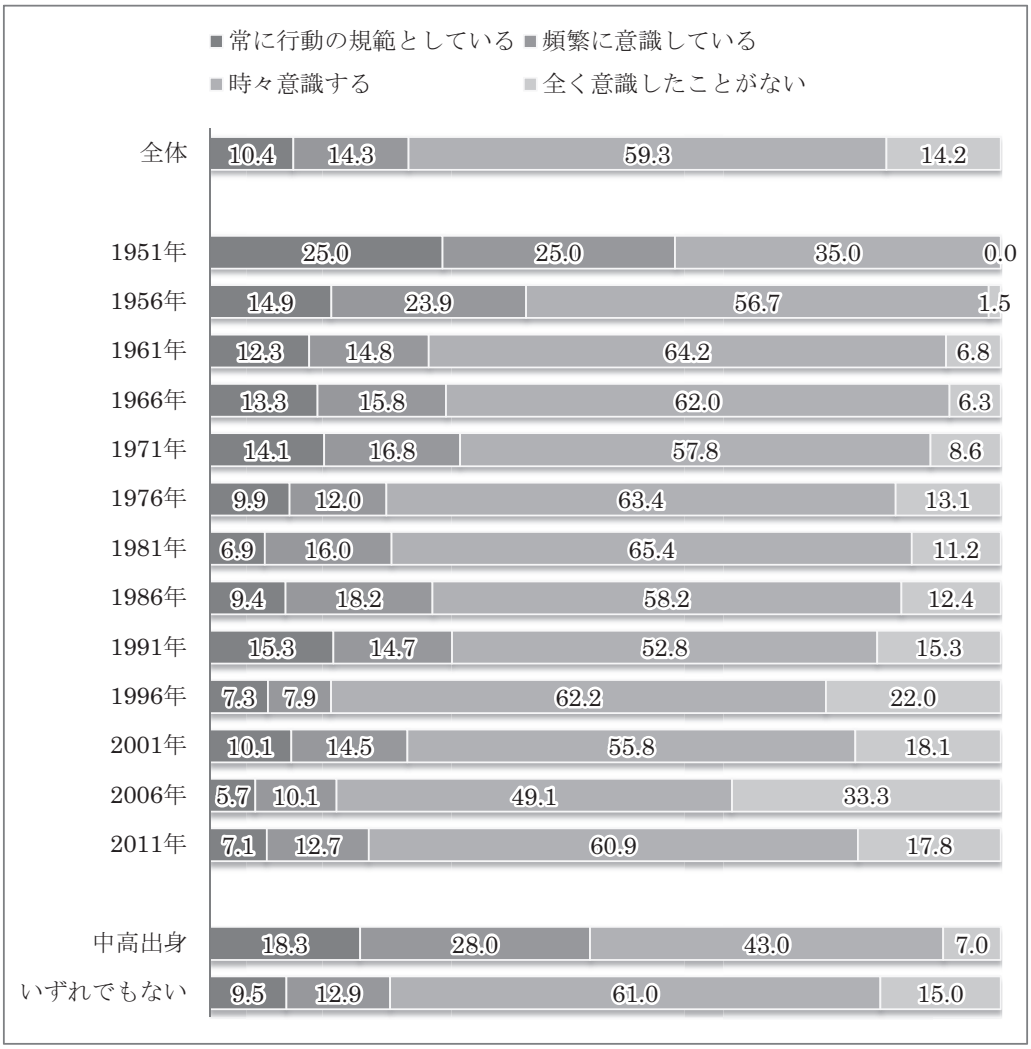
った解釈を補強するように思われる。しかしながら、後者の見方だけでは、今回の調査結果を説明することができない。

ここで注目したいのは、やや浸透度が低いと分類された「時々意識する」との層をふくめた割合である。今回の集計で、卒業後 5 年目の 64.9%がやや低いことを例外として、4 分の 3 以上の比率を 60 年にわたって維持していることである。「時々」とはかなり解釈の幅の広い表現である。頻繁にではないが折に触れ意識するという者も、思い出すこともあるが普段はまったく意識しない者も含まれる。このような幅が調査結果に影響したことが考えられる。2008 年度より新基本構想にもとづいた法人・大学の新中期計画が実施され、学内外を通じて「スクールモットー」にもとづいた教育が広く告知された。在学生はもちろん卒業生に対しても、また広く一般にもスクールモットーにもとづいたメッセージが発せられた。そのような働きかけが卒業生の意識を掘り起こし、今回の結果にも影響を与えたのではないだろうか。とくに卒業後 21 年目(42 歳)、26 年目(47 歳)、31 年目(52 歳)の層は、平均初婚年齢が 1990 年に男性 28.4 歳／女性 25.9 歳、1995 年に 28.5 歳／26.3 歳、2000 年に 28.8 歳／27.9 歳(厚労省「人口動態統計」参照)であることから、この層の子どもの多くが 13 歳から 22 歳となることが推測される。この年代の親の世代は学校情報に関心をむけることが少なくないと思われる(卒業後 10 年目が高いのは初等部の開設の影響とも考えられる)。

前述の分析が正しいとすれば、スクールモットーのさらなる浸透のために、二つの対策が考えられるだろう。はっきりとした意識的なスクールモットーへの関わりは、在学時に形成されると考えられる。したがって、在学期間中に、キリスト教主義の精神に親しみ、スクールモットーなどについて深く考える機会を積極的に提供することがまずもって大切である。このことは中学部・高等部から関西学院で学んだ卒業生(46.3%)と大学からの卒業生(22.4%)との比較からも理解することができる。それと同時に、卒業生・同窓生に対して働きかけることも重要である。大学での教育は確かにその在学期間のみで完結する事柄ではない。むしろ、大学で学んだことを人生の歩みの中で反芻しつつみずから深めるという面も無視できない。しかしそれが強く本学の教育理念との関連で深められるためには、その教育理念の継続的啓発活動や社会的認知が大きな意味をもつのではあるまいか。特徴ある私学として本学が教育理念を継承していくために、この両面からの検討が必要だと考える。

なお、学部間での浸透度の差、学生団体の参加・不参加による差は特筆すべきものは見られなかった。また、男女間の格差は「浸透度の高い層」で男性 28.7%、女性 15.3%で前回(26.0%と 15.4%)で同じ傾向であった。

図 3-1 スクールモットーへの意識（Q7）



Ⅲ－２　キリスト教の影響

Ｑ８．あなたは、関西学院でキリスト教に触れたことで、自分自身の考え方や生き方に影響を受けたと思いますか。

１　強くそう思う	２　そう思う
３　あまりそう思わない	４　全くそう思わない

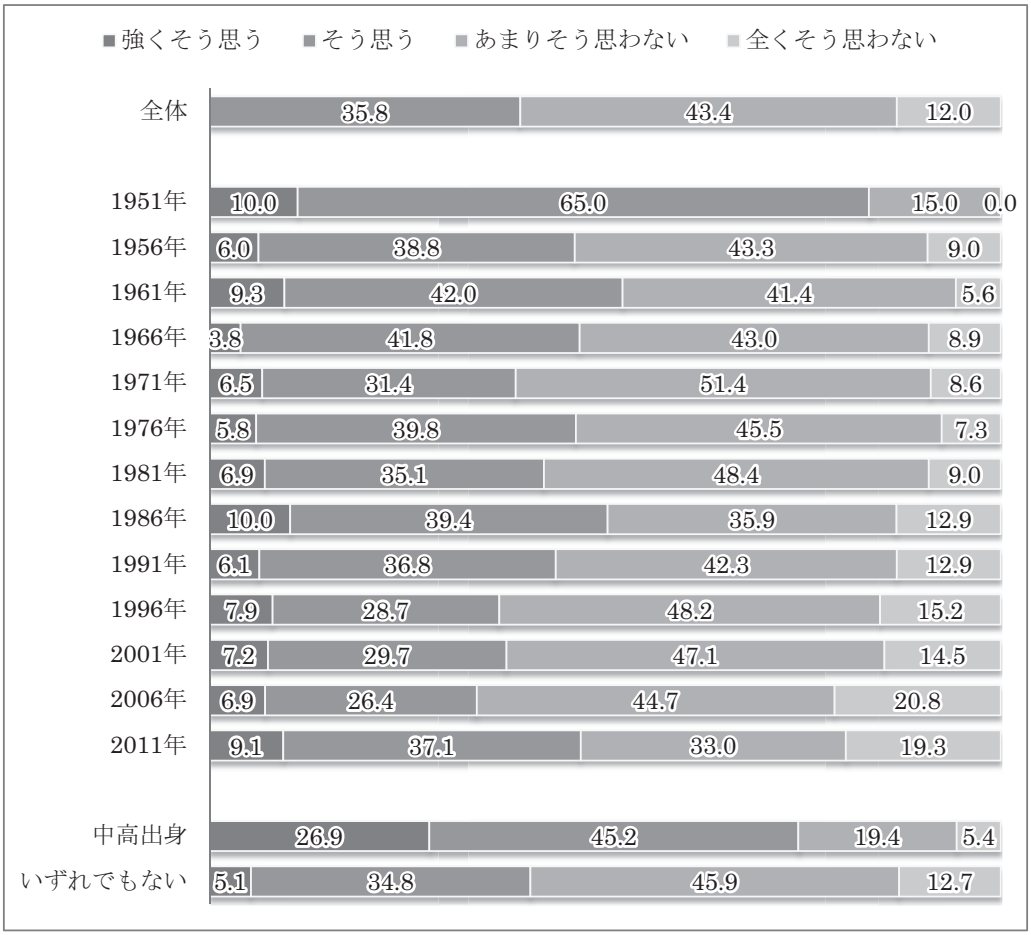
Q8 では、自分自身の考え方や生き方に関西学院でキリスト教に触れたことで影響を受けたかをたずねた。

本学のキリスト教主義教育が、さらに具体的に「キリスト教」的なものとして認知され、卒業生それぞれの人生に影響を与えているかを問う項目である。スクールモットーはそれぞれの時代の本学における教育を方向付けるものであるとしても、それを支える本来の精神であるキリスト教的価値が本学から失われたとすれば本末転倒である。

キリスト教がその考え方や生き方に影響をあたえたとの問いに「強くそう思う」「そう思う」と積極的に評価した者は、全体で 43.0%(男性 43.7%／女性 41.0%)である。前回 2005 年の調査では、卒業から年月が経過するとともに比率が高くなる傾向が見られたが、今回調査ではそれほど顕著ではなかった。卒業後 60 年後の 75%を別とすれば、卒業年を問わず、全体と同じく 43%前後を推移していると言って良いだろう(ただし、卒業後 6 年目は 33.3%、26 年目 49.4%、51 年目 51.3%)。また中学部・高等部出身者では 72.1%である。これはキリスト教に関する必修科目(大学でキリスト教学ほか、中高で聖書科)が設定され、チャペル等の機会が定期的に提供されていることが重要な要因となっていると考えられる。ただし卒業後 16 年目から 6 年目について 36.6%、36.9%、33.3%と落ち込みが見られるので、慎重に動向を注視する必要性をあわせて指摘しておきたい。今後も手堅い成果を維持し、またさらなる発展をのぞむために、いっそうの充実が期せられる。

なお、神学部をのぞく他学部に数値の差がないこと、学生団体への参加・不参加で差がないことは前回調査と同じである。

図 3-2 キリスト教の影響（Q8）



Ⅲ－３　在学中に学んだことの有用度

Ｑ９．関西学院で学んだことが社会人として役に立っていると思いますか。
　１　強くそう思う　　２　そう思う
　３　あまりそう思わない　　４　全くそう思わない

Q9 では、関西学院で学んだことが社会人として役立っていると思うかをたずねた。

全体では、「強くそう思う」と「そう思う」と肯定的に評価している者の合計が 79.8%であるのに対し「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」という否定的な者はそれぞれ 1.4%、16.8%で合計は 18.2%である。このように全体としては 8 割近くの者が本学での学びを評価している。

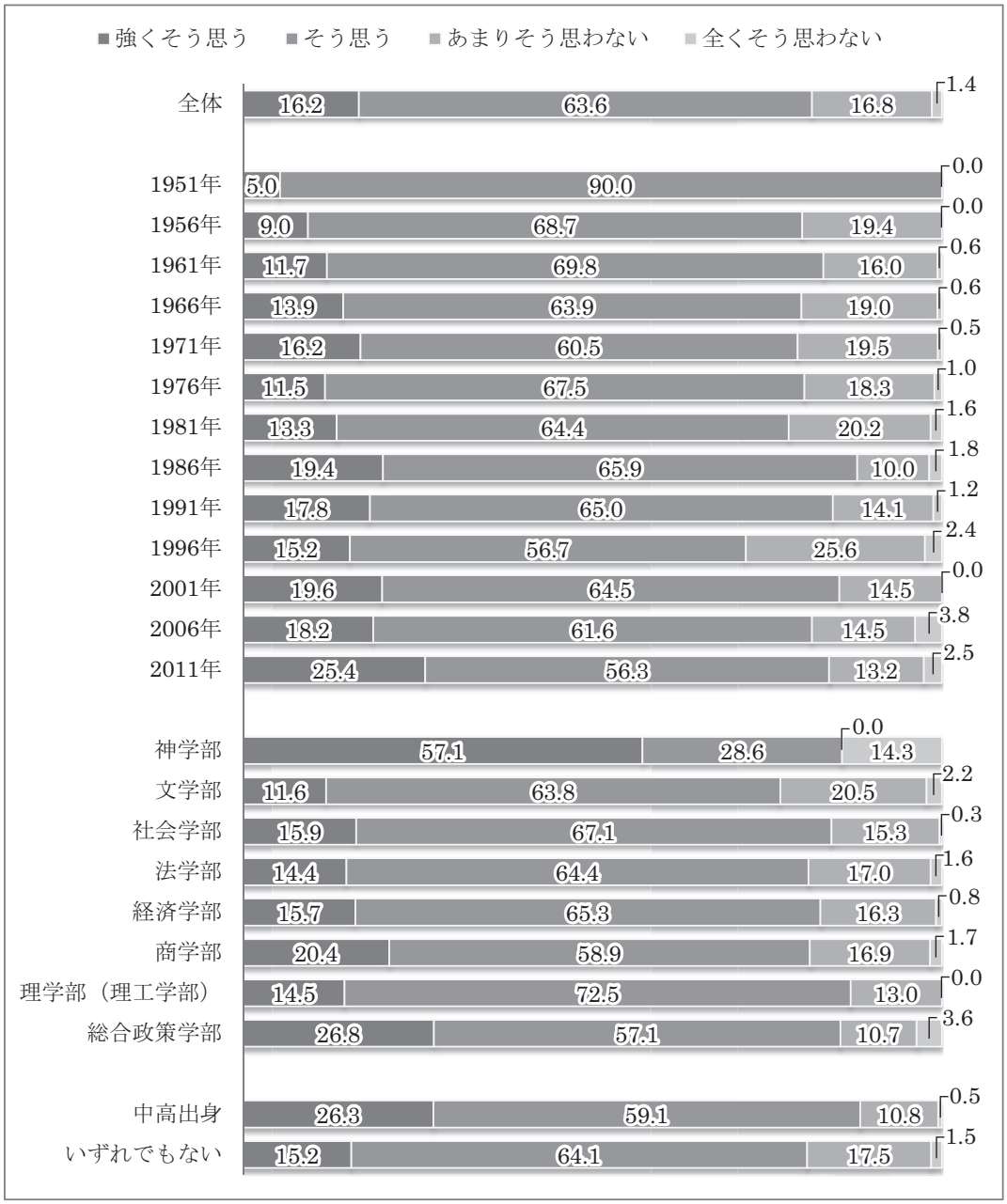
卒業年別では、肯定的に評価している者、特に「強くそう思う」と評価している者が 1986 年卒業生以降、増加している。特に、2011 年卒業生は、25.4%が「強くそう思う」と評価している。一方、1996 年卒業生の評価がもっとも低い。

居住地別では、中国と関東で肯定的評価者の比率が高く、それぞれ 84.3%、80.0%となっている。特に中国では「強くそう思う」と回答した者が 22.9%と高い。なお、サンプル数は少ないが、北海道・東北では「強くそう思う」が 37.5%、「そう思う」が 50.0%となっており 9 割近くが本学での学びが社会で役立っていると評価している。

次に学部別で見れば、全体集計より肯定的評価者の比率が低かったのは文学部(75.4%)、法学部(78.8%)、商学部(79.3%)の 3 学部である。全体集計より高かった学部の中では、理学部(理工学部)と神学部が高い。それぞれ 87.0%、85.7%となっている。両学部での学びが他学部と比較して職業に直結する学びが多いことが考えられる。総合政策学部は肯定者合計では両学部に及ばないが「強くそう思う」と答えた者が 25.4%と全学部で最も高い値になっている。

中高出身者か否かでは、中高出身者の方が役に立っていると感じている率がやや高い。団体に属していたかどうかで見ると、肯定的に捉えている者が団体所属者において 82.7%なのに対し不参加の者が 71.2%であり、団体所属者の方が大学での学びを評価していることが分かる。性別および卒業年別では顕著な差異はみられない。

図 3-3 在学中に学んだことの有用度（Q9）



Ⅲ－４　卒業生ネットワークの有利さ

Ｑ１０－１．関西学院大学の卒業生ネットワークが、社会の中で有利に働いていると思いますか。

１　強くそう思う　　２　そう思う

３　あまりそう思わない　　４　全くそう思わない

Ｑ１０－２．どのようなことでそう思いますか。

Q10-1 では、卒業生ネットワークが社会の中で有利に働いていると思うかをたずねた。

全体では「強くそう思う」「そう思う」と肯定的な回答が 41.1%で、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」と否定的な回答が 56.9%と過半数を超えている。

居住地別では、回答者数の多い関東と近畿を比較すると、近畿では、肯定的な回答が 44.1%、否定的な回答が 53.7%に対し、関東では、それぞれ、33.3%と 65.1%と、否定的な回答の割合が高い。Q10-2 でたずねた理由を見ても、関西以外での知名度や認知度が低いという回答から、その原因がうかがえる。

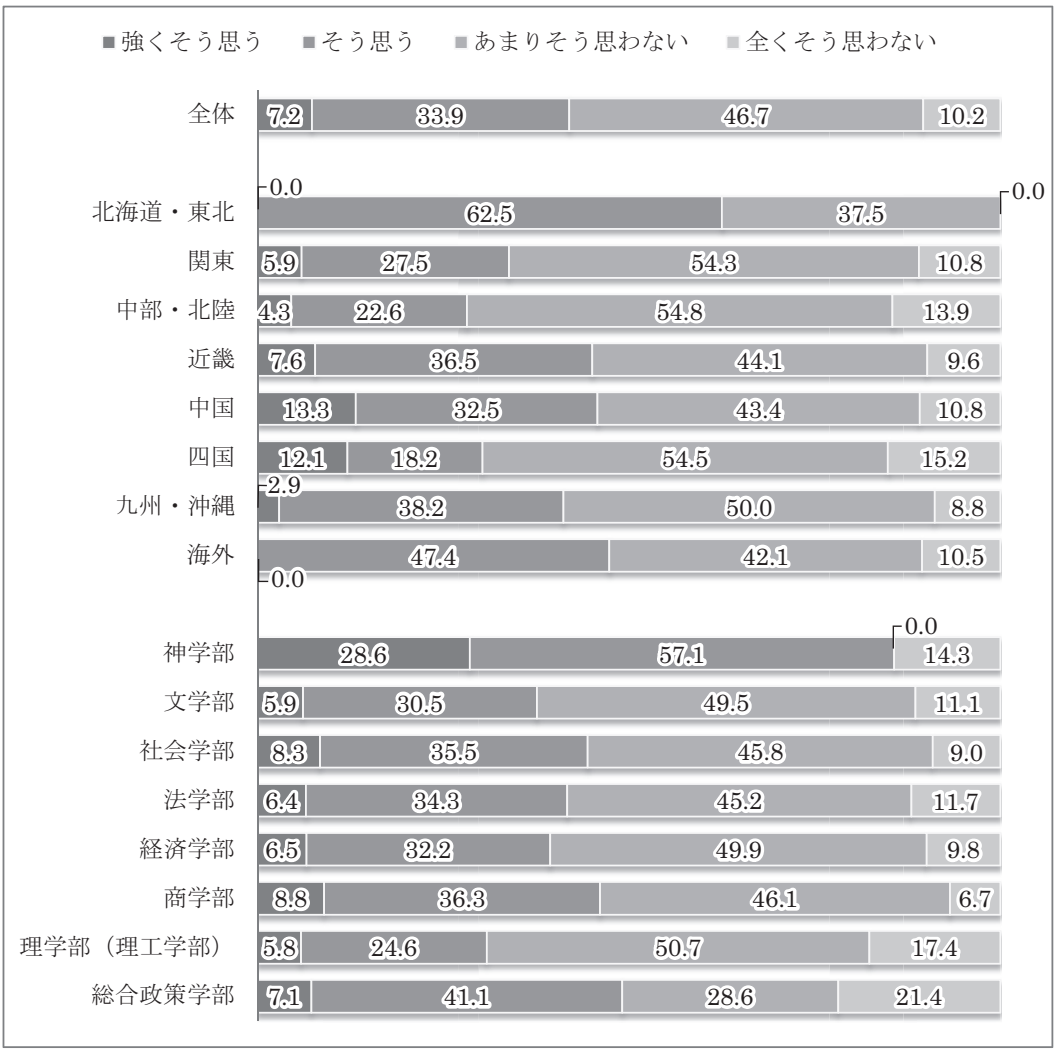
学部別では、神学部において「強くそう思う」と「そう思う者」の合計が 85.7%と非常に高くなっている。サンプル数が少ないとはいえ、神学部卒業生の勤務先に教会関係が多く、その中での繋がりを考えれば理解できる結果と言える。その他では、総合政策学部と商学部、そして社会学部で卒業生ネットワークの有効性を比較的評価している反面、理学部(理工学部)では「全くそう思わない」が 17.4%、「あまりそう思わない」が 50.7%となっており、7 割に近い者が否定的に見ている。この理学部(理工学部)の数字は研究室の存在を考えると意外に感じられる。研究室には大学院生だけでなく卒業生も出入するだろうから、研究室を媒介に強いネットワークが存在することは間違いない。しかしそのネットワークが仕事で有利かと問われれば違う。理学部(理工学部)卒業生の多くが研究職として勤務していることと無関係ではない。

中高出身者か否かでは、中学部・高等部出身者が「強くそう思う」8.1%、「そう思う」36.0%で合計 44.1%なのに対し、それ以外の者では「強くそう思う」7.1%、「そう思う」33.7%で合計 40.8%となった。大きな差異とまで言えないが中高出身者の方が卒業生ネットワークを評価していることになる。

団体所属の有無で見ると、参加者の方が参加していなかった者より、有効性を評価している。

肯定的な回答の理由としては、卒業後の就職先や取引先で卒業生が多くおり、様々な面でスムーズに仕事ができるという意見が多い。また否定的な回答の理由としては、前述の関西以外での知名度、認知度が低いという理由以外に、他大学の卒業生ネットワークと比較して、たとえば、「慶応大学の三田会などの方が緊密である」との意見もみられた。

図 3-4 卒業生ネットワークの有利さ（Q10-1）



Ⅲ－５　関西学院のシンボル

Ｑ１２．関西学院のシンボルといえば、何を思い浮かべますか。自由にお書きください。

Q12 では、関西学院のシンボルとして何を思い浮かべるか、自由に記述してもらった。

1,819 人の回答があり、件数については、１人が複数挙げられているので回答者数を上回っている。回答をカテゴリーに絞って整理した。最も多い順に「時計台」「中央芝生」「校章」「スクールモットー」、そしてその次に続く「アメリカンフットボール」「チャペル」「キリスト教」である。

「時計台」に関する記述は 953 件あり、時計塔、図書館(いまは図書館と時計台は分かれているが、かつて時計台は図書館であった)といったもので独特の表現はなかった。また時計台と組み合わさってイメージしているものとして、図書館とその前の広場、桜並木を通してみた図書館の時計台、図書館とモミの木、甲山を背にした時計台(図書館)、正門から見える図書館、時計台と図書館、時計台と赤い瓦、時計台とヴォーリズの建造物、白い時計台とその前に広がる芝生、時計台とクリスマスツリーといったものがあり、中でも芝生との組み合わせが圧倒的多数であった。

「芝生」に関する記述は 553 件あり、中芝、中央芝生、芝生、中央広場、広場、中庭、前庭、ラケット型広場、上ケ原牧場、きれいな芝生、大きな芝生、広い芝生といった表現があった。時計台との組み合わせが最も多いが、その他には、芝生と古い校舎、ポプラと上ケ原牧場(芝生)、中央芝生とその周辺の建物群、きれいな中庭とスクールモットーといったものがあった。

「校章」に関する記述は 440 件で、みかづき、三日月、三ケ月、KG ムーン、上弦の月、記章、バッチ、ロゴマーク、学院のマーク、新月、新月旗、弦月、クレセント、月、月のマーク、半月(認識間違いでは?)といった表現があった。

「スクールモットー」に関する記述は 221 件で、Mastery for Service、マスタリー・フォー・サービス、スクールモットー、Mastery for Service の精神、奉仕の精神、奉仕、社会への貢献、他者への奉仕の心、奉仕への練達といった表現があった。また Mastery for Service と Noble Stubbornness(ノーブル・スタボネス)がセットでイメージしているものもあった。

「アメリカンフットボール」に関する記述は 71 件あり、アメフト、KG ファイターズ、ファイターズ、ホワイト＆ブルー、ブルーホワイト(KG ファイターズのユニフォームの色でブルー＆ホワイトという表現が一般的)、甲子園ボウルといった表現があった。

「チャペル」に関する記述としては 67 件で、チャペル、礼拝堂、ランバス礼拝堂といった表現があった。キリスト教主義教育を次に述べるキリスト教(博愛、隣人愛等)との区別をして「チャペル」に加えた。

「キリスト教」に関する記述は 29 件あり、キリスト教、博愛、隣人愛、友愛といった表現があった。

これら以外に、キャンパスに関する記述では、美しい外観的環境、きれいな建物、スパニッシュミッションスタイルの校舎、外国にも劣らない洗練された学園風景、ヴォーリズの校舎、桜、ハゼの木、ポプラ、楠、木蓮、藤、美しい自然、南欧風のキャンパス、甲山

を借景とした美しいキャンパス、日本庭園、食堂(パパ、ママ)といった表現がみられた。

人間性に関する記述では、自由、自由な校風、自由闊達、自由奔放、自由な学風、明るく自由な雰囲気、気品あふれる校風、天空に伸びるポプラ、爽やかさ、明るい、スマートなブランドイメージ、おしゃれ、上品性、信頼、温厚な常識人、友愛と自己責任、品格、社会モラルを順守できる、ヒューマニズム、気品の良さ、要領のよさ、しかし気骨が少ない、皆が右向く時に左を向く精神、未来への挑戦、誠実な人間性、すべてを受け入れるやさしさ、ナイーブな人間性、ダンディといった表現がみられた。

他の大学に比較して、キリスト教主義の教育がスパニッシュミッションスタイルのキャンパスと相まって、若い学生の純粋さを引き出し、青春時代を過ごすには最もいい環境を作り出しているという感じをうける。しかしながら一旦社会に出ていくとそういった若者だけの文化では通用せず、そこでは「気品の良さ、要領のよさ、しかし気骨が少ない」といった表現のように、なかなか難局を乗り越えることができていない現状もあるようである。青春を謳歌するには間違いなくいい大学であるが、その後の社会での活躍を考えた場合にはこのままのイメージでいいのだろうか。

表 3-1 関西学院のシンボル(自由記述)のカテゴリ (Q12)

1	時計台	953 件
2	芝生	553 件
3	校章	440 件
4	スクールモットー	221 件
5	アメリカンフットボール	71 件
6	チャペル	67 件
7	キリスト教	29 件
	その他	

件数の多い順　ただし、その他項目を除く

Ⅲ－６　校歌を歌えるか

Ｑ１３．校歌「空の翼」をどの程度歌えますか。
　１　完全に歌える　　２　１番のみ歌える
　３　少し歌える　　４　全く歌えない

Q13 では、校歌「空の翼」をどの程度歌えるかをたずねた。

標記の質問に対して、１．完全に歌える(完全)、２．１番のみ歌える(1 番のみ)。３．少し歌える(一部)、4 . 全く歌えない(ゼロ)の 4 つの中から回答を求めた。結果、完全が 23.0%、1 番のみが 42.9%、一部が 22.0%、ゼロが 10.4%という結果であった。

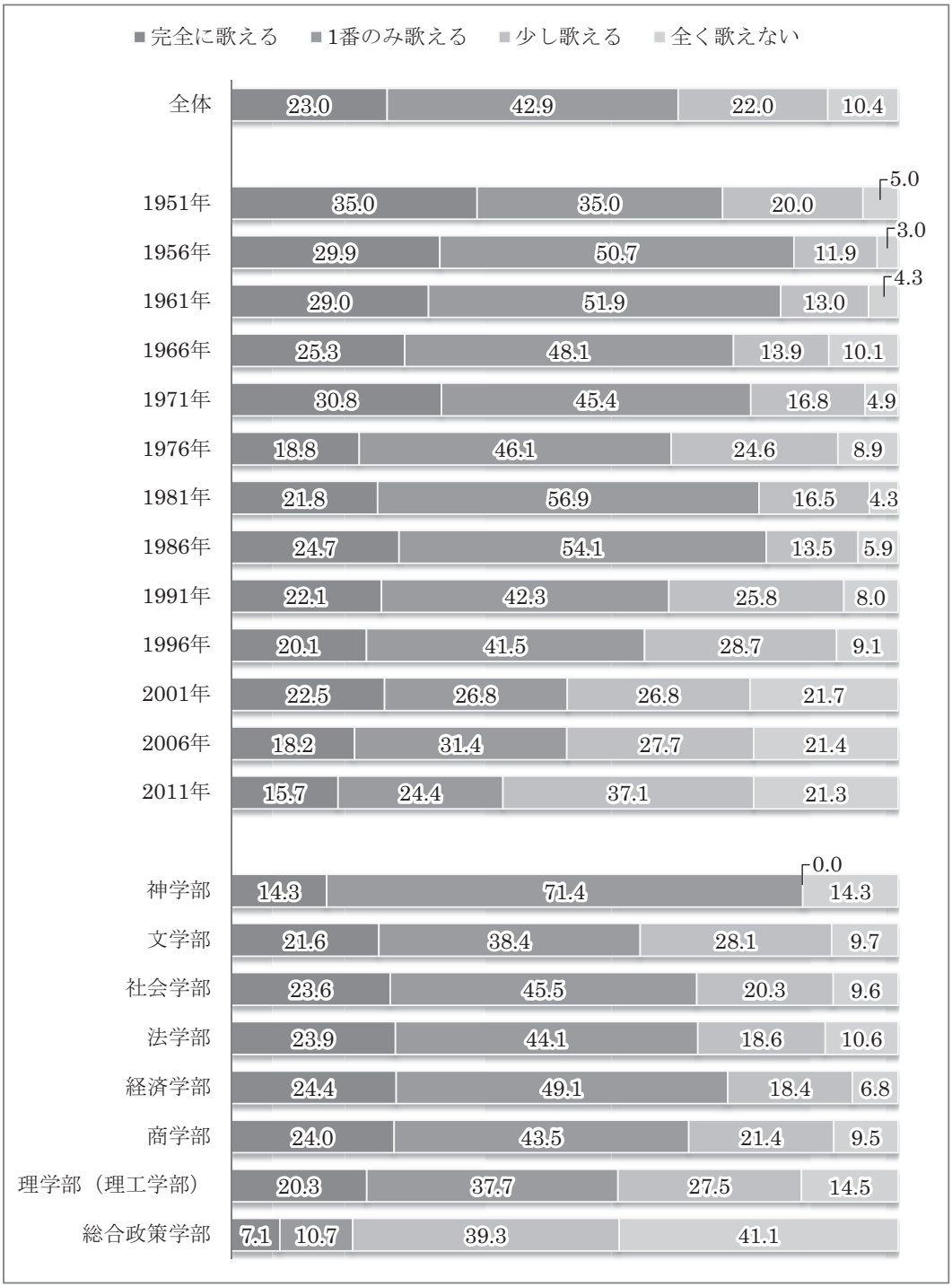
「完全に歌える」層では、卒業年別では、1951 年から 1971 年卒業までの世代は 25%～35%と高く、中でも 1951 年卒業は 35%でトップであった。1976 年から 1996 年卒業までの世代では 18%～24%となっており、その中で 1971 年卒業が 18%と最も低く、その他の年は 20%台で、1986 年卒業が 24%でトップであった。2001 年卒業は 22%、2006 年卒業は 18%、2011 年卒業は 15%と全体で最も低い値となっており、世代が進むに従って低下の傾向にある。ただし、51 年の母数は 20、56 年の母数は 67 で、1961 年以降 2011 年までは 138～197 となっている。また、男女別では男性 26.7%(母数 1361)に対して女性 14.8%(母数 602)であった。

「1 番のみ歌える」層では、卒業年別では 1956 年 50%、61 年 51%、81 年 56%、86 年 54%と飛びぬけている。この 1 番のみの層でも世代が進むに従って低下傾向がみられ、2011 年は 24%で最低となっている。男女別では、男性 44%に対して女性 39%である。

「完全」＋「1 番のみ」でみると、1951 年～1971 年卒業までの世代は 70%～80%と高い数値となっている。1976 年～1996 年卒業までの世代は、61%～78%となっている。2001 年卒業は 49%、2006 年卒業 49%、2011 年卒業 40%と低下傾向にある。これを学部別にみると対象母数が神学部 7、理工学部 65、総合政策学 56 と少ない学部ではそれぞれ 85%、58%、17%という値となったが、他の対象母数 301～421 の文系学部では、60%～73%で、経済学部 73%、社会学部 69%、法学部 68%、商学部 67%、文学部 60%となっている。中学部＋高等部出身者では、当然ながらも 97%、一方そのいずれでもない場合でも 63%となっている。団体参加者では、70%、一方不参加者でも 53%となっている。

本学の校歌「空の翼」(北原白秋作詞、本学同窓の山田耕作作曲)は、「完全」(実数 450)と「一番のみ」(実数 844)を含め母数 1962 で割ると平均でも 65.9%の卒業生が歌えるという結果であった。どのようにして校歌を覚えたかという調査結果はまだないが、今後この伝統を守っていくことが大切である。

図 3-5 校歌を歌えるか（Q13）



Ⅲ－７　帰属意識(まとめ)

「国や地方自治体が設立する国・公立大学とは異なり、私立大学は……、設立者の建学の精神や独自の学風が強調され、……その自主性が重んじられている」(私大連ＨＰより)とあるように、私立大学においては、その学校で学ぶ者が「建学の精神」を理解し、その精神にもとづいた独自の行動様式を体得することが重要である。したがって私立大学は、学生が学ぶ過程で成長し、他の学校で得ることができない何かを、自分に欠くことのできない要素として認知すること(アイデンティティ)ができる機会を与えなければならない。このような「理念」「成長」「差別化」を通して、卒業生はみずからの誇りを形成し、相互の「紐帯」を確認することができる。帰属意識においては、そのような関西学院大学の「建学の精神」の浸透度、本学で学んだ者の「紐帯」の認知を調査している。また、大学との結びつきを具体的に想起させる機会としてのシンボルや校歌について質問している。

関西学院の理念を表わすものとして、スクールモットーMastery for Service がある。その浸透度(Q7)は、「つねに」もしくは「頻繁に」意識している浸透度の高い層が全体で 24.3%であるが、卒業年が近いところでは 15~20%に低下する傾向がみられるので今後の推移に注意するべきである。しかしながら、やや浸透度が低いとみなされた「時々意識する」層は概ね 70%以上を維持しているので、卒業後もこの層に働きかけ関学で学んだ者としてのアイデンティティを高揚する必要がある。時代に即応して語られる「スクールモットー」を支える精神は関西学院憲法に謳われる「キリスト教主義」である。これを問うた項目(Q8)では、キリスト教が卒業生に積極的に生き方・考え方に影響したと評価する者が全体で 43.0%であり、どの卒業年でもその前後で推移する。ただし、卒業後 6~16 年目で 35%程度への落ち込みがみられるので原因を探るとともに、さらに浸透を目指すべきであろう。

本学との結びつき・また卒業生相互の結びつきは、ここでは「学んだことが社会人として役立ったか」(Q10)・「卒業生ネットワークが、社会の中で有利に働いたか」(Q11)と問われている。これらの質問項目はその功利性の視点から問われていると解釈されうるので、帰属意識を調査するために適切であったか再考する必要があるかもしれない。本学で学んだことを肯定的に評価する者は、全体で約 80%であり、卒業年により若干のばらつきはあるが、その評価が大きく変動しているとは思われない。また、卒業生ネットワークの評価は、否定的な評価が 50%をやや超えている。「社会の中で」と問うたが、その意味が「仕事上有利にはたらく」という意味かどうかも曖昧であるので、質問意図を的確に表現する設問を再検討して、さらに明確にして今後の調査で分析する必要があろう。

シンボルについて(Q12)は、自由記述によって「三日月の校章」「時計台」「中央芝生」が多く上げられた。またスクールモットーへの言及も少なくなかった。校歌「空の翼」について(Q13)は、少なくとも「１番を歌える」者が、1986 年まで約 75%を維持する(ただし 1971 年 65%)が、1996 年までが約 60%、2006 年までが約 50%と低減し、2011 年では 40%となっている。おそらく大学定員の増加とともに歌唱機会が減ったことが影響しているのであろう。その評価と今後の対策が早急に求められる。

Ⅳ－１　子供、身内に進学を勧めるか

Ｑ１５－１．自分の子供、身内に関西学院への進学を勧めたいと思いますか。
　１　思う　　２　思わない

Ｑ１５−２．「１　思う」と答えた方は、その理由を次の中から２つ以内で選んでください。
　１　教育スタッフが充実している　　２　スクールモットーに共感できる
　３　キャンパスの雰囲気がよい　　４　教育施設が充実している
　５　有能な人材を送り出している　　６　就職に有利である
　７　スポーツ・文化活動が活発である　　８　偏差値が高い
　９　高校の先生・塾が勧める　　10　自分の母校である
　11　自宅から通える　　12　歴史や伝統がある
　13　奨学金制度が充実している
　14　その他　（　　）

Q15-1 では、自分の子供、身内に関西学院大学への進学を勧めたいかをたずねた結果、「思う」81.4%「思わない」15.6%と、勧めたいという卒業生の割合が上まわっている。しかしながら、前回の調査では「思う」85.1%「思わない」14.1%であったので、勧めたいという卒業生の割合は減少している。

卒業年別では、勧めたいと「思う」割合は、1951 年卒業生は 95.0%、以下 1956 年 82.1%、1961 年 84.6%、1966 年 83.5%、1971 年 82.7%、1976 年 81.2%、1981 年 78.7%、1986 年 79.4%、1991 年 79.1%、1996 年 75.1%、2001 年 85.5%、2006 年 79.2%、2011 年 84.8%となっている。年次毎にばらつきのある結果となっているものの、前回の結果を合わせても 1980 年代、1990 年代については他の年代に較べてやや低い結果となっている。

また、卒業学部別に見たところ、文学部 74.3%(前回 79.7% 以下括弧内は前回)、社会学部 79.7%(85.5%)、法学部 84.0%(86.5%)、経済学部 81.6%(87.9%)、商学部 86.9%(88.2%)、理(工)学部 76.8%(76.7%)、総合政策学部 82.1%(80.0%)となっており、社会学部、経済学部で 5 ポイント以上低下しているが、他の学部はほぼ前回並と言える。中高出身者については 84.9%と中高出身ではない者の 81.0%に較べて高くなっているが、前回 92.0%からは大幅に低下している。

学生時代の団体参加者、不参加者の比較においては、団体参加者の勧めたい割合は 81.9%、不参加者では 79.6%と、団体に参加していた者の勧めたい割合の方がやや高い。

また、Q15-2 では、「勧めたい」と回答した方に、その理由をたずねたところ、最も多かったものは、「キャンパスの雰囲気が良い」で 53.9%、ついで「自分の母校である」32.8%、「スクールモットーに共感できる」20.8%、「歴史や伝統がある」18.6%となっており、前回と全く同じ順位となった。年代別に見ると「スクールモットーに共感できる」については、1951 年 40%となっているが、年代が下がるにしたがい低下し、2011 年 11.7%となっている。中高出身者についてもスクールモットーへの共感度は高く 38.6%となっており、出身者以外の 19.4%のほぼ倍となっている。

図 4-1 子供、身内に進学を勧めるか（Q15-1）

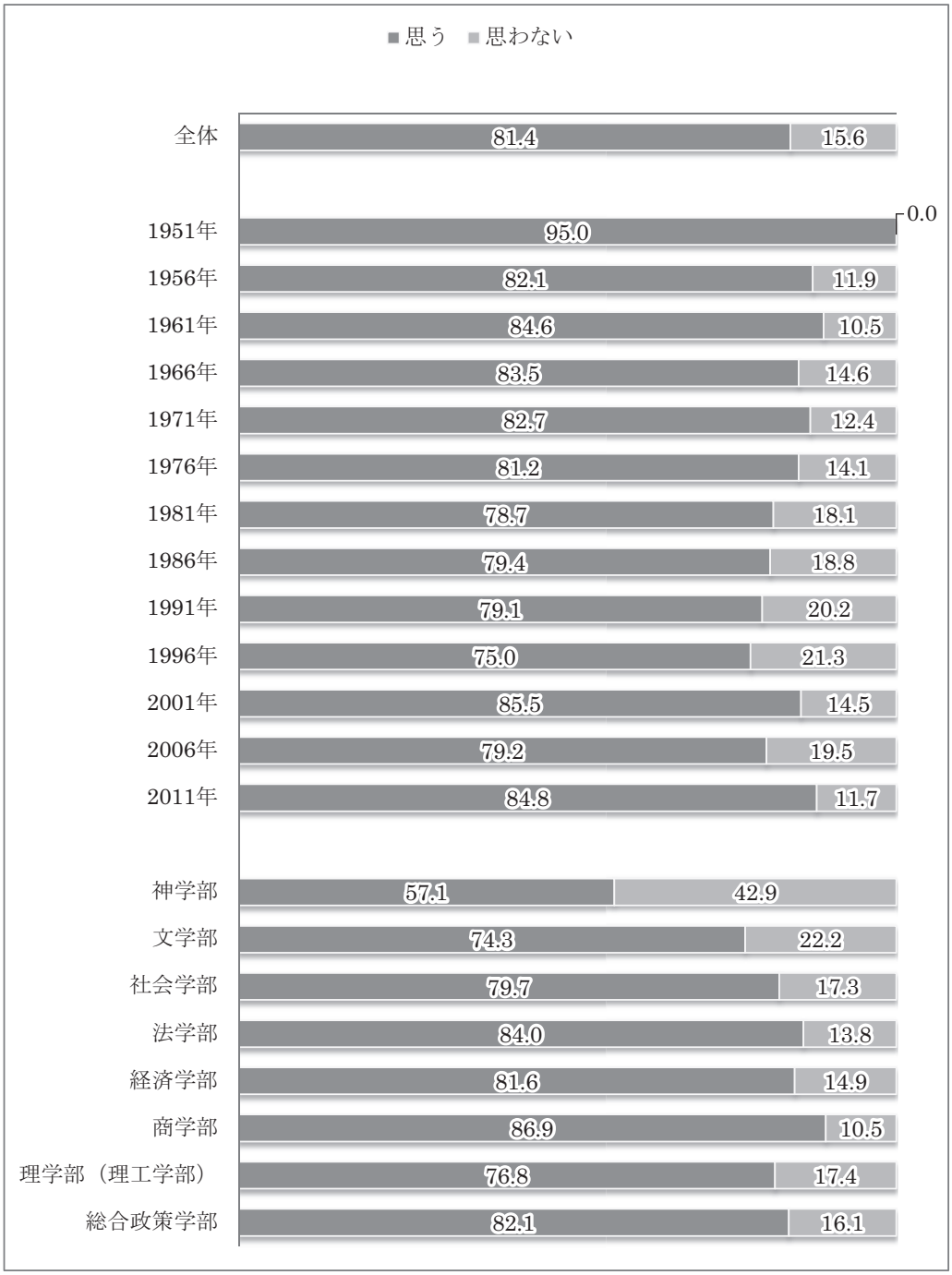
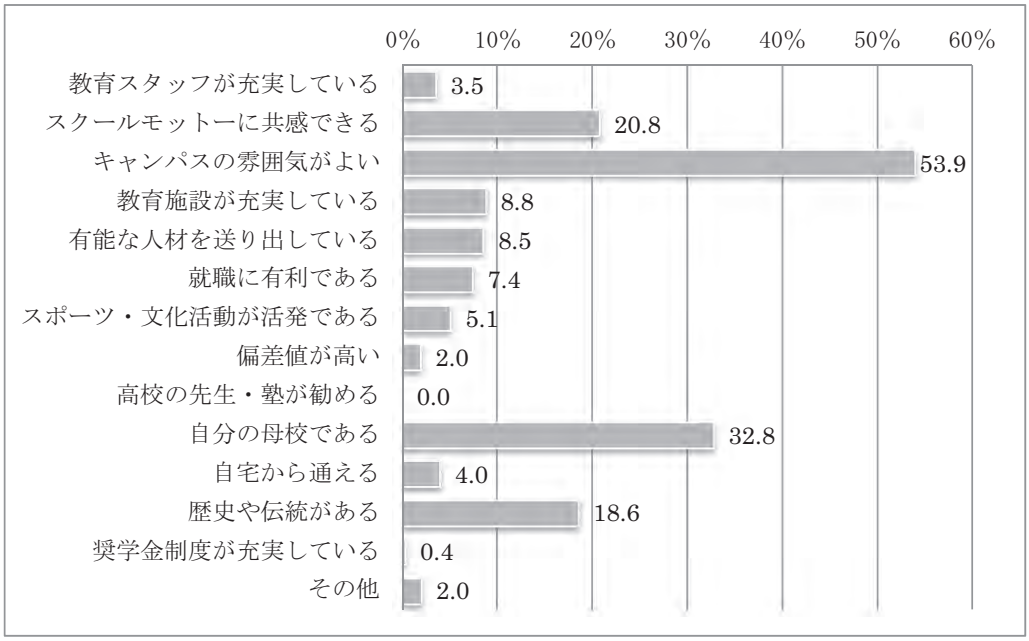


図 4-2 進学を勧める理由（Q15-2）



Ⅳ－２　関西学院の教育に望むこと

Ｑ１６．これからの関西学院の教育にどのようなことを望みますか。
次の中から２つ以内で選んでください。
1　今まで通りで構わない
2　マスタリー・フォア・サービスの精神で社会に貢献できる人間を目指した教育
3　もっと広い教養が身につくようなカリキュラム
4　プレゼンテーション能力などの一般的な能力を養うカリキュラム
5　会計・情報処理などの専門事務的な能力が身につくようなカリキュラム
6　資格取得に結びつくカリキュラム
7　外国語能力を身につける授業の充実
8　国際性を身につけることのできる授業（海外セミナー、留学などを含む）の充実
9　企業インターン制度などの充実
10　その他　（　　）

Q16 では、「これからの関西学院大学の教育にどのようなことを望みますか。」について、10 項目から 2 項目選択してもらった。30%を超えたのは、「国際性を身につけることのできる授業」(38.3%)、「Mastery for Service の精神で社会に貢献できる人間を目指した教育」(36.9%)、「外国語能力を身につける授業の充実」(30.9%)の 3 項目である。前回調査においても、この 3 項目は上位 3 位を占めており、同じ傾向が続いている。「国際性」は前回調査より約 5 ポイント高くなっている。一方、「会計・情報処理などの実務的な能力」は、22.4%から 8.6%と大幅に減少し、「資格取得に結びつくカリキュラム」も、同様に 22.9%から 15.6%と減っている。資格や実務能力を持つ即戦力より、国際性を持ち外国語を運用し、本学の理念を踏まえ社会貢献できる人材の育成に期待が集まってきたといえよう。

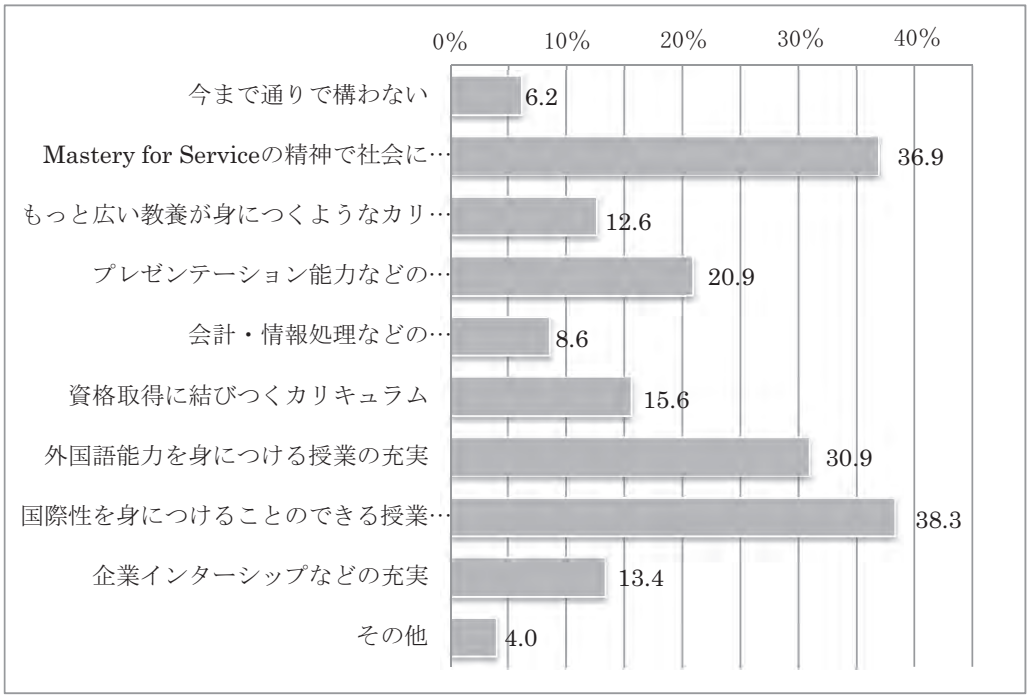
卒業年別では、2 番目に選択率の高い「Mastery for Service」は、1981 年卒業生より上の世代(50 歳代以上の年齢層)では全て 40%を超え、最高値は 1951 年卒業生の 65.0%となっている。前回調査では年齢が上がるとともに高くなる傾向はあったものの最高値は 38.6%だった。大半の年齢層で上昇傾向を見せている点は今回特徴的である。「外国語能力」は、前回調査では 1955 年卒業生の最高値 44.6%から漸減し、2000 年卒業生で最低値 20.4%を示していたが、今回においても 1956 年卒業生が最高値 46.3%、2006 年卒業生が最低値 20.1%と同様の傾向を見せた。ただし、今回は 30 歳代～40 歳代前半の層でいずれも 30%を超えており、同世代が企業のグローバル化で外国語の修得を迫られていることが推察される。「広い教養」は全体では 12.6%と前回調査の 13.2%をやや下回ったが、年齢層では 20 歳代が高く、総合大学における教養教育の在り方を問いかける結果となっている。

学部別では、「Mastery for Service」で、総合政策学部のみが 30%を切る結果となった。理工学部には旧理学部卒業者が含まれているので、総合政策学部の数値にキャンパスによる差異が反映されていると考えると、キャンパスの違いが教育理念への期待に影響を与えるのか、気になるところである。

また男女別では、「資格取得」は男性 12.3%に対し、女性 23.1%と、性別による差が 10%を超えた。女性が資格取得を重視する背景には、結婚や子育てのためキャリアを中断した

際も、資格取得が職場復帰に優位に働くという経験や期待があるのではないだろうか。

図 4-3 大学の教育に望むこと（Q16）



Ⅳ－３　関西学院に望むこと

Ｑ１７．これからの関西学院にどのようなことを望みますか。
次の中から２つ以内で選んでください。

1	今までのやり方の堅持	2	学問研究分野での知名度の向上
3	スポーツ分野での知名度の向上	4	マスコミへの登場回数の増加
5	入試偏差値の向上	6	教育カリキュラムの充実
7	生涯学習プログラムの開発	8	大学の地域への開放
9	同窓家族向けの入学制度の導入	10	同窓会活動の活発化
11	その他　（　　）		

Q17 では「これからの関西学院大学にどのようなことを望みますか。」について、前回の項目に「その他」を加え、11 項目から 2 項目選択する質問を行った。前回までは 10 項目から 3 項目の選択だったので、比率の比較はできないが、前々回、前回と同様に、上位 3 項目には、「学問研究分野での知名度の向上」(46.7%)、「教育カリキュラムの充実」(29.8%)、「生涯学習プログラムの開発」(20.9%)があげられている。4 位となった「入試偏差値の向上」(19.1%)は 3 択だった前回調査と同率だが、前回の選択では 7 位だったので、卒業生の関心がさらに高まっていることがわかる。

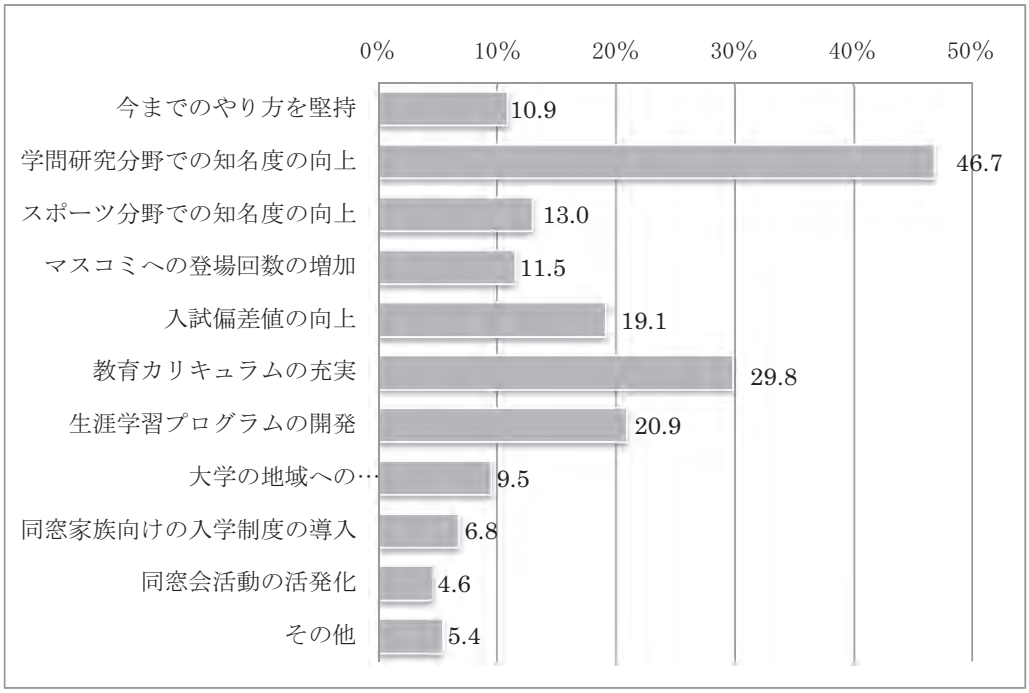
居住地別では、海外居住で「教育カリキュラム」が 63.2%と高いのが目立つ。海外と比較し日本の学生は学習時間が少ないと言われているが、海外で現地の高等教育の実情に触れることで、教育の充実への期待度が高まっているのかもしれない。

卒業年別では、最も選択率の高かった「学問研究分野での知名度」は、卒業後 40 年目にあたる 1971 年卒業生が 55.7%で最高値となっており、2011 年卒業生のみ 40%を切るが、いずれの卒業年層でも最も選択される項目となっている。次に選択率の高かった「教育カリキュラム」については、1996 年卒業生より年長の 3 つの層で 35%を超えている。この 3 つの層では「入試偏差値」の選択も 20%を超えている。年代的には 30 歳代後半から 40 歳代後半にあたり、企業では中堅リーダーとして後輩との接点から、また家庭では子どもの高校・大学への進学から、教育や入試への関心が強くなっていると考えられる。「生涯学習プログラム」については、前回調査では卒業後 10 年目(30 歳代前半)の層と 35 年目(50 歳代後半)の層が他の卒業年層より高くなっていた。今回は 20 歳代では 10%台だが、30 歳代以上はほぼ 20%を超えており、世代による大きな差異は見られない。各年代層のニーズに対応した生涯学習プログラムの提供が、大学にとって今後重要となる。

学部別では、「大学の地域への開放」で神学部が 57.1%と高いのが目立った。この項目は他学部では 10%台だが、各地で伝道活動を進める神学部卒業生からは、地域に根ざした大学の存在に期待が寄せられているのかもしれない。「学問研究分野での知名度」での理学部(理工学部)の 66.7%、「入試偏差値」での総合政策学部の 33.9%も他学部に比し高く、特徴的である。

男女別では、「スポーツ分野での知名度の向上」、「マスコミへの登場回数の増加」、「入試偏差値」、「教育カリキュラム」に 5%以上の性別による差異が見られた。

図 4-4 大学に望むこと（Q17）



Ⅳ－４　関西学院のイメージ

Ｑ１８．関西学院のイメージについて項目ごとに番号を○で囲んでください。

明るい	1…2…3…4…5…6…7	暗い
親しみやすい	1…2…3…4…5…6…7	親しみにくい
気力が充実している	1…2…3…4…5…6…7	無気力
開放的	1…2…3…4…5…6…7	閉鎖的
暖かい	1…2…3…4…5…6…7	冷たい
前向き	1…2…3…4…5…6…7	後ろ向き
きれい	1…2…3…4…5…6…7	汚い
高い	1…2…3…4…5…6…7	低い
居心地が良い	1…2…3…4…5…6…7	居心地が悪い
進歩的	1…2…3…4…5…6…7	保守的

Q18 では、関西学院のイメージについて、「明るさ」「親しみやすさ」「気力が充実している」「開放的」「暖かい」「前向き」「きれい」「位置が高い」「居心地」「進歩的」の 10 視点で 7 段階評価をしてもらった。ポイントが高くプラス評価されていたものは「大変明るい」「明るい」82.2%、「大変きれい」「きれい」82.0%、「大変親しみやすい」「親しみやすい」67.8%、「大変居心地が良い」「居心地が良い」65.1%となっている。逆に、「大変進歩的である」「進歩的である」29.5%「大変気力が充実している」「気力が充実している」が 34.5%、「大変前向きである」「前向きである」43.6%、「大変位置が高い」「位置が高い」が 46.4%と低くなっており、やや評価が低い項目である。これは前回調査と同じ結果である、イメージの変化が見られない。

男女別に見た時には、女子の「大変○○」というポイントは全ての項目で男子を上まわっており、プラス評価となっている。中高出身者とそれ以外の者での比較については、前回の調査結果とは少し異なっている。中高出身者の評価は、前述のやや評価が低い項目では、全体に較べても低い評価結果となっていることがわかる。

年次別に見た時に、「大変○○」という項目だけ見れば、「大変明るい」、「大変気力が充実している」、「大変開放的」、「大変暖かい」、「大変前向き」、「大変きれい」については年次が若くなればなるほど高いポイントを示している。若い卒業年次になればなるほど女子卒業生の比率が高くなっているのが要因であると推察する。逆に言えば「大変親しみやすい」「大変居心地が良い」「たいへん進歩的」については年次毎の差異がないか、一定の傾向は見られない。

図 4-5 関西学院のイメージ（Q18）

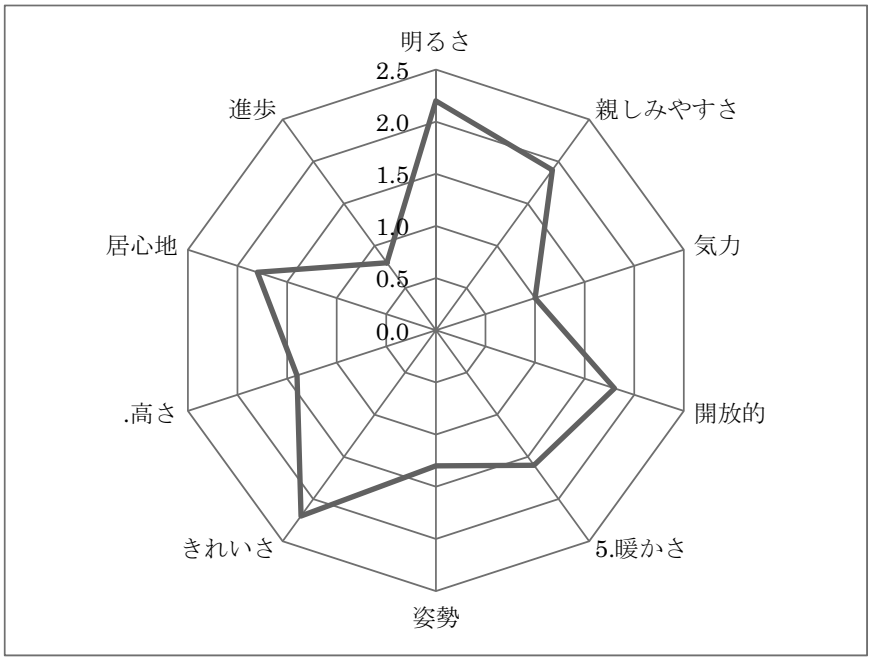
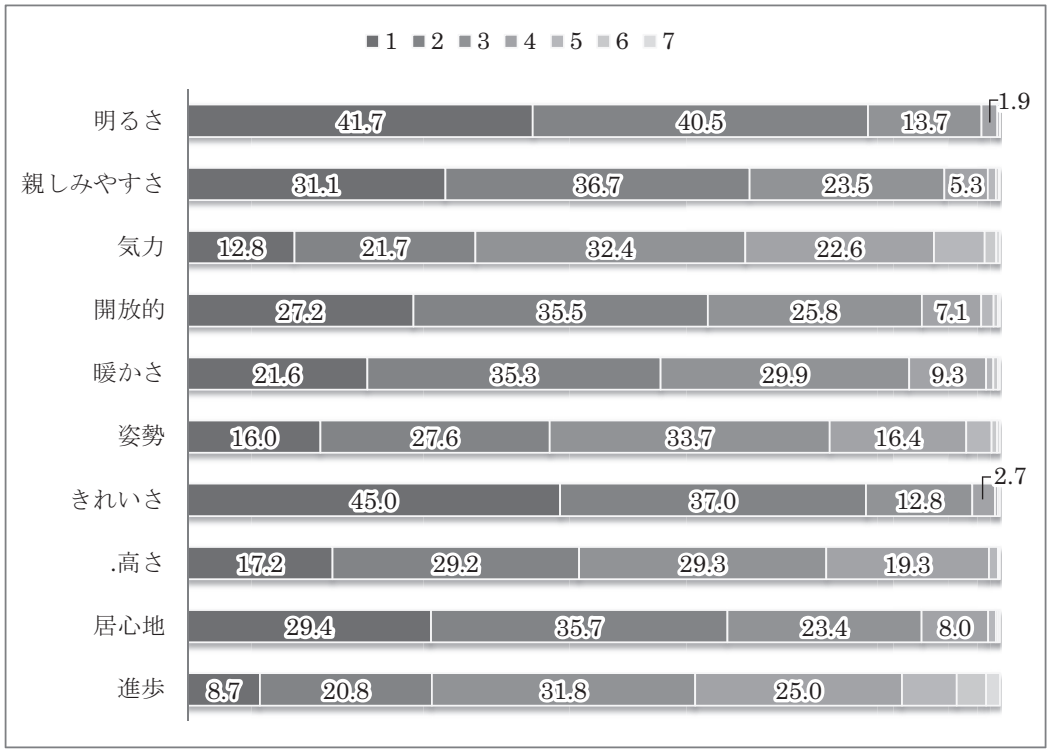


図 4-6 関西学院のイメージ（Q18）



Ⅳ－５　大学の評価(まとめ)

JMM(Japan Mail Media)は、作家の村上龍氏が主宰するメールマガジンであり、発行部数は約 10 万部と、おそらく勝手に送りつけられてくる広告主体のメールマガジンを除けば、日本では「老舗」の大手メールマガジンということになるであろう。このメールマガジンは、主宰者からの問いかけに対して、「寄稿家」と称される様々な分野からの執筆者が投稿したものを主宰者が編集して掲載するところに特徴がある。

ほぼ毎日配信されてくるので、よほどのことがない限り読み流してしまうことのほうが多いが、最近(2012 年 1 月)村上氏が問いかけた「受験、そしてもうすぐ新入学の季節です。医療系など一部を除いて実務教育が乏しい日本の大学で、どういったことを、いかに学ぶべきか、学生たちにアドバイスをいただければと思います」というテーマについては、大学に関わる者として、いくつかの「寄稿」を興味深く読んだ。

そこでは、「大学では理論教育が重視されるあまり、実務に関する教育が軽視されがちだ」という、この種のテーマでは必ず出てくる主張もあれば、他方、(これもまたよくある主張ながら)「大学での実学志向は不要である。広く教養を身につけてほしい」といった反論も出てくる。こうした大学の外の世界からの意見に対して、大学内部からは、「抽象度の高い理論的な授業ほど、むしろ(特定のテーマにフォーカスしていない分)世間に出てからの汎用性が高いのだ」といったように、さすがに大学の教員らしい「上手い論理」で議論の矛先を躱してみせたりもしている。しかしながら、「もはや日本の大学で何かを学ぶことは期待できない」などと言われてしまうと、もはや議論自体が成り立たない。

このようにそもそも「大学の評価」なるものは、大学のどれくらい外にいるのか内にいるのか、大学にどのようなかたちでかかわってきたのかといったような、それぞれの評価者の立場の違いによってさまざまである。しかし、シャンプーのような日用品であれ、大学教育のような教育サービスであれ、およそその商品それ自体の消費者の意見は、もっとも貴重である。そして卒業生は、まさにその大学教育の消費者である。今回のような「卒業生調査」の意義もそこにある。

ただし、シャンプーも大学教育も、たいていの場合、(たんに安いという理由だけで購入したとか、不本意ながら入学し、不本意ながら卒業したという極端なケースを除けば)もともとある程度その商品が気に入って購入しているので、最初から一定の期待や共感を持ってくれているという側面がある。しかし反面、その期待や共感をいったん裏切ると、その後は本来の評価よりもさらに大きくぶれた評価になってしまう傾向もあるだろう。

その上難しいのは、シャンプーと違って大学教育は、「繰り返して消費する」ものではないだけに、一度埋め込まれてしまったイメージはよくも悪くも固定化し、ややもすれば時を経て増幅してゆく傾向もあるように思われる。それだけに、大学に関わる者は、常にその一度きりの消費に対して真剣に向き合うことが必要となる。

今回の『卒業生調査報告書』で「大学の評価」について用いられた質問項目は、「①子供・身内に進学を勧めるか(Q15)」、「②大学の教育に望むこと(Q16)」、「③大学に望むこと(Q17)」、「④大学のイメージ(Q18)」の 4 つである。「①子供・身内に進学を勧めるか 」については、「思う」との回答が 81.4%で、前回調査の 85.1%から 4%近く低下した。「②大

学の教育に望むこと」では、「国際性」と「外国語能力」というキーワードにいずれも 30%超の回答が反応した。「③大学に望むこと」では、「知名度の向上」に加えて、「偏差値の向上」が順位を上げた。「④大学のイメージ」では、「明るくて」「きれいな」大学ということのようである。

「偏差値が低下する中で、もっと外国語能力が身に付く国際性豊かな大学を目指してくれないと、なかなか身内には勧めにくい」というのが卒業生の本学に対する評価であるとすれば、かなり残念な結果である。しかしそれでも、「④大学のイメージ」については若い世代ほど「前向き」で「気力がある」大学だと評価してくれているようであり、本学の最近の動きに対する一定の期待感を感じ取ることができる。

ところで難しいのは、当然のことながら、この評価結果を大学内においてどう認識し、どう活かしていくかということである。「国際性」を求められたからといっても、それはたんに外国語能力の強化だけが要素とはならないだろう。また、「大学の教育に望むこと」の項目では「実務的な能力」が前回調査の 22.4%から 8.6%へと大幅に低下しているのだが、だからといって実務的な能力が不要となったわけではないだろう。あるいは、実務的な能力よりも、もっと教養的な側面を伴う国際性が求められているのかと思えば、そうでもない。実はおそらく国際性がもっとも高いはずの「海外居住者」の回答では、いちばん実務に近い「インターンシップの充実」が強く求めてられていたりするのである。

冒頭のわずか 10 名前後の「寄稿家」たちの意見をみても、あるいは今回のような大がかりな調査の結果をみても、「大学の評価」はいつも多様である。多様性こそが大学の本質であるとすれば、それはある意味で健全な評価なのかも知れない。この多様な「大学の評価」を、本学としていかなる方向に向けて高めてゆくべきかについては、本報告書に基づいた冷静な分析と判断による次の一手が大切である。

Ⅴ－１　大学の情報提供

Ｑ１９．卒業生に対する情報提供は充実していると思いますか。
　１　そう思う　　２　そう思わない

Q19 では、関西学院からの情報提供について充実していると思うかについてたずねた結果、全体では、「そう思う」48.7%、「そう思わない」47.7%であった。

居住地別に見ると、「そう思う」卒業生が多かった地域は、中部・北陸、近畿、中国、四国、九州・沖縄で、一方「そう思わない」卒業生が多かった地域は、北海道・東北、関東、海外だった。しかし近畿地方においては、アンケート回答者数が 1,288 人のうち、645 人が「そう思う」と答えているが、「そう思わない」の 600 人に「無回答」43 人を加えると、「そう思う」と拮抗する。さらに関東地方では、「そう思う」40.7%に対し、「そう思わない」55.6%で、「そう思わない」が 14.9%上回っている。上記の近畿と関東以外の地域では、回答者の母数を勘案すると、「そう思う」と「そう思わない」に大きな差は見出せない。

卒業年では、比較的新しい 2001 年、2006 年、2011 年の卒業生では、「そう思わない」と回答している卒業生の方が「そう思う」卒業生より多い。一方、1951 年から 1996 年までの卒業生では、1956 年、1981 年、1986 年を除くと、「そう思う」と回答している卒業生が多い。卒業生が関西学院に関する情報を入手することのできるツールが、現在、主に年 2 回発行される「母校通信」と関西学院ホームページであることから、メール配信などによる電子媒体の情報入手に慣れている若年層には不足感が生まれてきているのではないだろうか。

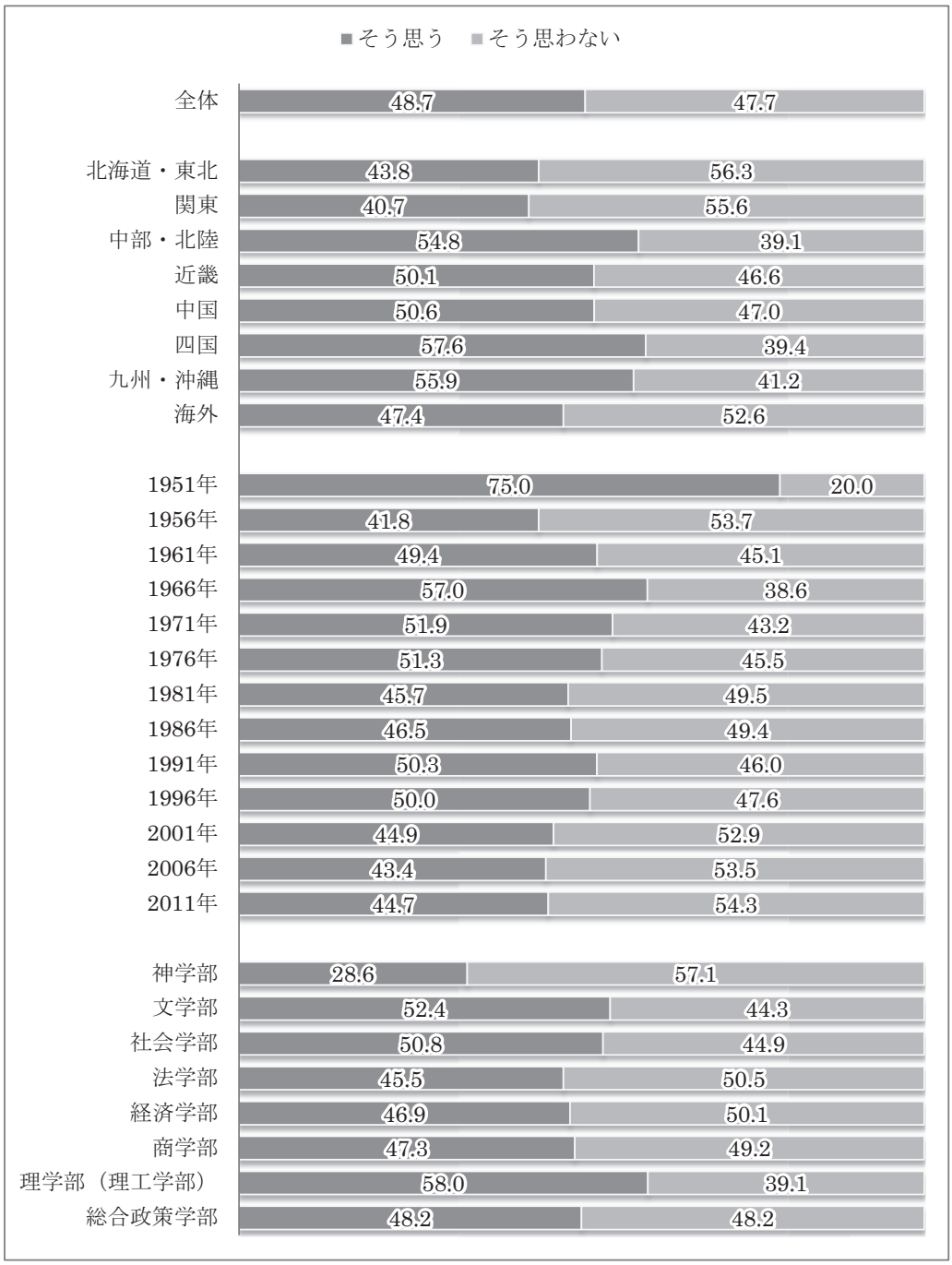
学部別では、理学部(理工学部)卒業生が「そう思う」58.0%、「そう思わない」39.1%で、その差が 18.9%あり、全体の平均に比べ「そう思う」が大きく上回っている。理工学部独自の同窓会活動の成果によるものが功を奏していると思われる。同様に総合政策学部においても同窓会活動が活発化しており、現在は「そう思う」(48.2%)と「そう思わない」(48.2%)が拮抗しているが、今後その効果が調査に表れることを期待できる。

中高出身者かどうかで見た場合にも同様のことが言える。同窓会活動が活発な中学部出身者においても「そう思う」83.3%、「そう思わない」16.7%という結果で、実人数の分布から見ても、中学部出身者は関西学院からの情報提供が充実していると答えている。

男性は「そう思う」47.5%、「そう思わない」48.8%で、「そう思わない」が僅かに上回っている。一方、女性は「そう思う」(51.5%)、「そう思わない」(45.2%)で「そう思う」が 6.3%上回っている。女性の方が、男性よりも情報提供は充実していると回答している。

課外活動団体に参加していたかどうかでは、参加していた卒業生の方が参加していなかった卒業生より「そう思う」と回答している比率が、僅かではあるが高い結果となった。

図 5-1 大学の情報提供（Q19）



Ｑ２０．関西学院の情報に触れる主な媒体は何ですか。
1　マスコミ　　2　同窓会誌「母校通信」
3　大学案内「空の翼」　　4　２．３．以外の学院発行物
5　関西学院ホームページ
6　ツイッター、フェイスブックなどSNS（ソーシャルネットワークサービス）

Q20では、関西学院の情報に触れる媒体をたずねた。その結果、第1位は、同窓会誌「母校通信」（80.1%）であった。これは前回(2005 年)、前々回(1999 年)の調査結果と同様である。次に多かったのは「関西学院ホームページ」13.4%で、第3位は前回調査2位（10.6%）であった「マスコミ」8.5%で、今回は順位を下げている。「母校通信」による情報入手が大勢を占めてはいるものの、前回調査結果では、「マスコミ」10.6%と、「関西学院ホームページ」6.8%であったものが、今回調査ではそれぞれ 8.5%と 13.4%という結果となっており、ネット・IT 媒体が情報の入手手段として浸透しつつあると言える。

居住地別で見ると、いずれの地域においても「関西学院ホームページ」と「ツイッター、フェイスブックなどSNS」の合計占有率は、「マスコミ」の占有率のほぼ2倍に相当する。この傾向を卒業年ごとに見ると、さらに顕著である。2011 年の卒業生は「関西学院ホームページ」31.5%、「ツイッター、フェイスブックなど SNS」12.7%で、「マスコミ」16.8%を大きく引き離している。ネット・IT 媒体は若年層を中心に急速に浸透しつつあることがわかる。

さらに紙媒体である「母校通信」の占有率にも大きな変化が現れている。1976 年以前の卒業生のおおよそ 50 歳代半ばより上の世代では 9 割以上、それより下の 30 歳代程度までは 8 割が「母校通信」と答えている。しかし 2006 年卒業生は 67.9%、2011 年卒業生は 24.9%まで占有率を下げている。2011 年卒業生は、「関西学院ホームページ」の占有率が 31.5%、「ツイッター、フェイスブックなどSNS」12.7%で、関西学院の情報は「母校通信」ではなく、いつでも興味関心のある情報にアクセスできるネット・IT 媒体へ若年層では移行しつつあると見ることができる。

学部別では総合政策学部を除くすべての学部で「母校通信」の占有率が 8 割前後を占めているのに対し、総合政策学部においては「母校通信」48.2%、「関西学院ホームページ」が 25.0%、「ツイッター、フェイスブックなどSNS」は 10.7%となっている。開設から 16 年を経てはいるが、今回の調査対象学部の中では、総合政策学部の卒業生は若い世代に属していることから、他の学部とは顕著な違いを見せる結果となっている。

図 5-2 関学情報の入手媒体(全体)(Q20)

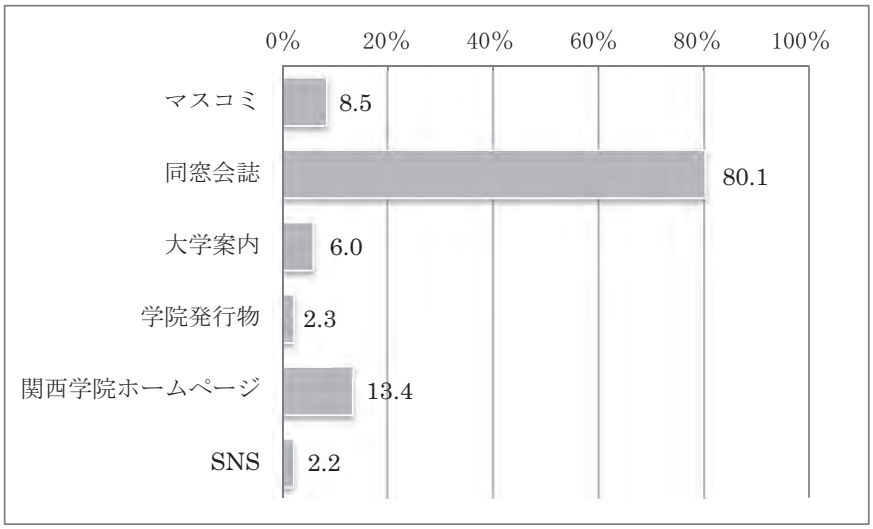
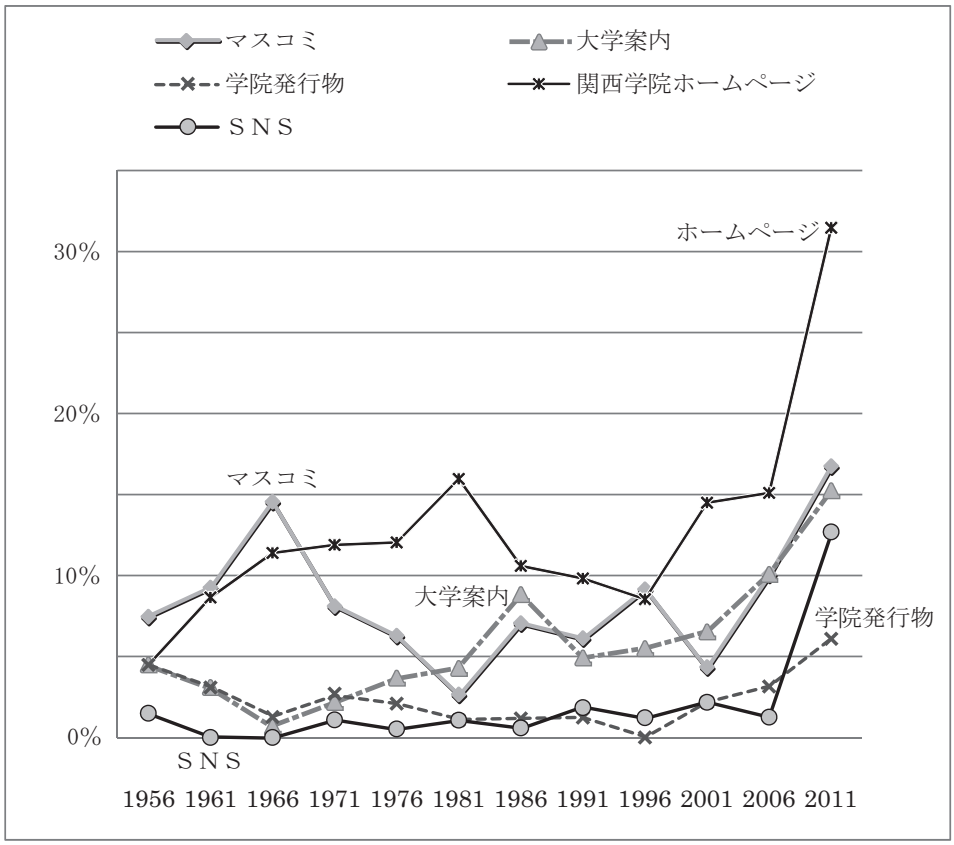


図 5-3 関学情報の入手媒体(卒業年別)(Q20)(同窓会誌をのぞく)



Ｑ２１．関西学院の情報を得るには、どのような媒体が望ましいですか。
1　マスコミ　　2　同窓会誌「母校通信」
3　大学案内「空の翼」　　4　２．３以外の学院発行物
5　関西学院ホームページ
6　ツイッター、フェイスブックなど SNS（ソーシャルネットワークサービス）
7　その他　（　　）

Q21 では、「関西学院の情報を得るには、どのような媒体が望ましいですか」とたずねた結果、同窓会誌「母校通信」と回答した卒業生は 41.2%で第１位だった。第２位は「関西学院ホームページ」で 33.5%であった。Q20 の「関西学院の情報に触れる主な媒体は何ですか」の回答では、「母校通信」80.1%、「関西学院ホームページ」は 13.4%であった。これに比較すると Q21 の望ましい媒体の回答では、電子媒体が大きく増加しその差が大幅に縮まった。さらに「ツイッター、フェイスブックなど SNS」もQ20 の「関西学院の情報に触れる主な媒体は何ですか」では 2.2%だったが、Q21 の「どのような媒体が望ましいですか」では回答した卒業生は 8.0%であった。実際に情報を入手している媒体は「母校通信」だが、望ましい媒体は、ネット・IT 媒体が欠かせないツールであることがわかる。

地域別に見ると、海外に居住する卒業生が考える望ましい媒体は「母校通信」31.6%に対し、「関西学院ホームページ」は 52.6%であったが、国内居住者全体では「関西学院ホームページ」は 32.6%で、「母校通信」が 41.5%となっており、望ましい媒体は「母校通信」と回答した卒業生が多かった。

次に卒業年で見ると、1966 年卒業以前の 60 歳代後半以上の卒業生は 2 人に 1 人以上が、「母校通信」と答えている。一方 2011 年の卒業生は「母校通信」24.4%、「関西学院ホームページ」23.4%と、ほぼ同率だった。「ツイッター、フェイスブックなど SNS」は、1996 年、2001 年、2006 年、2011 年の卒業生は他の世代に比べて SNS への期待度が高くなっている。

学部別では、おおよそ「母校通信」、「関西学院ホームページ」の順番でツートップだが、総合政策学部卒業生に関しては「母校通信」26.8%に対し、「ツイッター、フェイスブックなど SNS」が 28.6%で、電子媒体がわずかだが上回っている。

現在、広報室では、ネット・IT 媒体での情報発信の強化をはかっている。ホームページによる公式情報の公開とともに SNS でのコミュニケーションを促進する考えである。これによって「母校通信」との相乗効果をはかり、卒業生間の絆がさらに太くなることを目指している。

図 5-4 今後希望する関学情報の入手媒体(全体)(Q21)

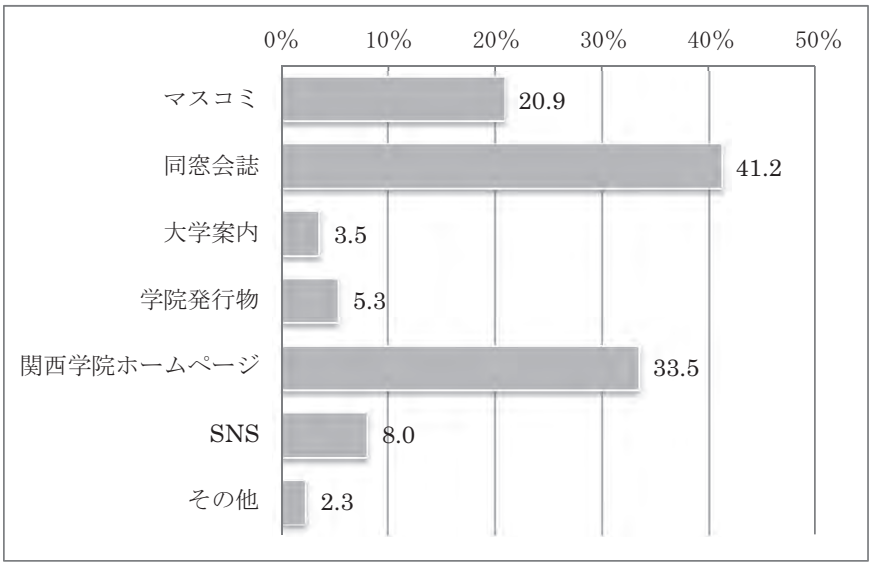


図 5-5 今後希望する関学情報の入手媒体(卒業年別)(Q21)

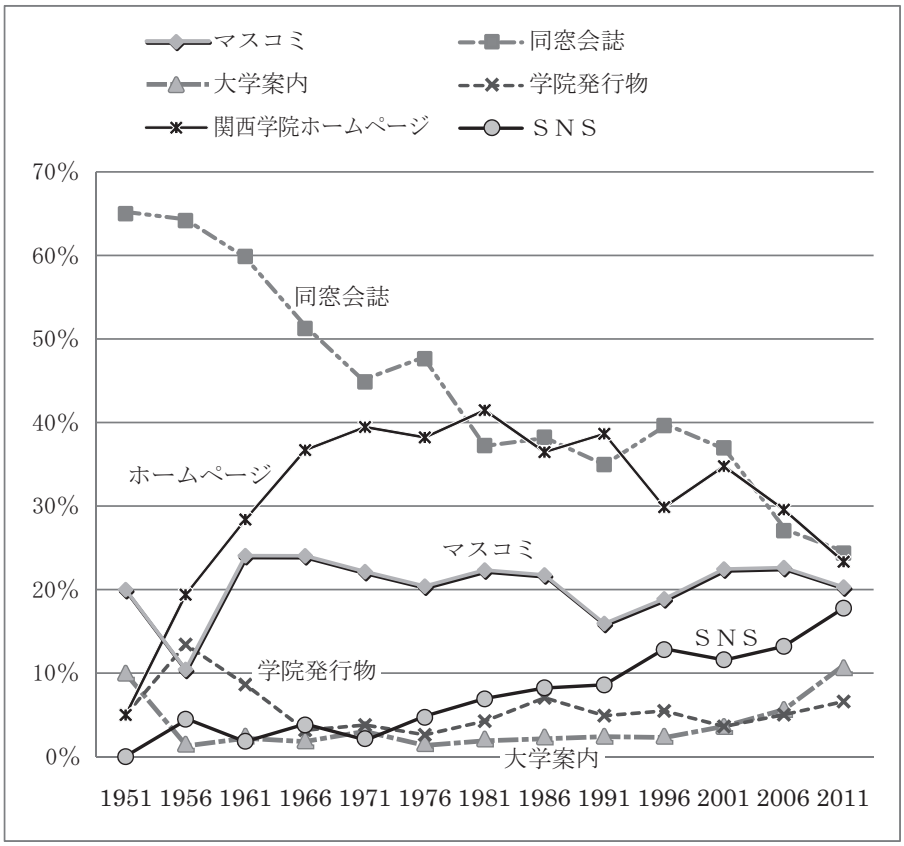
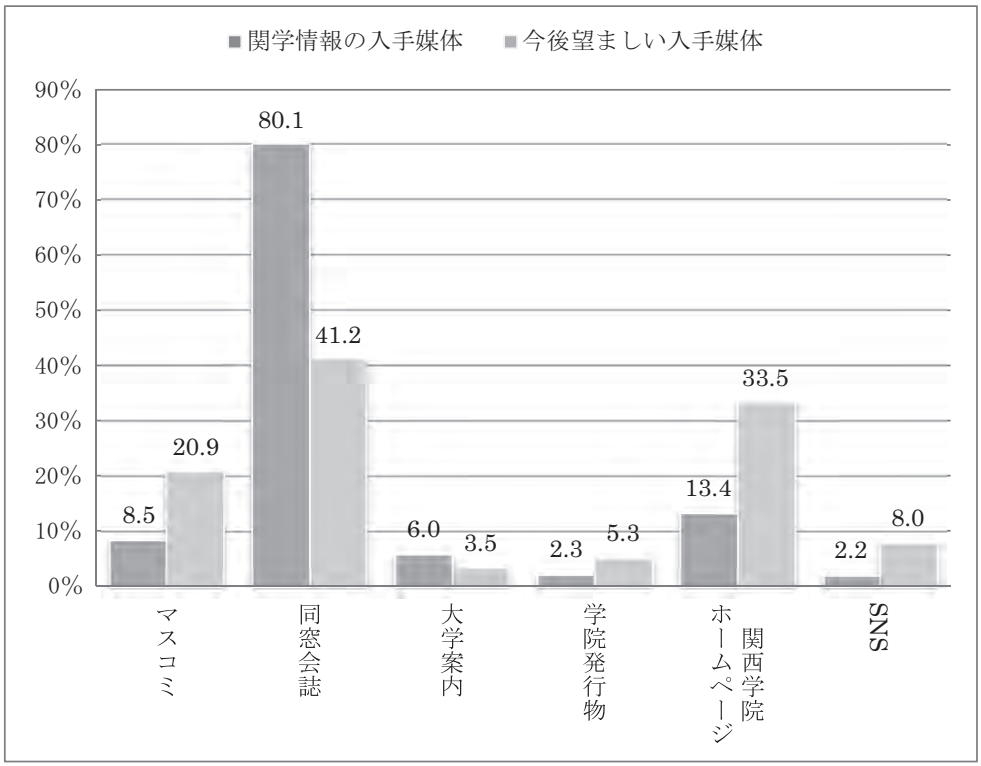


図 5-6 関学情報の入手媒体(現状と今後)



Ⅴ－２　大学への訪問

Ｑ２２．最近５年間で、どれくらい大学を訪れましたか。
　１　11 回以上　　２　4～10 回　　３　1～3 回　　４　訪れたことはない

Ｑ２３．卒業後、大学を訪れた主な目的を、次の中から２つ以内で選んで下さい。
　１　大学祭・同窓会などで　　２　後輩のクラブ活動の指導で
　３　図書館・チャペル・関西学院会館など大学施設の利用で
　４　ゼミの先生や仲間に会いに　　５　聴講や研究で
　６　卒業・成績証明書をもらいに　　７　懐かしさを感じて
　８　家族に母校を見せるために　　９　公開講座・各種講演会のために
　10　その他　（　　）

卒業後のキャンパス訪問頻度とその理由を、前回同様の質問項目にて、Q22・Q23 で尋ねた。ただし、前回は「卒業後」としていたのに対し、今回は「最近 5 年間」と期間を限定した。そのため比率については単純に比較できない。

まず、訪問頻度については、最近 5 年間と期間を限定したことにより、前回調査の「全くなし」9.8%と比べ、今回は「訪れたことがない」が 41.6%で、31.8 ポイントと大幅な増加となっている。訪問回数を問わずに見ると、「11 回以上」10.8%、「4～10 回」8.9%、「1～3 回」37.1%と、全体として 56.8%が最近 5 年間で 1 回以上キャンパスを訪れたことになる。

訪問理由では「懐かしさを感じて」29.5%(前回 41.0%)、「大学祭・同窓会などで」23.0%(前回 33.5%)が目立っているが、無回答が 21.3%(前回 12.7%)と 8.6 ポイント増加している。

卒業年別に見ると調査実施年に卒業した 2011 年卒業生の 59.9%が 11 回以上の回答となっている。質問「最近 5 年間で、どのくらい大学を訪れましたか。」に対し、前回調査実施年に卒業した 2005 年卒業生の半数近くが一度もキャンパスを訪問していなかった結果に比べると大幅な増加であるが、今回の質問には卒業後ということが明記されていないため、在学中を含めての回答が含まれる可能性がある。

また前回調査で 2000 年以前の卒業生は９割ないしそれ以上が一回以上キャンパスを訪れたのに対し、今回の調査では概ね５割、多くても 7.5 割の訪問にとどまっている。これは卒業後に大学を訪れているが、最近 5 年間での訪問は半数程度であるということである。訪問理由は前回ほぼ全ての年代において「懐かしさを感じて」が４割前後あったが、1951 年卒の 60.0%を除いて 3 割台前半までにとどまっている。なお、大学受験期のお子様を持つ年齢 40～50 歳代の卒業年の回答で「家族に母校を見せるために」が、退職後と考えられる年齢 60 歳代では、「公開講座、各種講演会を聞くために」が多くなっている。

学部別に見ると、「訪れたことはない」は、前回調査では総合政策学部(31.0%)を除き、10%前後であったが、今回調査では総合政策学部(33.9%)を除き、40%前後となっている。また総合政策学部は「11 回以上」30.4%となり、他の学部は 15%迄に収まっている。

居住地別では、訪問頻度で近畿が高い(「訪れたことはない」36.3%)のは当然としても、それ以外で北海道・東北(「訪れたことはない」25.0%)、四国(「訪れたことはない」39.4%)

が高いのが目立つ。この 2 地域の頻度を見ると、北海道・東北は「1～3 回」が 56.3%、「11 回以上」は近畿 13.4%、四国 12.1%と違いを見せる。なお、海外が「訪れたことはない」52.6%に比べ、「11 回以上」が 10.5%と回答者数は少ないとはいえ訪問頻度は高くなっている。

中高出身では、中学部・高等部が際だって高い(「11 回以上」18.8%、「訪れたことはない」18.8%)。以下、高等学部(「訪れたことはない」38.0%)、いずれでもない(「訪れたことはない」43.0%)、中学部(「訪れたことはない」50.0%)の順となった。

男女別は毎回その差が縮まっている。「訪れたことはない」は、前回、男性は 7.9%、女性は 14.4%であったが、今回、男性は 42.5%、女性は 39.7%となっている。ただし、男性がわずかに女性を上回る傾向の中、「11 回以上」のみ、女性 14.8%で男性 9.0%を上回っている。

団体参加別では「訪れたことはない」は参加 39.5%(前回 8.2%)、不参加 47.2%(前回 13.9%)と同傾向の差になっているが、「11 回以上」では、参加 11.0%(前回 16.5%)、不参加 10.3%(前回 12.6%)と縮まっている。

図 5-7 最近 5 年間の大学訪問回数（Q22）

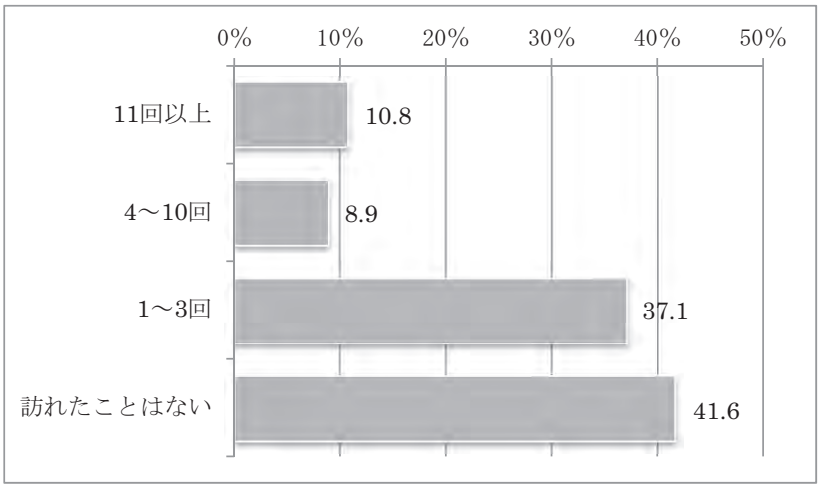
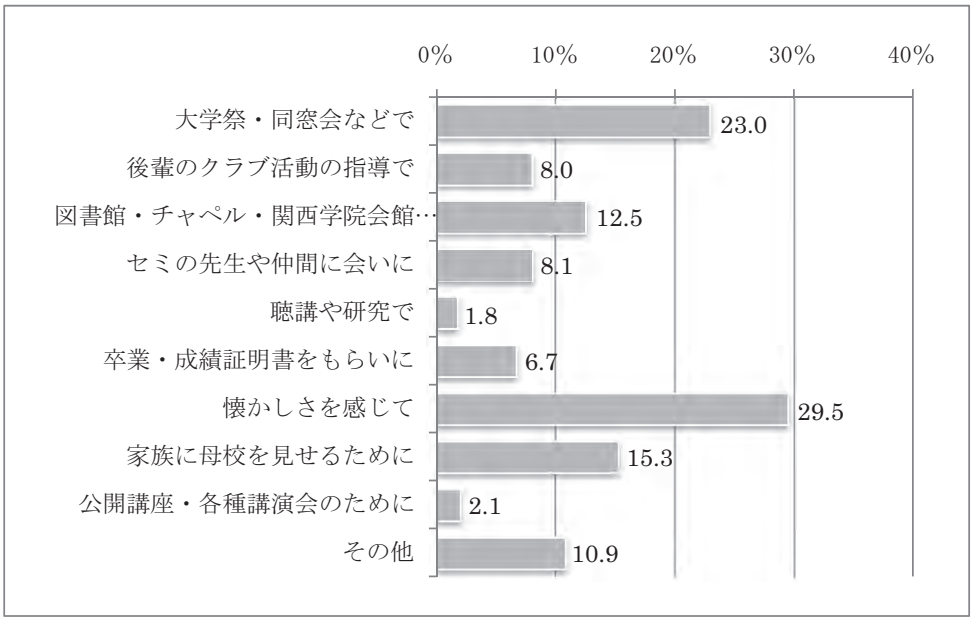


図 5-8 大学を訪れた理由（Q23）



Ⅴ－３　卒業後の同窓とのつながり

Ｑ２４．卒業後、同窓とのつながりをどのように持っておられますか。
次の中から２つ以内で選んでください。
1　同窓会地域支部に参加している
2　企業内・職域などの同窓の集まりに参加している
3　クラブ・サークル・ゼミの集まりに参加している
4　先輩・同期・後輩とのプライベートなつながりがある
5　先生とのつながりがある
6　スポーツ・音楽などの行事を通じて
7　特別なものはない

Q24 では、「卒業後の同窓とのつながり」についてたずねた。卒業後も母校とのつながりを持っている率を、「特別なものはない」(23.5%)、「無回答」(2.1%)を除外した率とすると 74.4%となる(第 1 回 81%、第 2 回 76%)。卒業生との窓口を担当する校友課が持つ関西学院同窓会活動への直接的参加状況の日常的な感覚からはかなり高く感じる。あらためて、卒業生の多くは潜在的に母校に対して強い関心を持っていることを再認識し、今後の校友行政に多大な期待を示唆する数字と受け止めることができる。

項目内容を見ていると、「先輩・同期・後輩とのプライベートなつながり」が 51.6%(第 1 回 55.0%、第 2 回 55.0%)で最も高く、次いで「クラブ・サークル・ゼミの集まり」が 31.0%(第 1 回 33.0%、第 2 回 31.6%)、「同窓会地域支部への参加」が 10.9%(第 1 回 9.9%、第 2 回 12.3%)、「企業内・職域などの同窓の集まり」が 8.9%(第 1 回 13.7%、第 2 回 11.7%)、「先生とのつながり」が 6.7%(第 1 回 10.5%、第 2 回 8.1%)、「スポーツ・音楽などの行事を通して」5.5%(第 1 回 5.9%、第 2 回 5.8%)と前回と同順位で続いている。

「先輩・同期・後輩とのプライベートなつながり」10.9%(第 1 回 9.9%、第 2 回 12.3%)では、卒業年では、2011 年卒 63.5%を最高ポイント、1951 年卒 35.0%を最低ポイントとして年々減少している。また学部では総合政策学部 67.9%が突出して多い。性別で、多くの項目で男性が上回る中、女性 63.6%・男性 46.2%と、17.4 ポイント女性が多い。

「クラブ・サークル・ゼミの集まり」31.0%(第 1 回 33.0%、第 2 回 31.6%)では、2011 年卒 50.3%、2006 年卒 39.6%と 20 歳代が多い。中高出身者では 38.7%に対し、いずれでもない 30.2%と差がひらいている。また、性別では女性 31.9%・男性 30.4%と、僅かではあるが女性が上回っている。

「同窓会地域支部への参加」が 10.9%(第 1 回 9.9%、第 2 回 12.3%)では、卒業年で、「先輩・同期・後輩とのプライベートなつながり」とは逆に 2011 年卒 0.0%を最低ポイント、1951 年卒 45.0%を最高ポイントとして年々増加している。学部で総合政策学部 0.0%、理工学部 4.3%も他と比較して少ない。居住地では近畿 9.5%に比較し多くの地域が上回っている(四国 24.1%、中国 24.1%、中部・北陸 16.5%、海外 15.8%、九州・沖縄 14.7%)。これは、母校より離れる距離に比例して母校に対する思いが強くなっている傾向の現れともいえる。また、性別で男性 12.9%、女性 6.1%で 6.8 ポイント男性が上回っている。

「企業内・職域などの同窓の集まり」8.9%(第 1 回 13.7%、第 2 回 11.7%)は、「同窓会

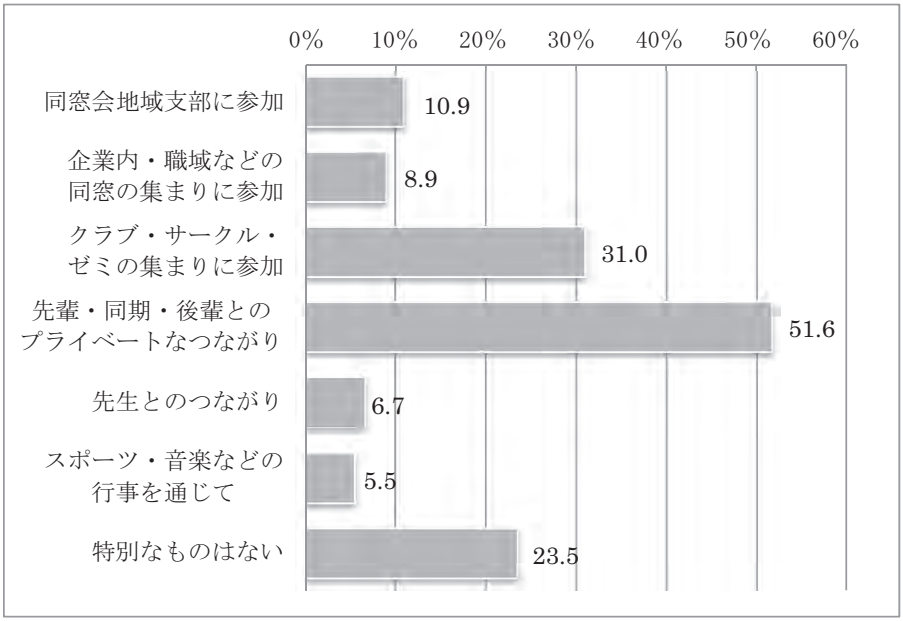
地域支部への参加」同様、性別で男性 11.3%、女性 3.51%で 7.8 ポイント男性が上回っている。

「先生とのつながり」6.7%(第 1 回 10.5%、第 2 回 8.1%)は、「先輩・同期・後輩とのプライベートなつながり」、「クラブ・サークル・ゼミの集まり」同様、女性 63.6%・男性 46.2%と、17.4 ポイント女性が多い。また学部で神学部 28.6%、総合政策学部 21.4%は、他学部の一桁台のポイントと比べ多い。

「スポーツ・音楽などの行事」5.5%(第 1 回 5.9%、第 2 回 5.8%)では、卒業年で退職後と考えられる、1966 年卒以降がポイントを上げている(1966 年卒 11.4%、1961 年卒 14.2%、1956 年卒 9.0%、1951 年卒 25.0%)。

最後に「特別なものはない」23.5%(第 1 回 17.9%、第 2 回 23.2%)では、卒業年では、1986 年卒 31.2%、1981 年卒 30.9%が 30%を超えている一方、最若年齢層 2011 年卒が最も低い 13.2%、最高年齢層 1951 年卒が 2 番目に低い 15.0%となっている。学部では多くが 20%を超えるなか総合政策学部が最も低い 12.5%となっている。性別で男性 26.2%、女性 17.9%で 8.3 ポイント男性が上回っている。

図 5-9 卒業後の同窓とのつながり (Q24)



Ⅴ－４　寄付

Ｑ２５．関西学院への寄付についてお尋ねします。
　１　寄付をしたいと思う　　２　寄付をしたいとは思わない

Ｑ２５－２．使途を指定できる寄付に興味がありますか。
　１　興味がある　　２　興味はない

Ｑ２５－３．指定寄付を設置する場合、下記のどのような目的が望ましいと思いますか。
次の中から２つ以内で選んでください。
　１　家計急変者の就学支援　　２　恒常的家計困窮者の就学支援
　３　難民学生の支援　　４　留学生の受け入れ支援
　５　在学生の留学支援　　６　教育環境の整備
　７　学業成績優秀な学生への奨励　　８　スポーツ活動への支援
　９　文化活動への支援　　10　ボランティア活動への支援
　11　キャンパスの緑化・自然維持
　12　その他（　　）

Q25 では、寄付、および、使途指定の寄付についてたずねた。

過去の卒業生調査では、「関学に寄付や献金をしたことがありますか」の質問項目で実施され、第１回調査では、全体「したことがある」40.1%・「したことがない」58.6%・「無回答」0.9%、第２回調査では、全体「したことがある」37.7%・「したことがない」61.5%・「無回答」0.8%であった。

今回は、寄付を「したいと思う」か「思わないか」と質問内容を変更した。あわせて、使途が指定できる寄付に関する質問項目を追加、計３項目で調査を実施した。

Q25-1 の「関西学院への寄付についてお尋ねします」の項目では、「寄付をしたいと思う」39.4%、「寄付をしたいと思わない」51.7%、「無回答」8.9%となった。前回までの行動結果と今回の行動予測と、質問趣旨が正確には異なるので同傾向趣旨の質問項目のポイントで比較はできないが、今回の無回答の中には、「寄付をしたいと思う」につながる要素も含まれていると考えるならば、今回の結果は使途が指定できる寄付の有効性を証明している。

「関西学院への寄付についてお尋ねします」で、性別では、「したいと思う」に男性 44.6%・女性 27.7%と大きくポイント差が出た。卒業年別では、「したいと思う」に 2011 年卒 32.0%を最低ポイント、1951 年卒 55.0%を最高ポイントとして年齢増に正比例してポイントを上げている。「無回答」も同様に 2011 年卒 5.6%を最低ポイント、1951 年卒 20.0%を最高ポイントとして年齢増に正比例している。学部別では、「したいと思わない」総合政策学部 73.2%、理学部 68.1%が高い。中高出身は「したいと思う」が 46.2%と高い。

Q25-2 の「使途が指定できる寄付に興味がありますか」の項目では、「興味がある」49.5%、「興味がない」42.9%、「無回答」7.6%となった。性別では、「興味がある」男性 50.0%・女性 48.7%と若干の差が出た。学部別では総合政策学部の「興味がある」51.8%が「寄付

をしたいと思う」23.2 ポイントである点から特徴的な傾向が見られる。

Q25-3 の「指定寄付を設置する場合、下記のどのような目的が望ましいと思いますか。」の項目では、どのような項目を指定寄付の対象とすることがより多くの卒業生に望まれているかを調査した。選択枝 11 項目を設けたが、家計急変者の就学支援 27.1%、恒常的家計困窮者の就学支援 20.6%、教育環境の整備 24.4%の 3 項目が 20%を超えた。一方で難民学生の支援 8.5%、留学生の受入れ支援 9.8%、在学生の留学支援 6.3%と難民学生・留学生の受入れ、海外留学に関する項目は一桁台にとどまっている。今回の調査結果から指定寄付の制度を設けるとすれば、これまで寄付されたことがない方々にも寄付を検討していただけるかも知れない。また寄付の指定項目を多くし、選択肢が増えるほど、寄付をする方々の意志に近づき、その意思を尊重することに繋がるといえるのではないだろうか。

図 5-10 寄付について（Q25-1）

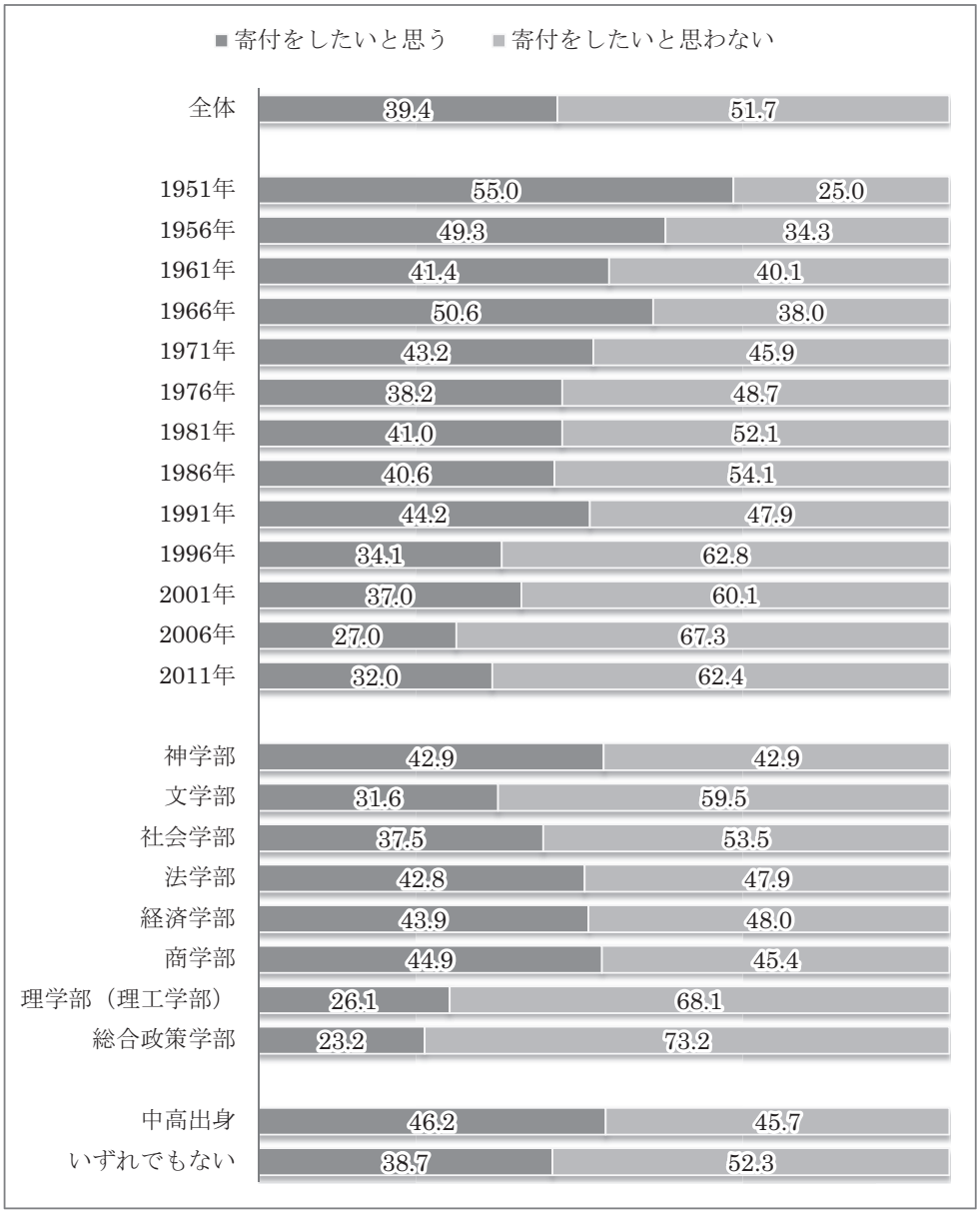


図 5-11 寄付と指定寄付への関心(卒業年別)

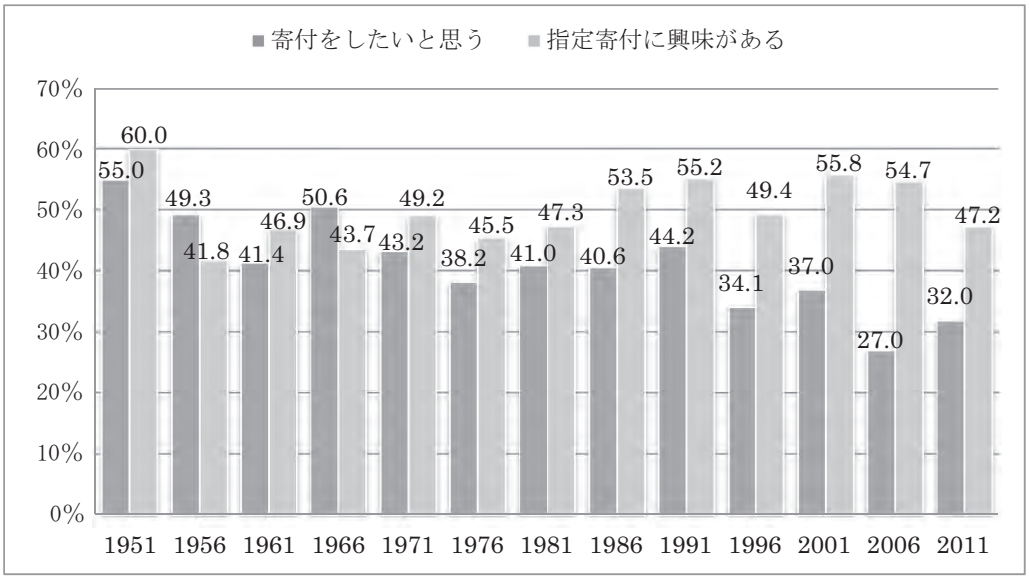


図 5-12 寄付と指定寄付への関心(学部別)

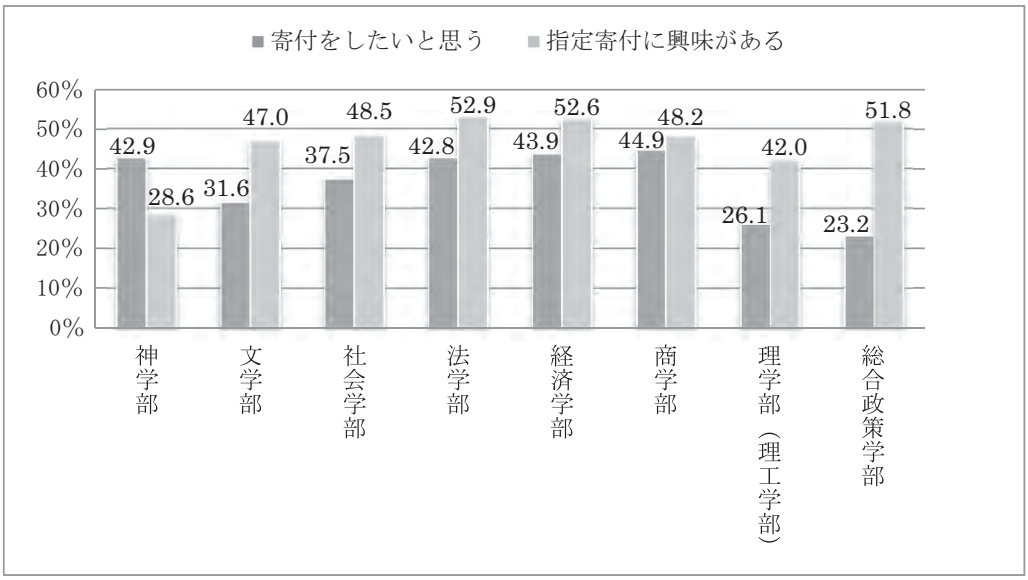
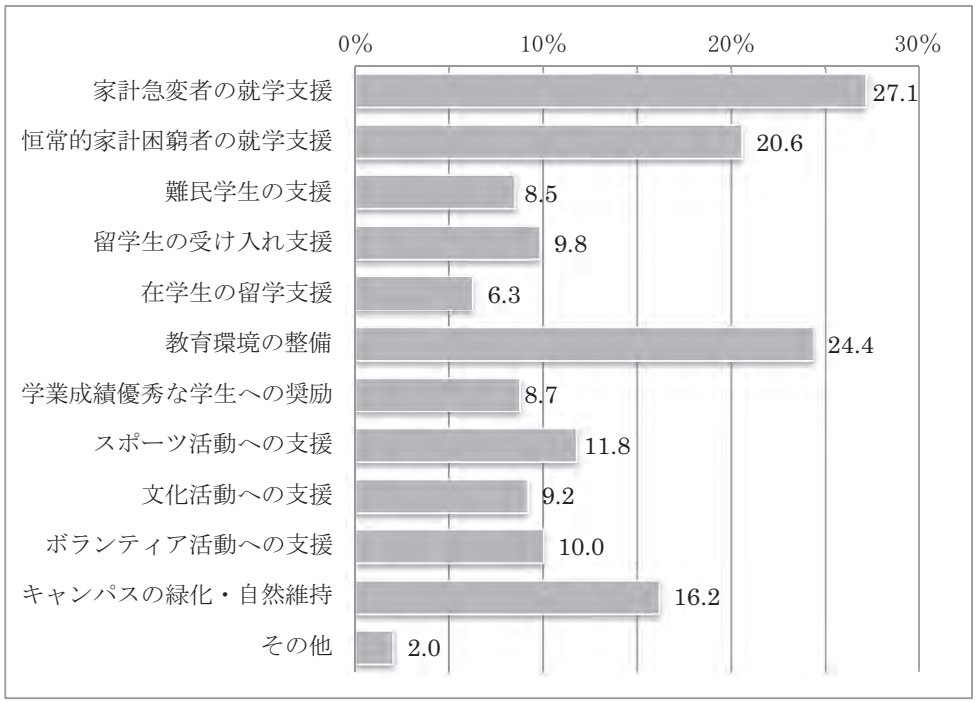


図 5-13 指定寄付の目的（Q25-3）



Ⅴ－５－ａ　関西学院会館利用の認知度と利用目的

Ｑ２６．卒業後に利用可能な大学施設の利用に関してお尋ねします。
　　ａ）関西学院会館
　　１　利用したことがある
　　２　利用できることを知っているが、利用したことがない
　　３　利用できることを知らなかった

Q26 の a では、卒業後に利用可能な大学施設として、関西学院会館の利用度・認知度をたずねた。

関西学院会館は 1999 年 9 月に開館した。第 1 回、第 2 回では認知度を測る質問項目であったが、10 年を経過した今回は、単に施設の存在の認知度から、卒業生が利用可能な施設であることの認知度も含め利用度を調査する質問項目に変更した。

開館 3 ヶ月後に行われた第 1 回の結果は「知っている」37.7%、「知らない」62.0%。第 2 回は「知っている」67.5%、「知らない」31.9%。確実に認知度が高まっている。今回、「卒業後に利用可能な大学施設の利用」という質問項目で「利用したことがある」29.3%、「利用できることを知っているが利用したことがない」41.6%、「利用できることを知らなかった」25.3%、「無回答」3.8%。この中で、「利用できることを知っているが利用したことがない」41.6%には、今後利用したいと考えている派と、利用できることは知っているがあえて利用しようとは考えていない派が混在している。

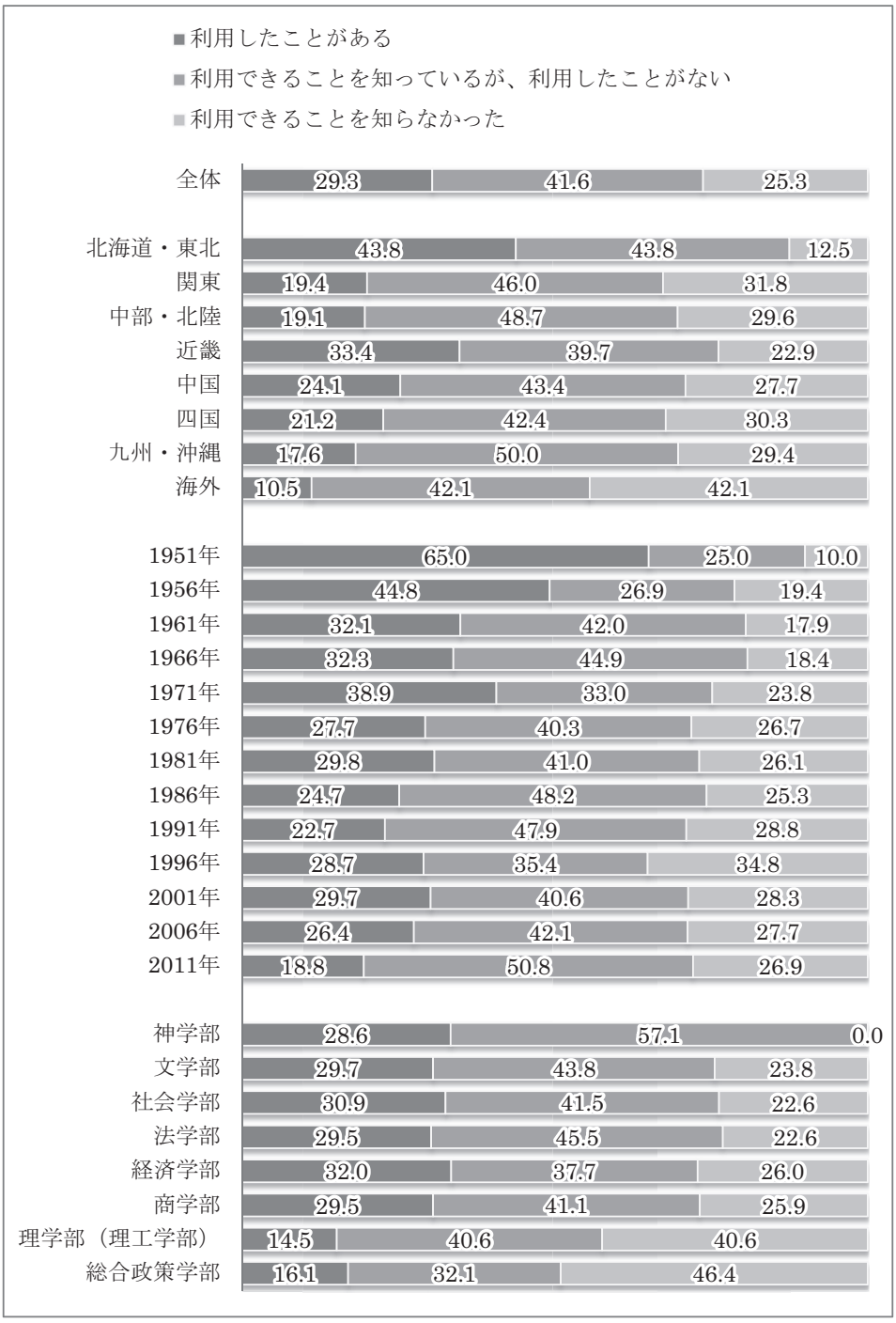
居住地では、「利用したことがある」で、北海道・東北 43.8%を除き、大学所在地である近畿 33.4%に隣接する中国 24.1%、四国 21.2%と続き、その他は 20%に満たないポイントとなった。今後近畿以外の遠隔地からも関西学院会館の活用によって、母校のキャンパスを訪ねる機会が増えることができるようそのニーズを発掘していく必要があろう。

卒業年では、「利用したことがある」で、1971 年卒業を境にそれ以前は 30%を超え、1976 年以降の卒業生は 20%台である。特に 1951 年卒業 65.0%を最高値に 1956 年卒業 44.8%と続いている。2011 年卒業は最低値の 18.8%であった。退職後と考えられる年齢 60 歳代の利用率が高いのは、母校のキャンパスでの集まりを持とうという思いを満たすことが可能な時間を作れる現れと推測する。

学部別では、「利用したことがある」では、西宮上ケ原キャンパスに設置されている学部 30%前後に対し、神戸三田キャンパスに設置されている学部(総合政策学部 16.1%、理学部 14.5%)が 15%前後と低いポイントになっている。また「利用できることを知らなかった」では、関西学院会館が立地する西宮上ケ原キャンパスに設置されている学部(神学部 0.0%除き)が 20%台に対し、神戸三田キャンパスに設置されている学部(総合政策学部 46.4%、理学部 40.6%)が 40%台と高い数値となっている。

今回の調査結果から関西学院会館は、卒業後に利用できる施設であることを在学中から周知に努め、施設としての魅力作りをし、そして繰り返し利用される施設として利用者の満足度を高めていかなければならない。

図 5-14 関西学院会館利用の認知度と利用目的（Q26-a）



Ｑ２７．関西学院会館にはレセプションホール、会議室、レストラン、チャペルがありますが、どのような目的で利用したいと思いますか。
次の中から２つ以内で選んで下さい。

1　クラブの同窓会・会合　　2　ゼミの同窓会・会合
3　家族や友人と食事　　4　結婚式・披露宴での利用
5　その他　（　　）

Q27 では、関西学院会館をどのような目的で利用したいかをたずねた。その結果は、全体でこれまでの調査とほぼ同じ傾向を示している。順に「家族や友人との食事」39.9%(第 1 回 56.5%、第 2 回 50.2%)、「クラブの同窓会・会合」35.8%(第 1 回 40.7%、第 2 回 41.4%)、「ゼミの同窓会・会合」32.7%(第 1 回 42.3%、第 2 回 42.7%)、「結婚式・披露宴での利用」12.6%(第 1 回 14.3%、第 2 回 15.8%)であった。

性別では「家族や友人との食事」で男性のポイントが高いが、他の３項目ではいずれも女性のポイントが高い。特に「ゼミの同窓会・会合」では男性 26.2%に対して女性 46.8%、「クラブの同窓会・会合」では男性 35.7%に対し、女性 36.5%と目を引いている。

居住地では、「家族や友人との食事」で、立地場所である近畿が 40.5%であるが、遠隔地である関東 41.0%、中部・北陸 40.0%、四国 39.4%でも、ほぼ同じポイントとなっている。

卒業年では、「ゼミの同窓会・会合」で、2011 年卒の 53.3%を最高にほぼ年々減少している。「クラブの同窓会・会合」では 1951 年卒の 50.0%が最高で、1986 年卒、1981 年卒、1971 年卒、および 1961 年卒が 40%台となった。「結婚式・披露宴」は 2011 年卒 22.3%、2006 年卒 24.5%、および 2001 年卒 19.6%と、結婚を考える年代が高い。

学部では、総合政策学部の「クラブの同窓会・会合」58.9%、「結婚式・披露宴での利用」19.6%が他と比較し際だって高い。これは、在学中に学部行事(リサーチフェア等)で関西学院会館を毎年利用していたことが影響していると推測される。

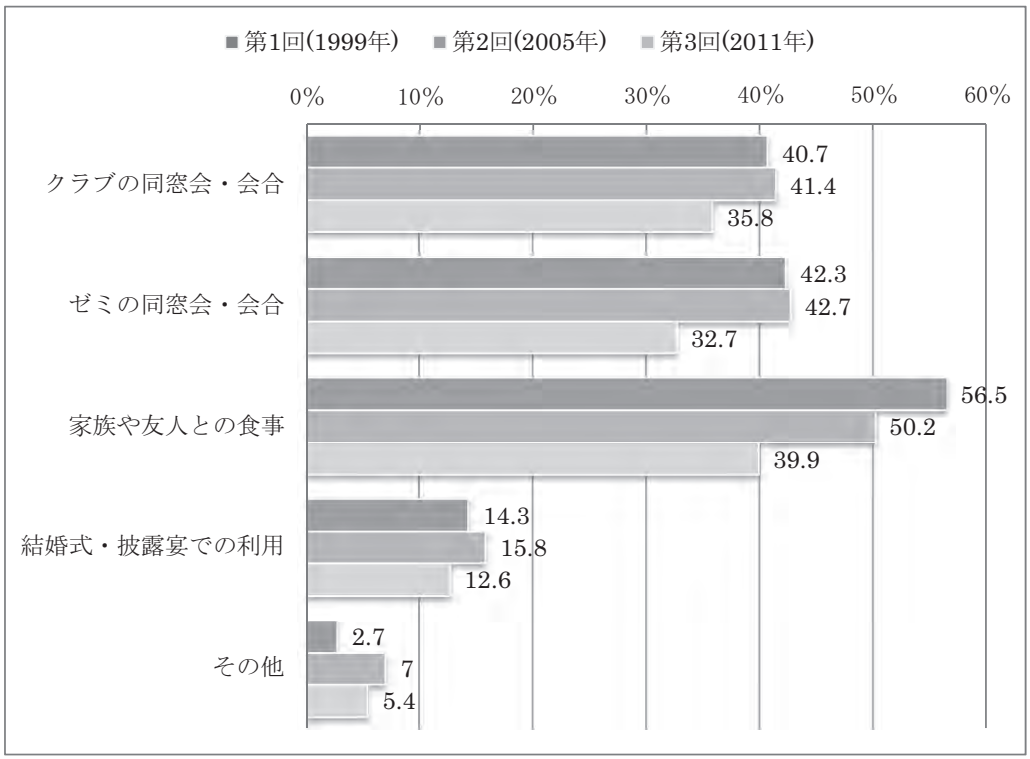
団体所属者では、「クラブの同窓会・会合」では団体参加者が 45.6%と高く、「家族や友人との食事」では、団体不参加者が 46.4%と高い。

最後に利用目的の項目で、全体での最高と最低のポイント差を見ると、第 1 回 42.2 ポイント、第 2 回 34.4 ポイント、今回 27.3 ポイントと回数を追う毎に差が少なくなっている。利用者の各利用目的の項目が偏りなく均衡化してきている。

これは関西学院会館の利用者が団体・グループから個人へと幅広いニーズに対応していることを物語っている。今回のこの結果は今後の関西学院会館の PR 活動に役立てたい。

図 5-15 関西学院会館の利用目的（Q27）

図 5-16 関西学院会館 利用目的の推移



Ⅴ－５－ｂ　大学図書館利用の認知度

Ｑ２６．卒業後に利用可能な大学施設の利用に関してお尋ねします。
　　ｂ）大学図書館（見学を除く）
　　１　利用したことがある
　　２　利用できることを知っているが、利用したことがない
　　３　利用できることを知らなかった

Q26 の b では、卒業後に利用可能な大学施設として、大学図書館の認知度をたずねた。

大学図書館では、卒業生の大学図書館利用について、積極的な広報は行っていない。しかし、「利用したことがある」あるいは「利用できることを知っているが、利用したことがない」と回答した人をあわせると約 63.4%となり、認知度はかなり高いといえよう。

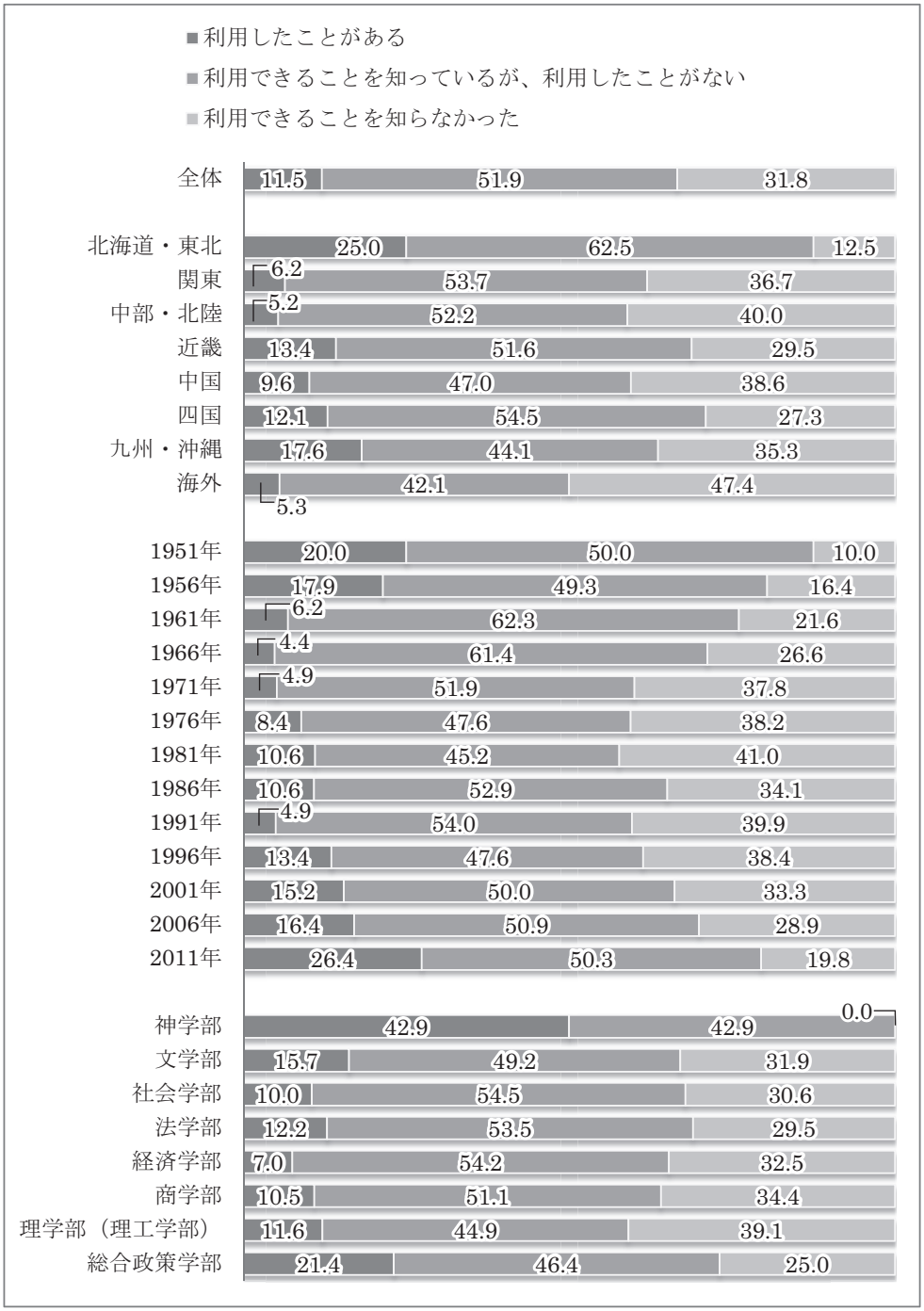
現在、大学図書館内のカウンター横には卒業生用の「利用案内」を備え付けており、また、大学図書館のホームページには「卒業生の方へ」というページを設け、図書館カードの発行手続きや利用条件等を案内している。これらにより、学生は在学時から卒業後の利用が可能であることの情報を知ることが可能である。このことは、「知らなかった」と回答した人の割合が、卒業年が新しいほど減少していることにも現れている。

また、毎年 11 月 3 日に行われているホームカミングデーでは、「母校通信」の案内記事の中で、大学図書館の「オープンライブラリー」のお知らせが掲載される。この「母校通信」は同窓全員に送付されるため、3 日の当日に図書館見学および図書館カード発行申請ができることを知ることができる。そのためか、毎年、約 500 名～800 名ほどの図書館見学者があり、そのうち約 10 名の方が図書館カードの新規申込手続きを行っている。

しかし、図書館カード発行を申し込んだものの、実際に来館して利用することは、時間的なことや距離的なことからなかなか難しいであろう。そのため、「利用したことがある」という回答が低いこと、また「利用できることは知っているが、利用したことがない」と回答した方が約半数いるということはうなずける。

大学図書館は、現在、授業がある期間中の日曜日の午後も開館しており(ただし、第４日曜日は除く)、生涯学習の場として、卒業生にもうまく利用していっていただければと思う。

図 5-17 大学図書館利用の認知度（Q26-b）



Ⅴ－５－ｃ　大阪梅田・東京丸の内キャンパス利用の認知度

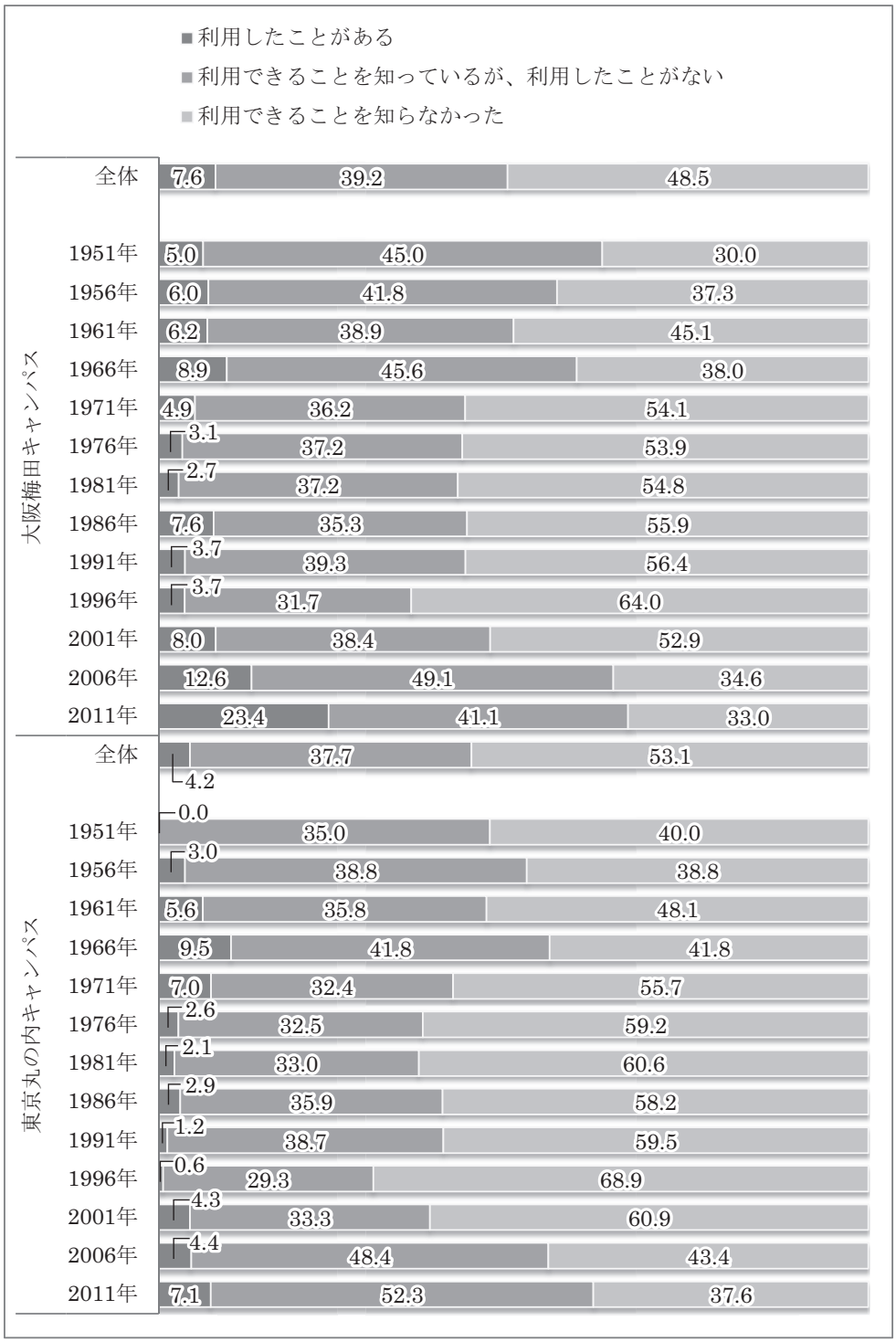
Ｑ２６．卒業後に利用可能な大学施設の利用に関してお尋ねします。
ｃ）大阪梅田キャンパス
１　利用したことがある
２　利用できることを知っているが、利用したことがない
３　利用できることを知らなかった
ｄ）東京丸の内キャンパス
１　利用したことがある
２　利用できることを知っているが、利用したことがない
３　利用できることを知らなかった

Q26 の c および、d では、卒業後に利用可能な大学施設としての大阪梅田、東京丸の内キャンパスの認知度をたずねた。

大阪梅田キャンパス、東京丸の内キャンパスについては、「利用できることをしらなかった」と回答した人がそれぞれ 48.5%、53.1%とほぼ半数を占めており、まだまだ、同窓向け施設としての認知度は低い。しかし、前回調査では、大阪梅田キャンパス、東京オフィス(東京丸の内キャンパスの前身)を知らなかったと回答している人が、59.6%、79.1%であったことを考えると、特に東京丸の内キャンパスの認知度は飛躍的に高まっている。年代別では、1966 年以前の卒業生、2006 年以降の卒業生の認知度が若干高い。1966 年以前の卒業については、同窓会活動の場として認知がされているということが考えられる。一方､2006 年以降の卒業生は在学中から就職活動でキャンパスを利用していることから認知度が高いものと考えられる。また、学部別では総合政策学部の卒業生が､「利用したことがある」比率が高く、特に東京では、同窓会や勉強会などを開催しているということがその理由であろう。

認知度が高まる一方、両キャンパスを利用したことがある人は、7.6%、4.2%と 1 割にもみたず、特に 30～50 歳代の認知度が低いことから、その世代を対象としたプログラムを充実し、認知度を上げていくことが必要であると考えられる。

図 5-18 大阪梅田・東京丸の内キャンパス利用の認知度(Q26-c,Q26-d)



Ⅴ－６　大阪梅田・東京丸の内キャンパスにおける参加希望プログラム

Ｑ２８．大阪梅田キャンパス・東京丸の内キャンパスで下記のプログラムが実施されるとしたら、どのプログラムに参加したいと思いますか。
次の中から２つ以内で選んでください。

1　昼夜開講制大学院授業
2　各種の資格取得関連講座
3　外国語教育プログラム
4　一般教養プログラム
5　ビジネスパーソン向けプログラム
6　その他　（　　）

Q28 では、大阪梅田・東京丸の内キャンパスで参加を希望するプログラムについてたずねた。

大阪梅田キャンパスは 2000 年 4 月に K.G.ハブスクエア大阪として開設され、2004 年に大阪梅田キャンパスとして関西学院の第 3 キャンパスとなった。東京丸の内キャンパスは関西学院大学東京オフィスとして 2003 年に開設され、2007 年に東京丸の内キャンパスとして関西学院の第 4 キャンパスとなった。それぞれのキャンパスで多彩なプログラムを実施している。今回はこれらの実態を踏まえての回答結果となっている。

回答率は両キャンパスが設置されている居住地からの回答率が高い。特に「近畿」からの回答数が全体の約 60%となっており、「関東」を含めると約 80%となっている。これまで、両キャンパスにおいて各プログラムの実績、地域への広報活動が浸透していることにより卒業生の関心が高いことが読み取れる。また特徴的な点としてプログラムの特性を反映し、プログラムごとに回答率の高い年齢分布が異なっている。各プログラムがターゲットとする年齢層が高い回答率となっている。

調査項目のうち卒業生の関心の高いプログラムは「一般教養プログラム」(31.4%)「外国語教育プログラム」(31.4%)、「各種の資格取得関連講座」(28.7%)、および「ビジネスパーソン向けプログラム」(27.6%)である。これらの講座への関心度に大きな差はなく、一定の潜在的ニーズがあることがわかる。

「昼夜開講制大学院授業」は 40 歳～60 歳までの関心が高いものの、各世代にわたって一定の関心の高さを保っている。専門的な学習への需要が各世代とも一定の割合であることがわかる。

「ビジネスパーソン向けプログラム」、「資格取得講座」、および「外国語教育プログラム」は 30 歳までの世代の関心が高い。主に若手ビジネスパーソンの需要を反映したものと考えられる。特に外国語教育プログラムは若年層のグローバル化への対応ニーズを反映した結果と考えられる。

「一般教養プログラム」は団塊の世代前後の関心が高い。自己実現や自己分析への需要が読み取れる。大学が生涯にわたり教育コンテンツを卒業生に発信し続ける必要性が読み取れる。

これらの結果は大学が提供する生涯学習プログラムの今後の展開に大変参考となる。

図 5-19 大阪梅田・東京丸の内キャンパスにおけるプログラム参加希望(全体) (Q28)

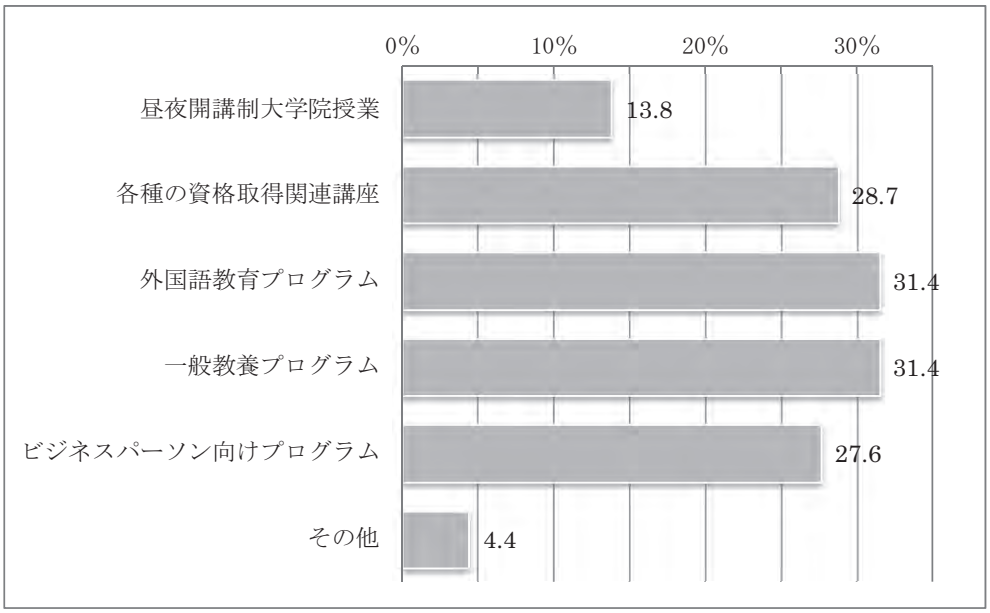


図 5-20 大阪梅田・東京丸の内キャンパスにおけるプログラム参加希望(居住地域別) (Q28)

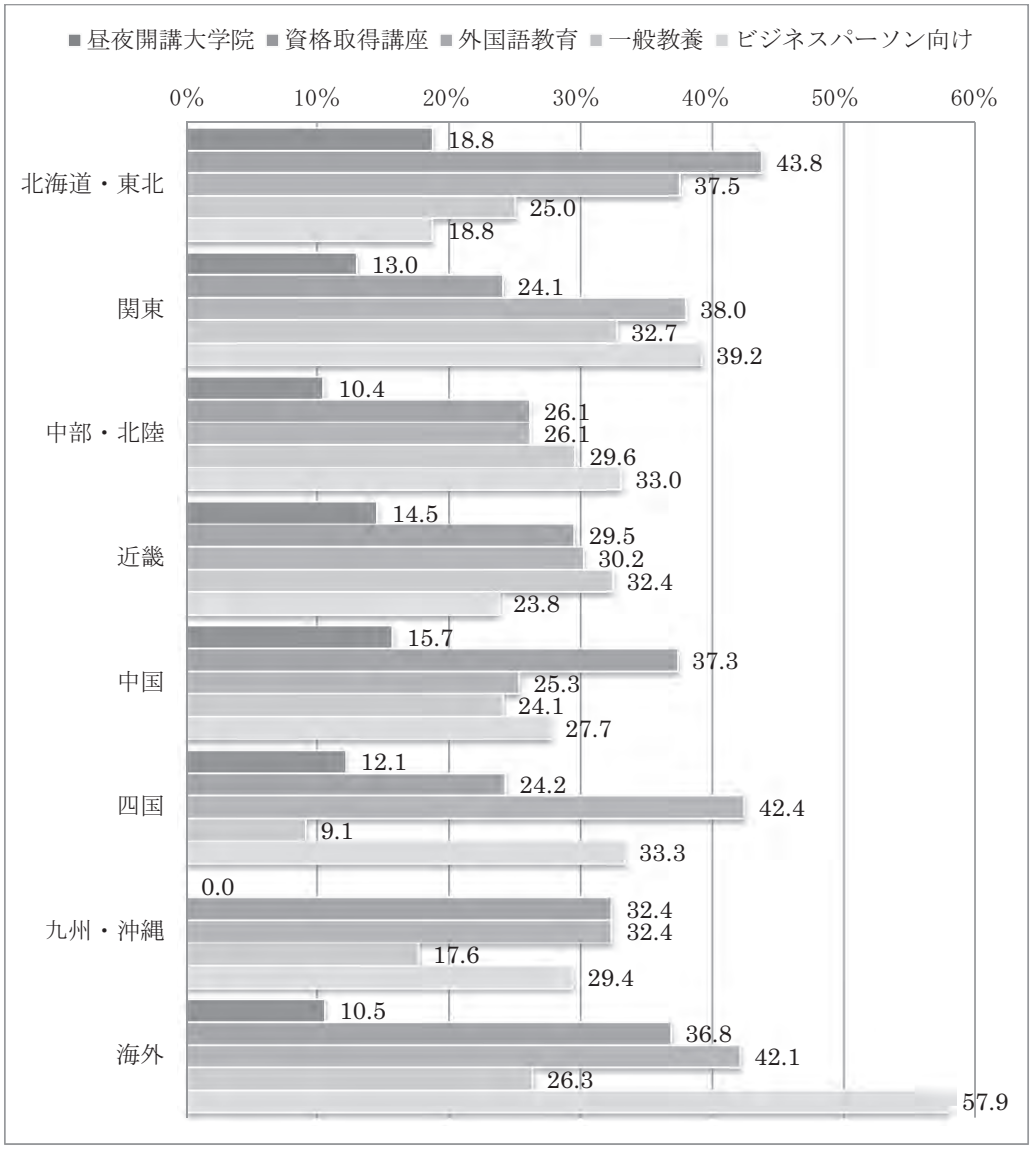
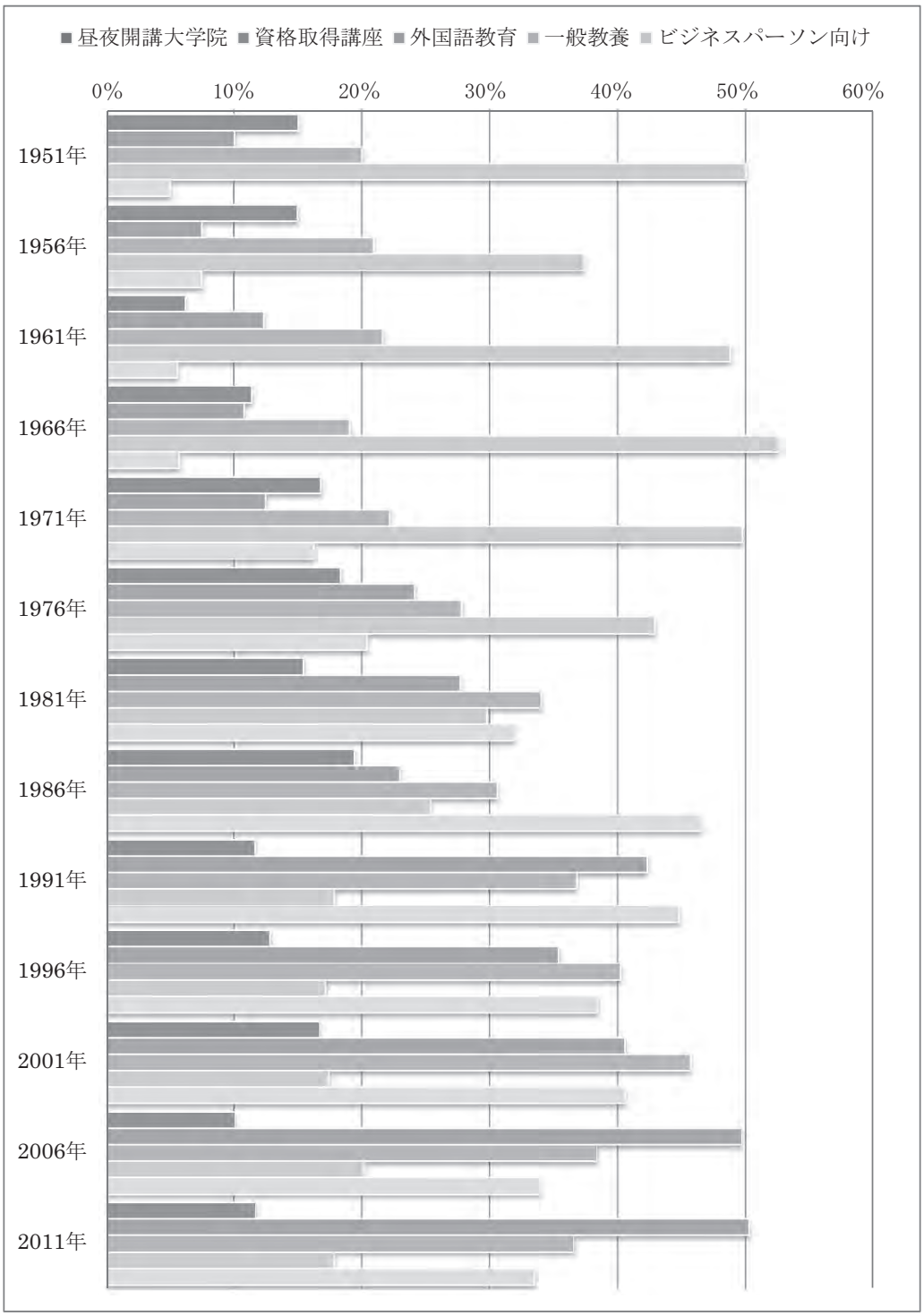


図 5-21 大阪梅田・東京丸の内キャンパスにおけるプログラム参加希望(卒業年別) (Q28)



Ⅴ－７　同窓向けプログラムの認知度

Ｑ２９．関西学院が、同窓・一般向けに実施しているプログラム・活動についてお尋ねします。下記のプログラム・活動について、それぞれ１～３の数字でお答えください。

１　参加したことがある
２　プログラム・活動を知っているが参加したことがない
３　プログラム・活動を知らなかった

＜大阪梅田キャンパス＞

ａ）	丸の内講座	１……２……３
ｂ）	K.G. 梅田ゼミ	１……２……３
ｃ）	K.G. ジョブサポート	１……２……３
ｄ）	各種講演会・セミナー	１……２……３
ｅ）	チャペルアワー	１……２……３

＜東京丸の内キャンパス＞

ｆ）	丸の内講座	１……２……３
ｇ）	サークル活動	１……２……３
ｈ）	ウェルカムパーティ	１……２……３

＜各キャンパス＞

ｉ）	エクステンションプログラム	１……２……３

Q29 では、同窓・一般向けに実施しているプログラム・活動の認知度をたずねた。

全体的に各プログラムに対する卒業生の認知度は低い結果となっている。また、各プログラムへの参加や認知度は居住地によって大きな差が生じている。プログラムを実施している大阪梅田キャンパス、東京丸の内キャンパスが所在する居住地では参加や認知度は高い。その原因として各プログラムにすでに多くの同窓が参加していること、ならびに近隣への広報をこれまで展開していることがあげられる。その他の地域の認知度を高める必要はあるが、プログラムを実施していない地域での認知度アップについては様々な課題が残る。当面の課題として、「関東」「近畿」での参加、認知度を高める必要がある。また特徴的な点として、プログラムの特性を反映し、各プログラムが対象とする年齢層の認知度が高い傾向にある。

現在大阪梅田キャンパスで実施しているビジネスパーソン向けプログラムの「丸の内講座」は、「近畿」での認知度は高いのであるが、主として対象としている 20 歳～40 歳の認知度が低いという点が課題である。また一般プログラムの「K.G．梅田ゼミ」は、団塊の世代を主な対象とし、「近畿」での認知度も団塊の世代の認知度も高い。この点は同窓会を通じた広報活動が功を奏していると評価できる。両プログラムとも卒業生割引制度を設けており卒業生の受講を歓迎している。

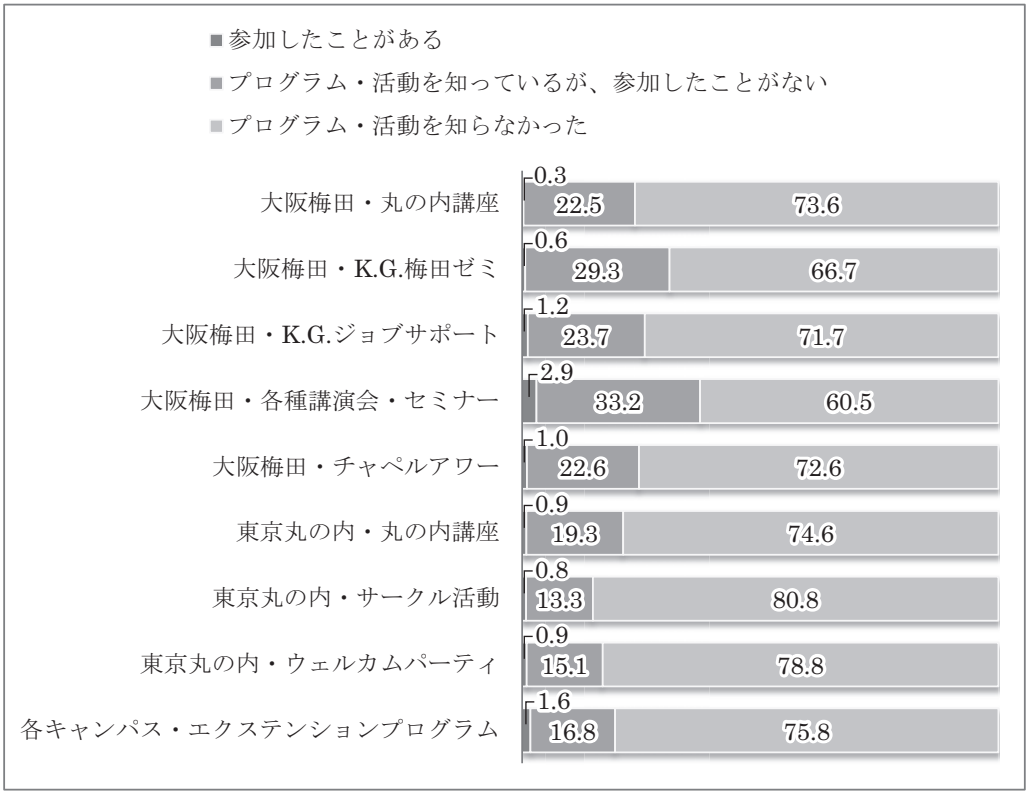
現在東京丸の内キャンパスで行われている「丸の内講座」はビジネスパーソン及び一般人向けのプログラムである。今回の調査の回答率は講座を実施している「関東」からの回答率が高いが、提供プログラムが各世代を対象としているため世代にわたって認知度に大

きな変化はない。「丸の内講座」は、2004 年秋にスタート以来 7 年が経過し、地道な広報活動の継続により認知度は向上してきた。毎年内容の充実を図り、2010 年後期からは新しいプログラム「ビジネス&アカウンティングコース」を開設した。

サークル活動(同窓会活動)は講座を実施している「関東」からの回答率が高い。関東では 12 名の参加者が回答し、また、認知度も高い。特に団塊の世代の認知度が高い。同窓会と連携して運用されているウエルカムパーティー(同窓会活動)は、2007 年 3 月より卒業式の配付物に東京でのウェルカムパーティの案内チラシを入れることや若手対象「新月塾」のブログでの告知を行ってきた。特に総合政策学部の認知度が高い点については、卒業生が主体的にＳＮＳを利用した告知を行っている結果と考えられる。

両キャンパスとも立地の良さ、事務体制が整っている点が各プログラムを支えている。今後、同窓会と協力して効果的な卒業生への広報が必要とされる。また、各種のプログラムの各地域での実施についても同窓会等と協力しながら検討を進める必要がある。

図 5-22 同窓向けプログラムの認知度（Q29）



Ⅴ－８　同窓向けサービス(まとめ)

同窓向けサービスは、Ⅲで言及した帰属意識を維持・発展するうえで大きな意味をもつ。とりわけ卒業生は、親族を通じて次世代への影響を与える者となりうるという点で重要である。また社会全体に対する影響を与える者としての同窓による本学の評価は、その体験を通して実質的であるだけに、外部信憑性も高いと推測されるので、卒業生に向けて正しい情報を的確に発信することが不可欠である。過去の卒業生が現在の大学と接する機会をもつことは、情報発信のために重要であるばかりでなく、帰属意識を深め、ともに関西学院大学を支える者としての協力を期待できるという点でも重要である。

卒業生に対する情報媒体(質問項目 Q20)としては、今回も「母校通信」が最も有力であった(約 80%)。一方で「学院ホームページ」(13.4%)と「マスコミ」(10.6%)が順位を入れ替えている。今後の情報提供について(Q21)に明らかなように、「母校通信」(41.2%)にかわって、「関学ホームページ」(33.5%)を望ましい媒体とする回答が多く、若年層を中心にインターネットに遷移すると想定されるので、IT を用いた情報発信(SNS も含め)に力をいれることが望まれる。発信された情報の充実度(Q19)は、肯定的評価と否定的評価がほぼ拮抗する。しかし、理工学部・中学部では個別の同窓会活動が有効にはたらいて、情報提供が充実しているとの評価をえていることが推測される。

同窓生との卒業後のつながり(Q24)は、何らかの機会をもっていると回答した者が 74.4%と判断される。具体的な機会として、「プライベートなつながり」(51.6%)・「クラブなどの集まり」(31.0%)、「同窓会支部への参加」(10.9%)となっている。

大学への訪問(Q22)・施設の利用は、卒業後一回以上訪問した層(56.8%)とまったく訪問したことがない層(41.6%)と二極化が見られる。訪問の理由(Q23)として、大学受験期の子女を家族にもつ 40~50 代が「家族に母校を見せるため」、退職後と推測される 60 代が「公開講座・講演会を聴くため」と回答していることが注目される。具体的な施設利用として、関学会館(Q26. a)・大学図書館(Q26. b)について、大阪梅田(Q26. c)と東京丸の内(Q26. d)の各キャンパスについて尋ねている。関学会館・大学図書館の認知度は高いが、大阪梅田・東京丸の内キャンパスについては、同窓向けの施設として認知度はさらに改善の余地がある。調査によれば、関学会館(Q27)では今後とも幅広いサービスに努めることが求められていると言えるだろうし、また大阪梅田・東京丸の内各キャンパス(Q28)で、各種プログラムで世代毎に受益者となる層が異なっていることがはっきりしているので、今後もそのニーズに配慮しながら展開していくことが望まれる。その一方で認知度(Q29)が必ずしも高くないので、広報のあり方などの対策が必要となっている。

また、寄付について(Q25)は、寄付をしたか否かをこれまで問うていたが、今回は、寄付の意思を尋ねた。男女での差があるものの、44.6%の回答者が寄付の意思をもっており、また使途指定をした寄付であれば 49.5%が協力したいとの意思を示している。その使途としては「家計急変者の就学支援」(27.1%)、「恒常的家計困窮者の就学支援」(24.4%)、「教育環境の整備」(24.4%)が上位を占めた。

Ⅵ－１　卒業生の職業・職種

Ｑ１４－１．あなたの現在の職業は次の中のどれに当てはまりますか。
　１　経営者（自営を含む）　２　管理職　３　一般職
　４　自由業　５　学生　６　無職

Q14-1 では、卒業生の現在の職業をたずねた。その結果、最も多いのは「一般職「(33.1%)で 2 位は「無職」(27.1%)、3 位「管理職」(18.5%)、4 位「経営者・会社役員」(12.8%)と続いている。全体で「一般職」と答えたものは、卒業年度が古くなるにつれて減少する。2006 年卒が 78.0%、1996 年卒 42.1%、1986 年卒 31.8%、1976 年卒 18.8%、1971 年卒 14.1%であり、それ以前となると極めて少数となっている。一方「管理職」については当然ながら卒業年が上がるほど比率は増加する。2001 年卒で 10.1%と 2 桁になり、1986 年卒で 4 割を超え、1981 年卒は 47.9%と最も高くなる。その後次第に下降し、1976 年卒 26.7%、1971 年卒 13.0%、1966 年卒では 2.5%になる。「管理職」の比率が「一般職」のそれを上回るのは 1991 年卒、つまり本調査時点で 42 歳前後である。

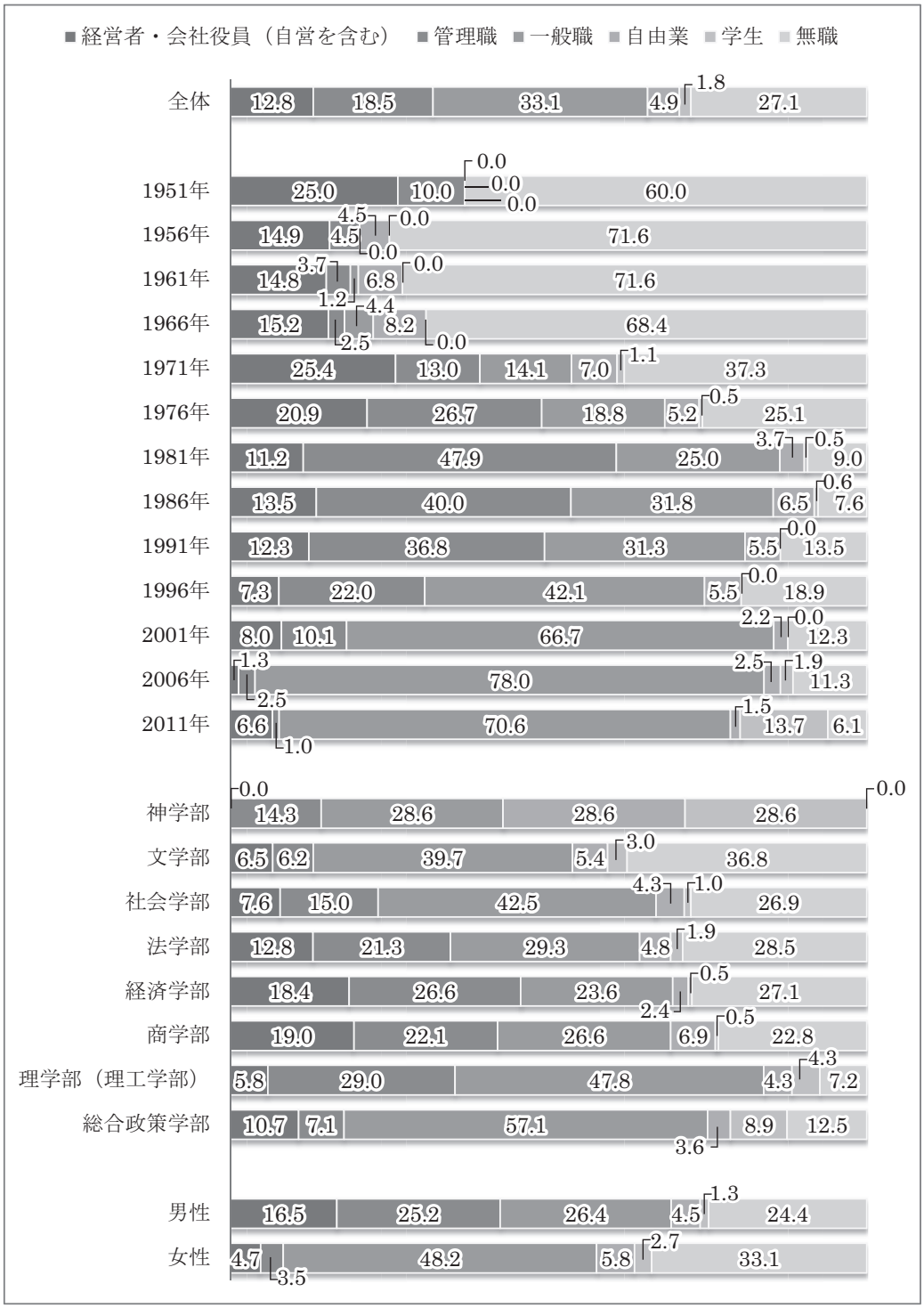
居住地別をサンプル数の多い関東、中部・北陸、近畿、中国に絞って比較すると、近畿は、関東、中部・北陸、中国の 3 地区と比べ「経営者・会社役員」、「管理職」と答えた者がやや少なく、「無職」が多くなっている。近畿で「無職」が多くなっているのは女性がその数値を押し上げているからと考えられる。

学部別では、総合政策学部において「一般職」の比率が 57.1%と高い。これは同学部の開設が 1995 年と新しく、1 期生でも 35 歳前後であるからと説明できる。理学部（理工学部）は 47.8%と半数近くになっているが、考えられる原因としては、研究職につく者が多いが、設問の選択肢に研究職が無く、「一般職」として回答したためではないだろうか。それ以外で目を引くのは、経済学部と商学部において、「経営者・会社役員」または「管理職」と回答した者が他学部より相対的に多くなっている点である。学問分野とも関連することもあろうが、伝統的な学部として管理職となる年齢の卒業生を多数輩出していることが考えられる。

性別で見ると、男性の第 1 位は「一般職」（26.4%）で、以下「管理職」（25.2%）、「無職」（24.4%）、「経営者・会社役員」（16.5%）、となっている。女性では「一般職」(48.2%)が一番多くなっているのは同じであるが、男性と比べ 3 分の 1 の者が「無職」となっていることと、「経営者・会社役員」（4.7%）、「管理職」（3.5%）が極めて少なくなっている点が注目される。

全体 2 位となっている「無職」について気がついた点が 2 つある。ひとつは、企業の多くが定めている定年と関係すると思われる。「無職」と回答している者が、調査時点で 1976 年卒の 58 歳で 25.1%、1971 年卒の 63 歳で 37.3%、1966 年卒の 68 歳で 68.4%と増加している。今後高齢化社会の変化と相俟ってどのように変化していくのかを継続的に見ていくことが必要である。もう一点は若年層における「無職」者である。2006 年卒 11.3%、2001 年卒 12.3%、1996 年卒 18.9%と 20 歳台、30 歳台でも職についていない者の比率が 2 桁になっている。日本経済の影響もあろうが、個人の働き方、生活スタイルの多様化が起因しているのではないだろうか。

図 6-1 卒業生の現在の職業（Q14-1）



Ⅵ－２　卒業生の勤務先の業種

Ｑ１４－３　Ｑ１４－１で「１～３」とお答えいただいた方にお伺いいたします。
現在勤務先の業種を、次の中から選んでください。

1　農林漁業
2　鉱業
3　製造業
4　建設業
5　電気・ガス・熱供給・水道業
6　運輸・郵便業
7　不動産業、物品賃貸業
8　卸売業、小売業
9　金融業、保険業
10　情報通信業
11　医療、福祉
12　教育、学習支援業
13　サービス業
14　公務
15　その他（　　）

Q14-3 では現在の勤務先の業種をたずねた。Q14-1 で、「経営者」「管理職」「一般職」と回答いただいた方に質問を行ったため、回答数は、1260 件である。全体で一番多いのは「製造業」（19.6%）で、「金融業・保険業」(16.7%)、「卸売業・小売業」(10.8%)と続く。

卒業年別で見ると、2011 年卒では「金融業・保険業」が 29.1%と非常に高くなっている。その他の卒業年では 1971 年卒を除き「製造業」が高くなっている。「教育・学習支援業」について、卒業年をさかのぼって見ると、2006 年 2001 年と二つの卒業年で高くなり、一旦下降するが、1986 年卒、1981 年卒で再び高率を示している。

学部別に見ると、文学部で「教育・学習支援業」が 31.3%と非常に高い数値になっているのは文学部の学問分野との関連と女性比率が高いためであろうか。また、社会学部では「医療・福祉」、経済学部と商学部では「金融業・保険業」の比率が高く、理工学部では「製造業」が非常に高くなっているのは、学問分野との関連があり、それぞれの学部の特色を反映した結果と言えるであろう。

性別では男性が全体集計と同様なのに対し、女性では少し傾向が異なる。「教育・学習支援業」は全体では 10.4%であるが、性別では男性 7.8%に対し女性は 17.5%と高くなっており、女性の業種の中では最も高いものになっている。女性の勤務先として「教育・学習支援業」に続くのは「金融業・保険業」（16.0%）で、「サービス業」（14.2%）、同率で「製造業」と「卸売業・小売業」（共に 6.8%）である。

図 6-2 卒業生の勤務先の業種(全体)(Q14-3)

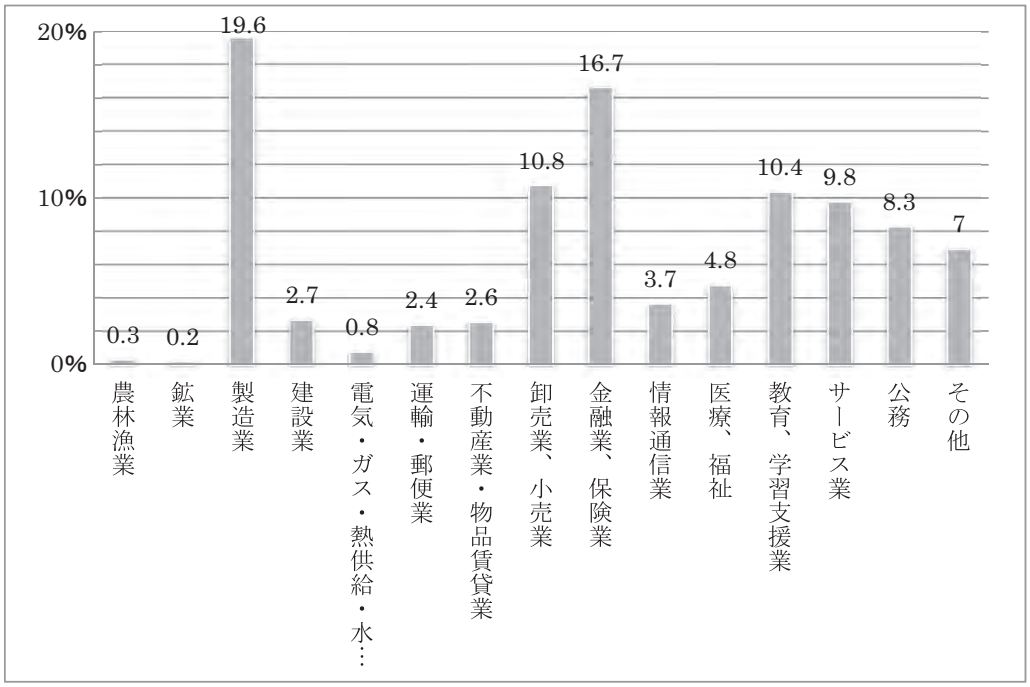


図 6-3 卒業生の勤務先の業種(卒業年別)(Q14-3)

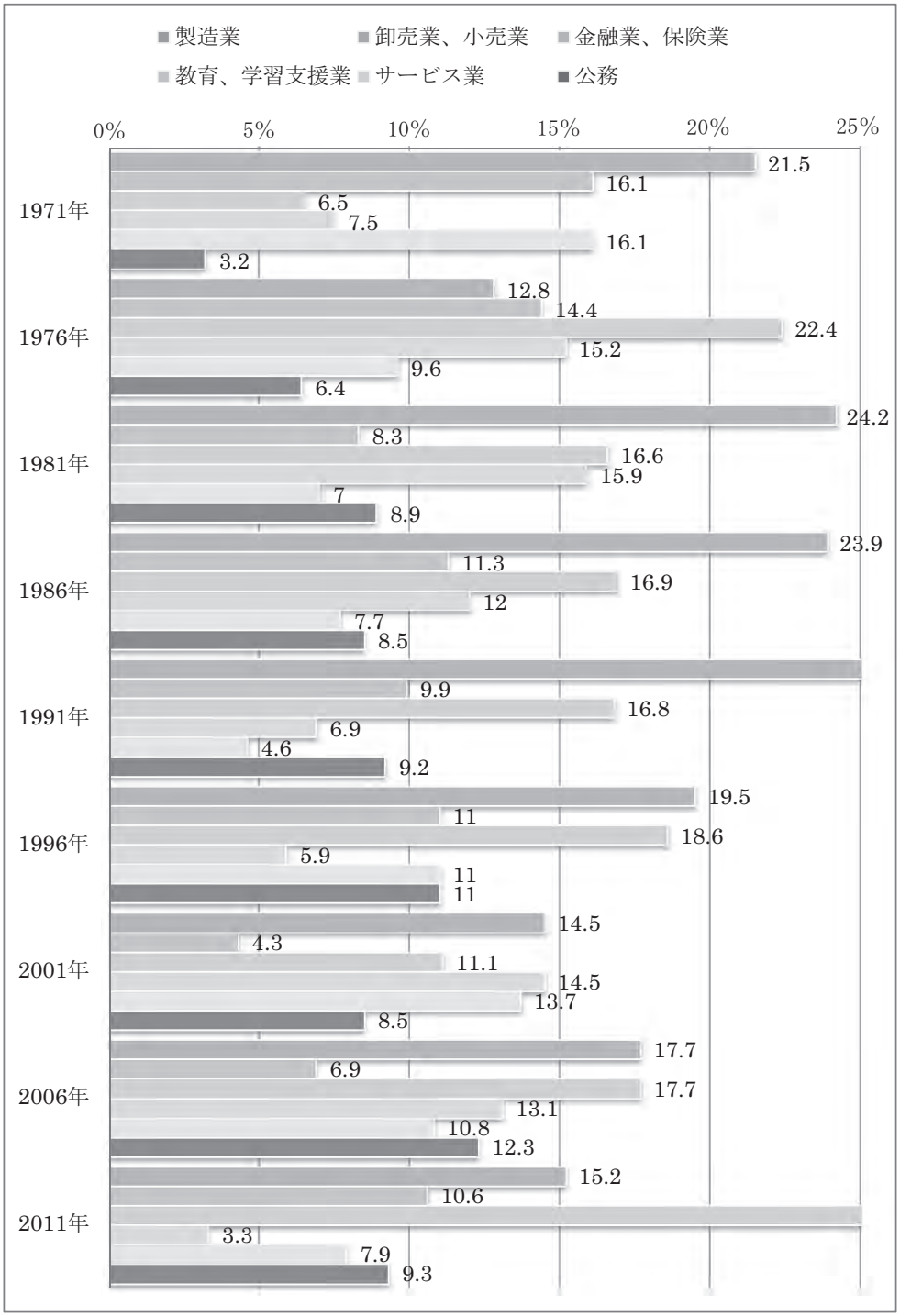
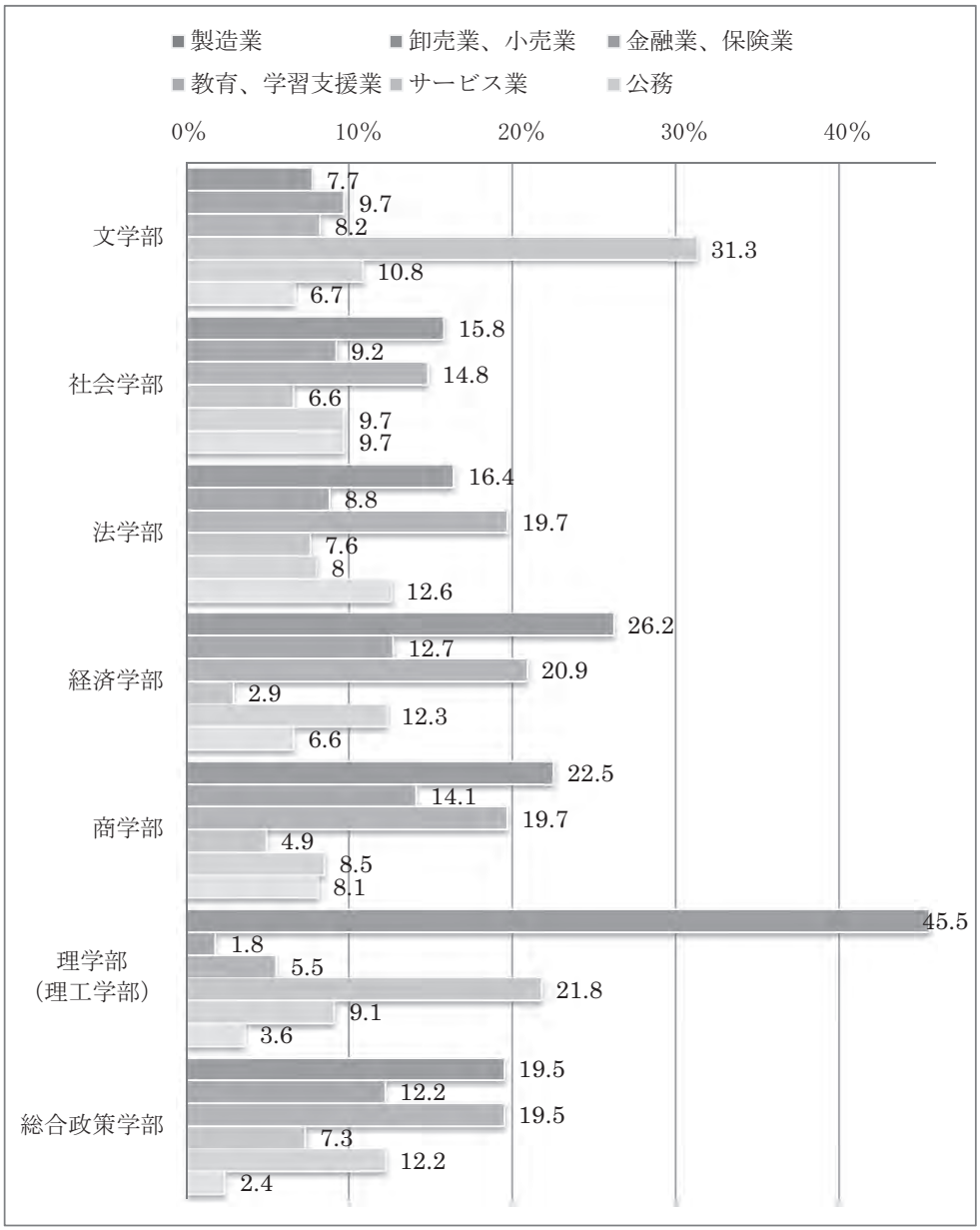


図 6-4 卒業生の勤務先の業種(学部別)(Q14-3)



Ⅵ－３　卒業生の勤務先での職種

Ｑ１４－４　Ｑ１４－１で「３」とお答えいただいた方にお伺いいたします。
現在の勤務先での職種を、次の中から選んでください。

1　事務・企画職
2　営業職
3　販売・サービス職
4　専門職（会計士、税理士、弁護士、司法書士、医師など）
5　技術・研究職
6　ＩＴエンジニア職
7　クリエイティブ職（デザイナー、コピーライターなど）
8　その他　（　　）

Q14-4 では、勤務先での職種をたずねた。Q14-1 で、「一般職」と回答いただいた方に質問を行ったため、回答数は、672 件である。全体では、「事務・企画職」が 40.0%と最も高く、「営業職」(25.4%)、「その他」(11.0%)、「専門職」(9.2%)と続いている。その他には、教員と回答いただいた方が多く含まれる。

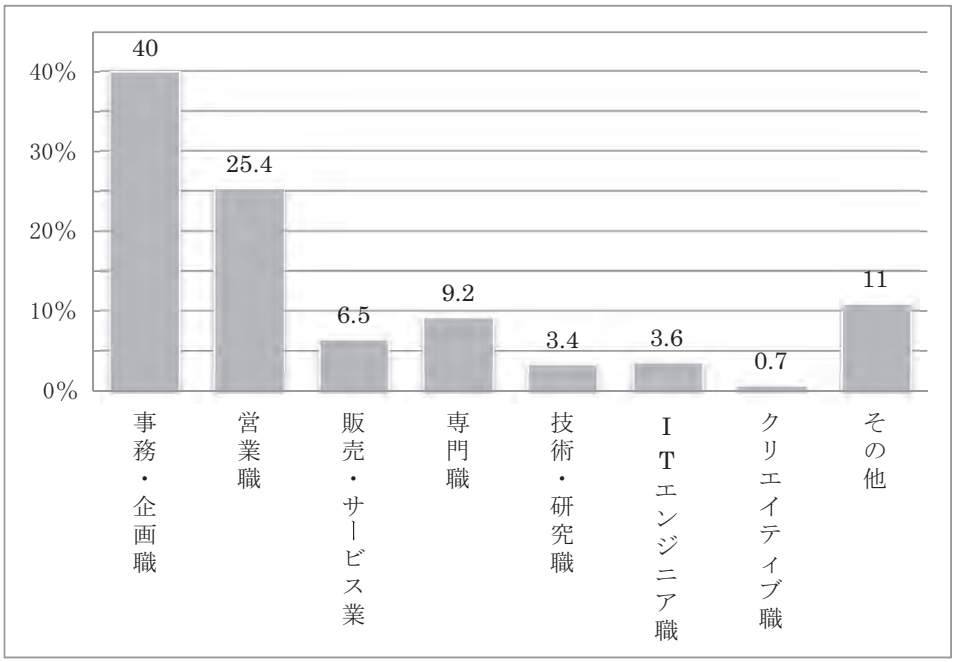
卒業年別では 2006 年卒と 2011 年卒の「事務・企画職」の比率が他の年次の者より高くなっている。学部別では、文系各学部が全体集計と同様の傾向を示すのに対し、理学部（理工学部）では第 1 位が「技術・研究職」、第 2 位「IT エンジニア職」、第 3 位「事務・企画職」と違いを見せている。

男女別で見ると、共に「事務・企画職」、「営業職」、「その他」、「専門職」、「販売・サービス業」に集約されるが、男性では「事務・企画職」と「営業職」ほぼ同率の約 10%なのに対し、女性では「事務・企画職」が 21.6%と男女で大きな差異になっている。

中高出身か否かでは、中高出身の方が「営業職」と回答する比率が高くなっている。

団体所属の有無では、団体に入っていなかった者に比べて、「専門職」、「技術・研究職」、「IT エンジニア職」と答えた比率がやや高い結果になった。

図 6-5 卒業生の現在の職種（Q14-4）



Ⅶ　関西学院大学への意見や要望（自由記述）

はじめに

今回で3回目になる卒業生アンケート調査であるが、その自由欄への回答で、まず明らかなことは、卒業生のアンケート回答への熱心さである。全 1,978 の回答の内、1,054 票もの回答の自由記述欄に記載があり、しかもその中にはかなりの長文も混じっていることからも、卒業生が熱い思いで母校のことを気にかけてくださっていることがうかがえる。

その内容をきっちりと、しかもできる限り客観性を担保した形で分析する必要があり、そのためには複数のメンバーによる KJ 法での取り組みが求められるが、それにはかなりの時間が必要であり、ここでは、そのような自由記述欄から、いくつかの顕著な傾向を浮かび上がらせる形でまとめてみたい。

その分析の準備として、前回の自由記述欄に関する簡単な分析を行っており、その成果は高等教育推進センターの紀要『関西学院大学高等教育研究』(2012 年 3 月発行)に掲載しているが、実は、今回の自由記述欄に関しても、その分析がおおむね当てはまるということで、詳しい内容についてはそちらも参照していただくこととし、ここでは、前回との相違点でいくつか気になる点について分析したい。

１．卒業生の現状への熱い思い

今回の自由記述欄と前回のそれを比べたときに、何年度調査という部分を隠して質問したときに、どちらがどちらか当てることができるかというと、個々の回答に関してはまったく識別不可能であろうし、全体をまとめて提示された場合でも、よほど注意して見ないと区別できないであろう。それほど、その内容は似通っている。実は前回の調査の際に、たまたま広島の折り鶴事件、ワンダーフォーゲル部の遭難事件の直後であったため、それへの言及が多いのが前回の調査ということがわかるくらいで（ただし、折り鶴事件に関しては今回の調査でも言及あり）、卒業生の思いが共通したものであることがうかがわれる。

その内容は、結局、関学の社会的評価が下がってきていること、関西以外では知名度が低いことを何とかして欲しいという願いである。自分たちが在籍していたときには、関学はもっと輝いていたと思うのに、なぜ今こんなに低迷しているのかという問いかけを、われわれは真剣に受け止めなければならない。

もちろん、卒業生の自由欄への記述がそれほど大きく変わっていないということが、前回の調査の後 6 年間、このような問題に対して何らの対策もできていなかったということを必ずしも証明するものではない。今回の調査では前回の調査の対象学年のそれぞれ 1 年下の学年を対象にしており、個々の卒業生にとっては、初めての調査であるから、前回の調査からどう変わったかという形では受け止められていないからである。

しかしながら、6 年という年月はかなりの長さであり、その間、多くの大学でさまざまな改革がなされてきていることから考えて、もし関学がその 6 年間に少しずつでも改革に取り組んでいたならば､もう少し変化があってもいいはずだという判断はできるであろう。しかも、記述の内容が大きく変わっていないということは確かであるが、この自由記述欄に見られるかすかな変化は、決して見過ごして良いようなものではなく、統計的な有意性は検証できないにせよ、むしろ問題がますます深刻化していることを示すようにも見るこ

とができることが問題である。以下、そのような問題から 2 つを取り上げて簡単に検討する。

２．2 極分解

調査対象者は無作為抽出で選ばれているとはいえ、このような卒業生調査は、本来的にデータに片寄りがあり、卒業生全体の代表として見ることには注意が必要であるということは、前述のセンター機能の中でも述べた。このようなアンケートに関しては、回答して来た卒業生と、回答しなかった卒業生とが同じような属性を示すことはあり得ない。回答してきた卒業生は、むしろ両極に偏っており、回答してこなかった卒業生はおおむねその 2 つのグループの中間に位置すると考えて良いということであるが、実は今回の調査で、前回の調査の時より、その両極への 2 極分解が進んでいるのではないかと感じられる。

「大学生活を関西学院で過ごせたこと、大変良かったと思っております」（法学部 1966 年卒男性）という回答と、「別の大学に行けばよかった」（文学部 1996 年卒男性）という回答の間にある溝の大きさには愕然とする思いであるが、前回より、このような対立がいっそう顕著になっている。しかも、後者の比率が、まだ前者よりも少ないとはいえ、前回より高いことには注意が必要であろう。これは、この 6 年間に日本が経済のみならずさまざまな面で悪化し、人々が閉塞感の中にあることの結果という解釈もできるが、しかし、問題はある。それは若い卒業生の回答である。

３．若い世代の不満

卒業生の不満ということに関しては、前回の調査では、明らかに年配層の方が関学の社会的地位沈下に対する不満が大きく、若い世代では、それほど不満の表明はなかった。しかし、今回の調査での特徴は、その若い世代での不満の表明が散見されることである。第 2 の論点として問題にすべきは、そのような最近の卒業生の不満にどう対処するかである。上記の文章もそうであるが、「もっと面倒見のいい大学になってもらわないとパート 10 年で、一生終わります。勉強して卒業後、なにも得たものを生かす事ができず、勉強しても意味なかったです」（神学部 2006 年卒男性）といった記述に対して、どのように対応すべきであろうか。

もちろん、すでに述べたように、このような不満の発生は、日本経済の低迷による部分がかなり大きいことは確かである。20 代、30 代を失われた 20 年に過ごした世代が、高度成長期、また「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の時代に働き盛りであった先輩たちとは異なる思いを持つのは当然であって、そのような不満に対して、本人の努力不足に起因するか否かは問わず、対応して行く必要はあろう。

４．さらなる広報の努力を

自由記述欄の文章を読んで、浮かび上がってくるのは、卒業生の情報伝達の重要性である。卒業生の不満のかなりの部分が、もっと関学の現状に対する広報を行うことによって解消可能なのではないかと感じられる。

しかしながら、問題は、『母校通信』への不満の文章がいくつか散見されることである。寄付の申込用紙が同封されていることで、寄付を集めるための雑誌かという押しつけがま

しさを感じている部分があるようにも思われるが、それをはずすということも考えにくい。内容が卒業生の求めるものにあっているかどうかさらに検討して行くことしかないであろう。

ただ、この点で、コマーシャルに関する研究から１つの示唆は可能である。コマーシャルを一番よく見ているのは誰かという研究で、コマーシャルは、これから買おうとしている人にその良さを伝えることよりも、すでに買った人にその選択が間違っていなかったということを伝えることに大きな成果を上げているという結果が得られたという。『母校通信』の役割はまさに卒業生にあなた方が卒業した大学はこんなにすばらしい大学で、そこを卒業したことはあなたにとって非常に良い選択であったということを確信させることにある。もちろん、そこで述べられる事例は正しいものでなくてはならず、そのためには、そのような記事を載せるための材料を豊富に提供できるよう、大学が努力することは当然のこととした上であるが、そのような卒業生へのケアが、長期的には関学の発展につながって行くことは疑い得ないと確信する。

おわりに

今回の卒業生調査における自由記述欄の記述を分析してみて、紀要における前回調査の自由記述に関する分析を思い出さざるを得ない。紀要の研究ノートの最後に、今回の自由記述が前回の自由記述と同じでないようにという願いを記した。そのような願いは叶わなかったが、次回の調査において改善が見られるように今後努力する必要があることを改めて述べると同時に、次回の調査のあり方についても今後議論が必要であることを強調しておきたい。

Ⅷ　全体のまとめ

はじめに

卒業生調査は、1999 年に第 1 回目が実施され、同時に、その後は 6 年毎に調査を実施するという方針(卒業生の卒業年次を 5 年おきとし、第 5 回までは調査対象の重複を回避し得る)も決定されたことに鑑み、第 2 回卒業生調査(2005 年)に続き、今回、無事に第 3 回卒業生調査(以下、本調査という)を実施することができた。このこと自体、きわめて意義深いことであり、この点を、まず確認しておかねばならない。なお、今回の実施主体は、旧“総合教育研究室”の仕事を承継した高等教育推進センターが、そのセンターの業務として取り組んだものであるこの点の詳細については、冒頭の久保田哲夫センター長による『第 3 回卒業生調査にあたって　実施の経緯と趣旨』を参照されたい。

それにも増して、本調査の実施の意義は、その実質的内容にある、といえよう。すなわち、①今回までの 3 回にわたる実施という点から、その回答内容の比較・検討による一般化(普遍化)が(ある程度)可能となったこと、②第 1 回調査から 12 年間のインターバルがあることから、時代の(社会的・経済的・文化的)変化を考慮した検証が可能となっていること、③以上の点を踏まえ、関西学院大学(以下、関学と略称する)の今後の中・長期を展望するうえで、本調査の積極的意義を認め、この調査をより有意義なものとするために改善すべき点(調査の目的、調査主体、調査方法・調査票構成等の形式面等)を、さしあたり可能とする“資料”が整った、ということであるだろう。

他方、本調査は、「教育効果」、「帰属意識」、「大学の評価」、「同窓向けサービス」、「卒業生の職業・職種」という 5 つの観点からの 29 の質問項目、および、「自由記述欄」を設けており、これら各分野については、すでに有意義な「まとめ」が記されている。

そこで、ここでの“全体のまとめ”においては、各分野の「まとめ」を考慮するとともに、それらとの重複をできるだけ避けるために、おおよそ上に示した 3 つの観点を念頭におき、全体をまとめることとする。

１．関学への“帰属意識”

ここにいう“帰属意識”は、調査項目に挙げられている諸観点を基本としつつも、「教育効果」、「同窓向けサービス」、「自由記述欄」等、「帰属意識」以外の観点等において現れているものをも、考察の対象としている。

さて、帰属意識の認識の核をなすものは、「建学の精神」の浸透度と卒業生相互の「紐帯」意識の認知、である(Ⅲ-7 参照)。ここでは前者に注目してその傾向をみてみよう。Mastery for Service の浸透度は、やや低いとみられる層では 7 割以上を維持しているものの、その高い層では全体の約 4 分の 1(24.3%)であり、最近の卒業生では、15～20%と低下の傾向がみられる。この傾向は、例えば、「Ⅳ-1 子供、身内に進学を勧めるか」という問いへの回答にも現われている。ここでは、「進学を勧めたい」割合は高いが、前回よりもやや減少している(前回 85.1%→今回 81.4%)。そして、「進めたい」理由として、「スクールモットーに共感できる」は、「キャンパスの雰囲気が良い」(53.9%)、「自分の母校である」(32.8%)についで 3 番目であり(20.8%)、第 2 回調査と順位は全く同じである。しかも、年代が下がるに従い、その“勧めたい”率は、1950 年卒業生は 40%、2011 年卒業生は 11.7%

と低下する傾向にある。

もっとも、他方では、「“Mastery for Service”を体現する世界市民」として示されている7要素のうち6要素については、6割以上の卒業生が「身についている」・「ある程度、身についている」と認識している。「他者への思いやり」については9割が「身についている」・「ある程度、身についている」と認識している。(Ⅱ-5、Ⅱ-6 参照)。

ところがさらに、「自由記述」を丹念に読み解いていくと、そこには、「関学の社会的評価が下がっていること、関西以外では知名度が低いことを何とかして欲しいという願い」が記されている(Ⅶ 参照)。このような記述“内容”自体は、後述の「大学教育への期待」とも関連するものであるが、このような内容を書かしめている記述“主体”からは、関学への、いわば“熱い”帰属意識を、読み取ることが可能である。ここには、充実していたキャンパスを離れても愛校心を失わぬ熱き卒業生が、その主観において感じているところの、関学が“世間”の風に晒されている姿に対する無念の思いが、率直に表現されている、と評価しうるであろう。

このような分析をうけ、さて、当面どのような対応が考えられるか。この点で、指摘されるべきことは、卒業生への働きかけによるアイデンティティの高揚の必要性である(Ⅲ-7 参照)。このような問題意識は、卒業生への情報伝達の重要性の指摘(Ⅶ 参照)とも共通するものである。

こうした観点から、さしあたり容易に思い起こすことのできるものは、「同窓向けサービス」の実態である。「同窓向けサービス」は、帰属意識を維持・発展するうえで大きな意味をもつ(Ⅴ-8 参照)からである。このうち、注目されるべきものは、「卒業生に対する情報媒体」であり、その中でも最も有力な(80%)「母校通信」である(今後の望ましい媒体としては、「母校通信」(41.2%)と「関学ホームページ」(33.5%)であるが、ここでは、前者を対象とする)。ところが、『母校通信』への不満の声を前提として、内容が卒業生の求めるものにあっているかどうかを検討すべきである、との指摘がなされている(Ⅶ 参照)。この点からすれば、本調査では、「母校通信」の内容自体について、卒業生の生の声を聞く問いが設定されていなかったことは、惜しまれるところである。今後の課題とされるべきであろう。

以上から、卒業生に対する帰属意識の高揚を持続・発展させていくことの必要性が、ある程度裏付けられ、また、そのために、さしあたり『母校通信』を中核とした“広報”の在り方、内容について更なる努力の必要性を指摘し得るであろう。そのための一つの有効な視座の示唆については、「Ⅶ 関学への意見や要望(自由記述)」を参照されたい。

2．大学教育への期待

この項目においては、おおよそ、調査項目の観点のうち、「教育効果」、「大学の評価」、「卒業生の職業・職種」および「自由記述」に現れている内容を、対象とするものである。なお、当然のことではあるが、ここでの「大学教育」は、あくまでも“関学”の大学教育を意味するものである。

さて、まずこの点での穏当な尺度は、“大学の評価の多様性”ということであり、この観点からすれば、本調査結果において、関学への評価は健全なものである、といい得るかもしれない(Ⅳ-5 参照)。もっとも、この点を確認したうえで、関学の今後を展望するため

に、卒業生の期待をもう少し細かく分析してみることが、“多様化”の内実、および、“関学における”多様化の生きた姿(イメージ)と、各々における課題を一定程度明らかにするうえで、有益であるだろう。

まず、ここにおける“教育”を、“全人教育”の観点からすれば、既に「1．関学への“帰属意識”」でも言及したように、本調査で新たに追加された項目である「Ⅱ-5 目指す人間像」においては、6 割以上の卒業生が、自分自身に身に付いていることを自覚していることが明らかとなっている。また、「Ⅳ-2 大学の教育に望むこと」においては、「マスタリー・フォア・サービスの精神で社会に貢献できる人間を目指した教育」が、「国際性を身につけることのできる授業」(38.3%)についで、2 番目に高い数値を示している(36.9%)。この点をいかに評価するかは、今後の課題であるものの、大学自体がユニバーサル化すると同時に、関学自体も“マンモス化”している現在、継続的に検証することが、既に検討した“帰属意識”との関連からしても、不可欠の課題であるだろう。

つぎに、大学における“高等教育”自体についての評価はどうだろうか。

まず、“教育内容”についてみるに、卒業生が“身に付けたかった能力”としては、「外国語能力」(62.1%)が突出し、「専門知識」(35.9%)と「資格の取得」(35.1%)が、これに続く。そして、「外国語能力」のうち、「英語教育」について、念頭にある“能力”の内実は「話す能力」であり、突出している(66.4%)。「プレゼンテーション能力」(24.3%)を含めると、9 割以上に達する。「外国語能力」への希望は、「大学の評価」の観点からも、「大学の教育に望むこと」として、3 番目に高い数値を示している(36.9%)。これに、「資格の取得」への希望を考慮すれば、「専門知識」への希望を大きく上回っている。この問題は、とりわけ、先に指摘した大学のユニバーサル化と無関係ではなく、関学に特有の課題ではないであろう。“大学の専門学校化”が言われて久しいが、このような一般的・普遍的問題性にいかに取り組むか、については継続的な問題意識を必要としよう。

しかし、他方で、「Ⅳ-3 関西学院に望むこと」において、上位 3 項目は、順に、「学問研究分野での知名度の向上」(46.7%)、「教育カリキュラムの充実」(29.8%)、「生涯学習プログラムの開発」(20.9%)となっており、この結果は、前回調査と同様である。しかも、「学問研究分野の知名度」は、いずれの卒業年層でも最も高い選択結果を示している。この点では、卒業生の関学に対する期待が、大学本来の姿の質的向上にあることは、明らかである。

我々は、以上に示された両者の、一見矛盾する卒業生の“希望”を、冷静に分析し展望を語り、形あるものにしてゆかねばならない。

さらに、より直截的には、「入試偏差値の向上」への希望の指摘を、ここで取り上げておこう。というのも、この点については、同じく、「関西学院に望むこと」のなかで、前回調査時(2005 年)には、第 7 位であったものが、先に示した上位 3 者に続いて、第 4 位となり(19.1%)、この 6 年間の間に卒業生の関心が、一層高まっていると考えられるからである。しかも、この選択肢についてさらに子細にみると、「入試偏差値の向上」は、「教育カリキュラムの充実」を挙げる卒業生の層(1996 年卒業生より年長の 3 つの層)と重なっており、これらの層は、年代的には 30 歳代後半から 40 歳代後半で、職場や家庭において教育や入試への関心が高まっていると推測されているからでもある(Ⅳ-3 参照)。また、「『偏差値が低下する中で、もっと外国語能力が身に付く国際性豊かな大学を目指してくれないと、

なかなか身内には勧めにくい』というのが卒業生の本学に対する評価であるとすれば、かなり残念な結果である」との指摘もある(Ⅳ-5 参照)。さらに、すでに挙げた、「自由記述」に見られる“関学の社会的評価の低下”に対する OB の嘆きやため息には、ここで指摘する社会的評価の原因が潜んでいるのではないだろうか。

我々を含め大学内の関係者にとっては改めて指摘するまでもないが、関学キャンパスの外にいて、常に関学の社会的評価に関心をもち、それゆえに、我々よりも、より敏感にこの問題に対する危惧を察知し得る存在である卒業生の声にいかにして応えていくか、は重要で緊急の課題である。

３．結びに代えて―卒業生調査の更なる発展のために

最後に、卒業生調査をより有意義なものとするための今後の課題に言及して、結びとしよう。

まず、体制の問題をどうするか、6 年おきのスケジュールの短縮の問題等については、既に冒頭で示唆した如く、久保田哲夫センター長による的確な指摘があり、それをご参照いただきたい。もっとも、そこでも指摘されているように、本調査においては、委員会の構成にあたって、個人ベースではなく、大学各部局の協力を求める体制により、それぞれの部局の問題意識を汲み上げるよう工夫された点は、今後、大学として責任をもって調査を行う場合に、当然のことではあるが、有益な示唆となるであろう。

つぎに、今回は、各部局からの参加も得、既に挙げた観点から質問項目の見直しがなされた。これ自体は発展であり、評価されるべきものであったが、本調査の結果、見直しにおいても、なお不充分である項目が指摘されている。

例えば、「教育効果」の観点からの質問項目に、「大学生活の充実度」の項目が入り、その具体的内容として、クラブ・サークル活動等が入っていることを、どのように評価するかは、さらに検討されるべきである。仮に「教育効果」にいう「教育」のなかに“全人”教育を含むというのであれば、これを明確したうえで行わなければ、“教育”効果の評価を見誤ることになるであろう。また、「帰属意識」の確認をするための質問項目に、功利性の観点から問われていると解釈されえ、かつ質問の意図が曖昧である、と指摘されているものがある(Ⅲ-7 参照)。さらに、質問項目のなかには、例えば、既に指摘した『母校通信』の内容等のように、より細かく卒業生の声を聞くことが有益なものもあるであろう。

もっとも、以上のような、卒業生調査の体制、および、その調査の具体的内容の更なる見直しについては、その前提となる観点とともに、そもそも我々は何のために卒業生調査をしているのか、という卒業生調査の意義の根本に立ち返って検討する必要がある。その意味においても、本調査(報告書)は、重要な資料を提供していると、考えられる。本調査報告書が、卒業生調査の新たなステップの礎になることを念じて、まとめに代える次第である。

第３回 関西学院大学 卒業生調査

2011 年８月

本調査は、広く社会でご活躍中の卒業生の皆様からのご意見をお伺いし、より幅広い視点から本学の姿をとらえることを目的として、実施いたします。

〈調査の主眼点〉

１．卒業生の教育効果の測定
２．卒業生の視点による大学評価
３．同窓向けサービスへの評価

大学を取り巻く環境が大きく変化する中で、これからの本学の教育のあり方、同窓・社会との繋がり、本学の進むべき指標を得るため、卒業生の皆様方の忌憚のないご意見をお伺いしたく存じます。

今回の調査では、卒業生181,181名のうち、無作為抽出法により、6,815名を回答者として抽出させていただきました。ご回答いただいた調査票は、目的外用途には一切使用せず、厳重に管理いたします。

なお、本調査の集計結果・報告書につきましては、2012年５月以降に大学のホームページなどで公開させていただくとともに、要旨を広く学外にも公表する予定にしております。

提出期限 ： 2011年８月31日（水）
提出方法 ： 同封の返信用封筒をご利用ください。
問合せ先 ： 〒662-8501 兵庫県西宮市上ケ原一番町1-155
関西学院大学 高等教育推進センター
Tel：0798-54-7420　Fax：0798-54-7421
e-Mail: 3rdGraduate@kwansei.ac.jp
（事務室開室時間　９時～16時）

土・日・祝日、および、８月13日～21日（夏季休暇）は、事務室が閉室のため、お電話・メールなどによる問い合わせに対応できませんので、ご了承ください。

〈回答方法〉
回答項目が印刷されている場合は、指示がある場合を除き、１つ選んで、数字を○で囲んでください。
「その他」を選ばれた場合、「理由」など述べる場合は、括弧内に具体的に記入ください。

Ｆ１．現在の年齢（2011年８月１日現在）をお答えください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿**歳**

Ｆ２．性別についてお答えください。

1　男性　　**2　女性**

Ｆ３．現在お住まいの場所の郵便番号を先頭３桁のみ記入ください。
海外の場合は、国名あるいは地域名を記入ください。

（　　）

Ｆ４．あなたはいつ大学を卒業されましたか。

1　1951（昭和26）年　　**2　1956（昭和31）年**　　**3　1961（昭和36）年**
4　1966（昭和41）年　　**5　1971（昭和46）年**　　**6　1976（昭和51）年**
7　1981（昭和56）年　　**8　1986（昭和61）年**　　**9　1991（平成３）年**
10　1996（平成８）年　　**11　2001（平成13）年**　　**12　2006（平成18）年**
13　2011（平成23）年

Ｆ５．あなたは何学部を卒業されましたか。

1　神学部　　**2　文学部**　　**3　社会学部**　　**4　法学部**
5　経済学部　　**6　商学部**　　**7　理学部（理工学部）**　　**8　総合政策学部**

Ｆ６．あなたは関西学院の中学部、高等部に在籍されましたか。
該当するものすべてを選んでください。

1　中学部　　**2　高等部**

Ｆ７　あなたは大学時代に自宅外から通学した経験がありますか。

1　はい　　**2　いいえ**

Ｆ８．あなたは大学時代にクラブ・サークルなどの団体に入っていましたか。

1　入っていた　　**2　入っていなかった**

Ｑ１－１．あなたの大学時代の生活は、どの程度充実していましたか。

1　非常に充実していた　　**2　かなり充実していた**

3　どちらとも言えない　　**4　あまり充実していなかった**

5　全然充実していなかった

Ｑ１－２．大学時代の生活で、何が充実していましたか。

1　授業や研究　　**2　クラブ・サークル活動**

3　ボランティア・社会奉仕活動　　**4　大学外での生活**

5　その他　（　　）

Ｑ２．大学時代に学んだことや経験は、現在の生活にどの程度役立っていると思いますか。
それぞれについて１～６の数字でお答えください。

	非常に役に立っている	かなり役に立っている	どちらとも言えない	あまり役に立っていない	全く役に立っていない	該当しない
a）キリスト教関連科目、チャペル	1	2	3	4	5	6
b）外国語	1	2	3	4	5	6
c）上記ａ）ｂ）以外の一般教養的な科目	1	2	3	4	5	6
d）専門科目	1	2	3	4	5	6
e）ゼミ（卒論作成等を含む）	1	2	3	4	5	6
f）クラブ・サークル活動（宗教活動を含む）	1	2	3	4	5	6
g）上記以外のボランティア・社会奉仕活動	1	2	3	4	5	6
h）その他　（　　）	1	2	3	4	5	6

Ｑ３．在学中に身に付いた能力、よくやったことを、次の中から３つ以内で選んでください。

1　一般的な教養　　**2　専門的知識**

3　外国語能力　　**4　ＯＡ・ＩＴ機器などの使用法**

5　プレゼンテーション能力　　**6　ディベート能力**

7　コミュニケーション能力　　**8　資格の取得**

9　海外留学　　**10　クラブ・サークル活動**

11　友人をつくる　　**12　人生について考える**

13　その他　（　　）

Ｑ４．在学中に身に付けたかった能力、もっとしておけば良かったと思うことを、次の中から３つ以内で選んでください。

1　一般的な教養　　**2　専門的知識**
3　外国語能力　　**4　ＯＡ・ＩＴ機器などの使用法**
5　プレゼンテーション能力　　**6　ディベート能力**
7　コミュニケーション能力　　**8　資格の取得**
9　海外留学　　**10　クラブ・サークル活動**
11　友人をつくる　　**12　人生について考える**
13　その他　（　　）

Ｑ５－１．在学中に自分自身の「英語力」のどのスキルをもっと伸ばしたかったですか。

1　聞く力　　**2　話す力**　　**3　読む力**　　**4　書く力**
5　プレゼンテーション能力　　**6　十分なスキルが身についた**

Ｑ５－２．今後、関西学院の英語教育はどのスキルに重点を置くべきだと思いますか。

1　聞く力　　**2　話す力**　　**3　読む力**　　**4　書く力**
5　プレゼンテーション能力

Ｑ５－３．1992年から始まった上級者対象の英語インテンシブプログラムを受講しましたか。

1　1992 年度以前に入学したため、受講していない
2　受講した
3　受講しなかった

Ｑ６．英語以外で在学中に身に付けたかったのはどの言語ですか。

1　ドイツ語　　**2　フランス語**　　**3　スペイン語**
4　中国語　　**5　朝鮮語**　　**6　その他**　（　　）

Ｑ７．スクールモットー（Mastery for Service）をどの程度意識していますか。

1　常に行動の規範としている　　**2　頻繁に意識している**
3　時々意識する　　**4　全く意識したことがない**

Ｑ８．あなたは、関西学院でキリスト教に触れたことで、自分自身の考え方や生き方に影響を受けたと思いますか。

1　強くそう思う　　**2　そう思う**
3　あまりそう思わない　　**4　全くそう思わない**

Q９．関西学院大学で学んだことが社会人として役に立っていると思いますか。

1　強くそう思う　　**2　そう思う**

3　あまりそう思わない　　**4　全くそう思わない**

Q10－１．関西学院大学の卒業生ネットワークが、社会の中で有利に働いていると思いますか。

1　強くそう思う　　**2　そう思う**

3　あまりそう思わない　　**4　全くそう思わない**

Q10－２．どのようなことでそう思いますか。

（　　）

Q11．関西学院では、2008年、本学に関わる人すべてがその人生を通じて実現すべき「めざす人間像」として、下記の７つの身につけるべき能力を定めました。現在、それぞれの要素をどの程度身についていると思いますか。
それぞれについて１～４の数字でお答えください。

	身についている	ある程度、身についている	あまり身についていない	身についていない
a）世界への視野	1	2	3	4
b）高い識見と倫理観	1	2	3	4
c）大きな志	1	2	3	4
d）他者への思いやり	1	2	3	4
e）確立した自己	1	2	3	4
f）行動力と存在感	1	2	3	4
g）社会変革の気概	1	2	3	4

Q12．関西学院のシンボルといえば、何を思い浮かべますか。自由にお書きください。

（　　）

Q13．校歌「空の翼」を歌えますか。

1　完全に歌える　　**2　１番のみ歌える**

3　少し歌える　　**4　全く歌えない**

Q14－１．あなたの現在の職業・職位は次の中のどれに当てはまりますか。

1　経営者・会社役員（自営を含む）　　2　管理職　　3　一般職
4　自由業　　5　学生　　6　無職

Q14－２．Q14－１で「４」とご回答いただいた方は、よろしければ、具体的にお書き下さい。

（　　）

Q14－３．Q14－１で「１～３」とお答えいただいた方にお伺いいたします。
現在勤務先の業種を、次の中から選んでください。

1　農林漁業
2　鉱業
3　製造業
4　建設業
5　電気・ガス・熱供給・水道業
6　運輸・郵便業
7　不動産業、物品賃貸業
8　卸売業、小売業
9　金融業、保険業
10　情報通信業
11　医療、福祉
12　教育、学習支援業
13　サービス業
14　公務
15　その他　（　　）

Q14－４．Q14－１で「３」とお答えいただいた方にお伺いいたします。
現在の勤務先での職種を、次の中から選んでください。

1　事務・企画職
2　営業職
3　販売・サービス職
4　専門職（会計士、税理士、弁護士、司法書士、医師など）
5　技術・研究職
6　ＩＴエンジニア職
7　クリエイティブ職（デザイナー、コピーライターなど）
8　その他　（　　）

Q15－１．自分の子供、身内に関西学院大学への進学を勧めたいと思いますか。

1　思う　　**2　思わない**

Q15－２．「１」と答えた方は、その理由を次の中から２つ以内で選んでください。

1　教育スタッフが充実している
2　スクールモットーに共感できる
3　キャンパスの雰囲気がよい
4　教育施設が充実している
5　有能な人材を送り出している
6　就職に有利である
7　スポーツ・文化活動が活発である
8　偏差値が高い
9　高校の先生・塾が勧める
10　自分の母校である
11　自宅から通える
12　歴史や伝統がある
13　奨学金制度が充実している
14　その他　（　　）

Q15－３．「２」と答えた方は、その理由を具体的にお答えください。

（　　）

Q16. これからの関西学院大学の教育にどのようなことを望みますか。
次の中から２つ以内で選んでください。

1　今まで通りで構わない
2　Mastery for Service の精神で社会に貢献できる人間を目指した教育
3　もっと広い教養が身につくようなカリキュラム
4　プレゼンテーション能力などの一般的な能力を養うカリキュラム
5　会計・情報処理などの実務的な能力が身につくようなカリキュラム
6　資格取得に結びつくカリキュラム
7　外国語能力を身につける授業の充実
8　国際性を身につけることのできる授業（海外セミナー、留学などを含む）の充実
9　企業インターンシップなどの充実
10　その他　（　　）

Q17. これからの関西学院大学にどのようなことを望みますか。
次の中から２つ以内で選んでください。

1　今までのやり方の堅持
2　学問研究分野での知名度の向上
3　スポーツ分野での知名度の向上
4　マスコミへの登場回数の増加
5　入試偏差値の向上
6　教育カリキュラムの充実
7　生涯学習プログラムの開発
8　大学の地域への開放
9　同窓家族向けの入学制度の導入
10　同窓会活動の活発化
11　その他　（　　）

Q18. 関西学院大学のイメージについて項目ごとに番号を○で囲んでください。

明るい	**1……2……3……4……5……6……7**	**暗い**
親しみやすい	**1……2……3……4……5……6……7**	**親しみにくい**
気力が充実している	**1……2……3……4……5……6……7**	**無気力**
開放的	**1……2……3……4……5……6……7**	**閉鎖的**
暖かい	**1……2……3……4……5……6……7**	**冷たい**
前向き	**1……2……3……4……5……6……7**	**後ろ向き**
きれい	**1……2……3……4……5……6……7**	**汚い**
高い	**1……2……3……4……5……6……7**	**低い**
居心地が良い	**1……2……3……4……5……6……7**	**居心地が悪い**
進歩的	**1……2……3……4……5……6……7**	**保守的**

Q19. 卒業生に対する情報提供は充実していると思いますか。

1　そう思う　　2　そう思わない

Q20. 関西学院大学の情報に触れる主な媒体は何ですか。

1　マスコミ　　2　同窓会誌「母校通信」
3　大学案内「空の翼」　　4　２．３以外の学院発行物
5　関西学院ホームページ
6　ツイッター、フェイスブックなどＳＮＳ（ソーシャルネットワークサービス）

Q21. 関西学院大学の情報を得るには、どのような媒体が望ましいですか。

1　マスコミ　　2　同窓会誌「母校通信」
3　大学案内「空の翼」　　4　２．３以外の学院発行物
5　関西学院ホームページ
6　ツイッター、フェイスブックなどＳＮＳ（ソーシャルネットワークサービス）
7　その他　（　　）

Q22. 最近５年間で、どれくらい大学を訪れましたか。

1　11回以上　　2　４～10回　　3　１～３回　　4　訪れたことはない

Q23. 卒業後、大学を訪れた主な目的を、次の中から２つ以内で選んで下さい。

1　大学祭・同窓会などで　　2　後輩のクラブ活動の指導で
3　図書館・チャペル・関西学院会館など大学施設の利用で
4　ゼミの先生や仲間に会いに　　5　聴講や研究で
6　卒業・成績証明書をもらいに　　7　懐かしさを感じて
8　家族に母校を見せるために　　9　公開講座・各種講演会のために
10　その他　（　　）

Q24. 卒業後、同窓との繋がりをどのように持っておられますか。
次の中から２つ以内で選んでください。

1　同窓会地域支部に参加している
2　企業内・職域などの同窓の集まりに参加している
3　クラブ・サークル・ゼミの集まりに参加している
4　先輩・同期・後輩とのプライベートな繋がりがある
5　先生との繋がりがある
6　スポーツ・音楽などの行事を通じて
7　特別なものはない

Q25－１．関西学院への寄付についてお尋ねします。

1　寄付をしたいと思う

2　寄付をしたいとは思わない

⇒よろしければ、その理由をお書き下さい。

（　　）

Q25－２．使途を指定できる寄付に興味がありますか。

1　興味がある

2　興味はない

Q25－３．指定寄付を設置する場合、下記のどのような目的が望ましいと思いますか。
次の中から２つ以内で選んでください。

1　家計急変者の就学支援

2　恒常的家計困窮者の就学支援

3　難民学生の支援

4　留学生の受け入れ支援

5　在学生の留学支援

6　教育環境の整備

7　学業成績優秀な学生への奨励

8　スポーツ活動への支援

9　文化活動への支援

10　ボランティア活動への支援

11　キャンパスの緑化・自然維持

12　その他　（　　）

Q26. 卒業後に利用可能な大学施設の利用に関してお尋ねします。
下記の施設について、それぞれ１～３の数字でお答えください。

	利用したことある	利用できることを知っているが、利用したことがない	利用できることを知らなかった
a）関西学院会館	1	2	3
b）大学図書館（見学を除く）	1	2	3
c）大阪梅田キャンパス	1	2	3
d）東京丸の内キャンパス	1	2	3

Q27. 関西学院会館にはレセプションホール、会議室、レストラン、チャペルがありますが、どのような目的で利用したいと思いますか。
次の中から２つ以内で選んでください。

1　クラブの同窓会・会合　　2　ゼミの同窓会・会合
3　家族や友人と食事　　4　結婚式・披露宴での利用
5　その他　（　　）

Q28. 大阪梅田キャンパス・東京丸の内キャンパスで下記のプログラムが実施されるとしたら、どのプログラムに参加したいと思いますか。
次の中から２つ以内で選んでください。

1　昼夜開講制大学院授業
2　各種の資格取得関連講座
3　外国語教育プログラム
4　一般教養プログラム
5　ビジネスパーソン向けプログラム
6　その他　（　　）

Q29. 関西学院が、卒業生・一般向けに実施しているプログラム・活動についてお尋ねします。
下記のプログラム・活動について、それぞれ１～３の数字でお答えください。

	参加したことある	プログラム・活動を知っているが、参加したことがない	プログラム・活動を知らなかった
＜大阪梅田キャンパス＞			
a）丸の内講座	1	2	3
b）K. G. 梅田ゼミ	1	2	3
c）K. G. ジョブサポート	1	2	3
d）各種講演会・セミナー	1	2	3
e）チャペルアワー	1	2	3
＜東京丸の内キャンパス＞			
f）丸の内講座	1	2	3
g）サークル活動	1	2	3
h）ウェルカムパーティ	1	2	3
＜各キャンパス＞			
i）エクステンションプログラム	1	2	3

Q30. 卒業生として、関西学院に期待すること、ご意見・ご要望など思うことがあれば自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

あとがき

21 世紀の関学を展望し 1999 年に開始された第 1 回卒業生調査も、そこで立てられた企画者の意思に従い、このほど第 3 回目の調査を終え、無事ここに報告書を刊行することができました。このことをまず喜びたいと思います。とりわけ、今回の調査においては、委員会の構成員として、各部局のみなさまのご協力をいただき、報告書の作成をご担当いただいたのみならず、調査票構成の枠組み自体の見直しのための作業にも加わっていただきました。お陰で、過去 2 回の卒業生調査をより良い形で展開することできました。ここに、関係者のみなさまの労を多とし、改めて厚く御礼申し上げます。

もっとも、この調査報告書を更に充実したものとするためには、その実施体制をはじめ実施間隔の短縮の問題、調査票構成の枠組み等についても、更に改善すべき点が残されていることも事実です。この点の課題を胸に、新たな飛躍を遂げていきたいと存じます。

最後になりましたが、突然に届いた封書を開き、そこから調査票を取り出し、丹念に回答をされ、さらには自由記述欄にまで関学への想いを綴ってくださいました卒業生のみなさま、みなさまおひとりお一人のご協力がなければ、そもそもこの報告書は、存在することができませんでした。時経てぞ、今なお、その関学に想いを馳せてくださるお心に、衷心より無量の感謝を申し上げます。

関西学院大学のキャンパスの内と外が一体となり、明日の関学が進化・深化するために、お互いに手を携えて絶えざる努力をしていきましょう。

高等教育推進センター
第 3 回卒業生調査報告書編集委員会委員
原田　剛

執筆者一覧

平林　孝裕	大学宗教主事	・Ⅲ 帰属意識・Ⅲ 帰属意識(まとめ)・Ⅴ 同窓向けサービス(まとめ)
寺地　孝之	教務部長	・Ⅱ 大学の評価(まとめ)
久保田哲夫	高等教育推進センター長	・Ⅶ 関西学院への意見や要望(自由記述)
原田　　剛	高等教育推進センター副長	・Ⅱ 教育効果(まとめ)・Ⅷ 全体のまとめ
宮脇　　貢	校友課長	・Ⅴ 同窓向けサービス
磯辺　淳子	広報室課長	・Ⅴ 同窓向けサービス
小野　　宏	企画室総合主管	・Ⅱ 教育効果
橋谷　満恵	教務課長	・Ⅳ 大学評価
戸田　　隆	生涯学習課長	・Ⅴ 同窓向けサービス
尾木　義久	入試課長	・Ⅳ 大学評価
池田　幸宏	キャリア支援課長	・Ⅲ 帰属意識・Ⅵ 卒業生の職業・職種
市河原雅子	大学図書館利用サービス課長	・Ⅴ 同窓向けサービス
澤谷　敏行	高等教育推進センター次長	・Ⅱ 教育効果・Ⅲ 帰属意識
永井　良二	高等教育推進センター事務長補佐	・Ⅱ 教育効果・Ⅴ 同窓向けサービス

第 3 回関西学院大学卒業生調査報告書

発行日　2012 年 3 月 31 日
編集者　第 3 回卒業生調査報告書編集委員会
委員長　久保田　哲夫
発　行　関西学院大学高等教育推進センター
〒662-8501　西宮市上ケ原一番町 1-155
電話　0798(54)7420
印　刷　水山産業株式会社
〒653-0012　神戸市長田区二番町 3 丁目 4-1
電話　078(577)3070 (代)

125
KWANSEI GAKUIN
1889–2014